

「Battle of カニコーセン!」

進行豹

△んつと……これで大丈夫だよな？ 間違いないよね？ うん△

——外部刺激。振動。“耳”。耳への振動——つまり音。音は、聞くもの。

「おかしいな……どうして動いてくれないんだろう」

聞く、音。解析。パターンを把握。構成を認識——これは、音声。声。言語。

「ちゃんと覚えたよね？ 教わったとおり出来たよね？ 大丈夫、何回も確かめたもん」

言語。音節、単語、語彙を検証。この言語は、99.999%以上の確率で日本語。

「ねえ、おきて、起きられないの？ おーい、まぶたを開けてくださいー」

日本語と断定。意味を解析——理解。命令。“まぶたを開ける”。

まぶた——“目”を覆っている、“皮膚”の膜。

現状確認。閉じている。行動——まぶたを開く。

「あっ！ 気がついた!？」

「気が付く」

気が付く、気付く——△気にとめていなかったものに意識が向く△ もしくは

△意識を取り戻す。正気に返る△。

「僕は、気にとめていなかったものに意識を向けた？」

「え？ え？ な、なんのお話？」

誤。再試行。

「僕は、意識を取り戻した？」

「あ、うん。そうだよ！ タクトはね、えっとね、気絶してたの。倒れちゃってたの」

声。さつきより高い、強い、アクセントの強い——“明るい”声。

「ねえ、大丈夫？ おかしなところない？ 体、ちゃんと動く??？」

「おかしなところ——異常」

考える。情報が足りない。“見る”——視界に入っているものに注意し、解析する。

“見る”——室内。天井。照明。僕は——ベッドに横たわっている。

——首を動かす。壁。人。動き。

「うん、異常。へんなところがあったら、ちっちゃなことでも全部おしえて？」

へんなところ——異常動作を示す箇所。ちっちゃなことでも——軽微な異常でも。

了解。解析——解析不能。現状との比較対象となるデータ、無し。

「わからない。情報が足りない」

外部情報を優先で収集開始。

“見る”。僕に話している人——会話の相手。

身長、目測で一三〇センチメートル前後。体格、貧弱。戦闘能力、恐らく皆無。

外見的特徴。金髪、前髪を切りそろえた——おかつぱ頭。深いスマイレ色の瞳。

明度の高い白い肌——コーカソイドと推定。

性的特徴、乏しい。服装、白い袖なしのワンピース。スカート。女性である確率が高い。

白い袖なしのワンピースは、スコットランド民族衣装ではない。

が——単純な女装趣味である確率は否定しきれない。

「どうしたの？ あ！ ひよっとして、わからないところがわからない？」

動き——“首を傾げる”。おかつぱの髪が揺れる。刺激。鼻。嗅覚。“甘い匂い”。

「じゃ、いつこずつやつていこうね？ 情報、ね？ 知りたいこと、なにかある？」

接近してくる。顔。

スマイレ色の瞳に、小さく歪んで映り込む人物。

細身の——心細げな男性……これが、“僕？”

「大丈夫だよ？ なんでも聞いて？」

「なんでも——」

「うん。なんでも。知ってることなら、どんなことでも教えてあげる」

確認すべき情報。優先順位は——ノイズ——訂正——迷い／混乱——

再試行。確認すべき情報の優先順位は、誰・どこ・いつ。

「誰ですか？ あなたは」

「マーシャのこと、思い出せないの！？」

声と同時に、会話相手の体が僕に急接近する。

会話相手とほぼゼロ距離。再認識。極めて造作の整った顔。が、表情の判断が困難。

哀しさ／嬉しさ。喜び／寂しさ。全ての要素が同時に満たされているため。

「あっ！？ ごめん、揺らしちゃったね」

揺れたのは、ベッド。小さな刺激に長く揺れてる。理由推定——スプリングが強い。

「揺れたけれども、問題は発生しない。質問。あなたは、嬉しい？ それとも、哀しい？」

「哀しいよ？ マーシャのこと、タクトが忘れちゃったんだもん。けど、でも——また

覚えてもらえばいいから、平気なの」

表情を隠そうとでもするように、小さな顔を両手が覆う。

くすん、と。音。鼻をすする音と認識。

同時に一瞬、指と指との間からスマイレ色をした瞳が覗く。

「だから、前に進もうね？ 一緒にだったら、また進めるから」
小さな手が、まっすぐ僕へと伸ばされてくる。

「立てる？ 無理じゃなければ、とりあえず体を起こしてみよう？」

「上体を起こす。“無理”か“無理ではない”か。——恐らく後者。起こせると判断」
伸ばされた手を受け取って、腕に力をこめて上体を引っ張っ！！？

「ふわわっ！？」「あっ」

軽度の衝撃。小さな体が僕の胸板に倒れ込む。

感覚情報。軽い。柔らかい。とても小さい。甘い匂い——匂いなのに、とても暖か。

「ごっ、ごめんねっ？ マーシャの体重じゃ支えにもならなかったね」

小さな体がバッと離れて手を離す。

元の状態に復帰——いや、周辺気温が低下——してないと確認。感覚系が誤認。

「ええと、一人で起きられるかな？ がんばれる？」

「可能。恐らく」

自分の両手をベッドサイドに。それを支えに、慎重に上体を起こしていく。

「わ、すごい——うまいうまい！ もうちよっと！ できたっ！」

会話相手は笑顔。拍手。

理由を推定——僕の動きが、あるいは僕が動くこと自体が、とても嬉しい。

「これで、もっと落ち着いて話せるね？ 聞きたいこと、整理できた？」

「聞きたいこと——『あなたは、誰？』」

「マーシャはね、ええと、マーシャは、わたしの愛称なの。愛称じゃない、ちゃんとした

名前は、マトリョーシャ」

「マトリョーシャ。愛称がマーシャ。——僕も、あなたをマーシャと呼んでも？」

「もちろんだよ！ つていうか、ううんと、もっと普通に話せないかな？ マーシャとタ

クトは……きょうだい！ そうだよ、姉と弟の姉弟なんだから」

「きょうだい。……マーシャと僕の関係？」

「そうだよ。マーシャはタクトのおねえちゃんなの」

「姉——片親、または両親を同じくすることもたちのうち、年長の女性」

論理展開。演繹。マーシャは、僕の姉。ならば——

「マーシャは、年長？ 僕より」

「そうだよ？ そうは見えないって知ってるけど、正真正銘、おねえちゃん」

「マーシャは、女性？」

「もちろんだよ！ マーシャ、女の子に見えない？」

動作。マーシャが頭、足を縦軸として回転させる。

性的特徴——再検証——視覚的には、やはり極めて乏しい。

が。別検証により断定。マーシヤは、女性。暖かで、柔らかで、甘い匂いがする。

「理解。マーシヤは女性。年長。片親、もしくは両親を僕と同じくする、僕の姉」

「うん、そう！ マーシヤはタクトのおねえちゃん！」

「了か」「その“了解”ってやめてほしいな？ いつもみたいにお話しようよ」

「いつもみたい？」

「そうだよ？ マーシヤが話してるみたいなき……もつと、気軽な、普通の口調」

「“普通の口調”——了っ——わかった。『こんな感じ？ マーシヤおねえちゃん』」

「うんうん、そうだよ！ タクトのおしゃべり、いつもはそんな感じだよ！」

「びよこん！ マーシヤがまた一跳ねする。姉なのに、僕よりずっと子供っぽい。」

「でさ、おねえちゃん。もう一つ質問、いいかな？ いや、二つか」

「うん、なんでも聞いて？」

「僕は、誰？ ここは、どこ？」

「あー、だよね。そうだよね」

また、あの表情。嬉しくて寂しくて、喜んでるのに悲しんでる。

「……聞いていけない質問だった？」

「ううん！？ 全然そんなことない。ただ、ええとね？ その……」

ん、と吐息。そしてゆっくり、おねえちゃんは小さな両手を広げ、その顔を覆う。

「マーシヤのこと思い出せないって聞いた時……覚悟、してたつもりだったんだけど……」

ほんの僅かに、おねえちゃんの首が横に振られる。

「タクト……記憶……記憶を……失くしちゃったんだ……」

「記憶……」

おねえちゃんの眼が僕を見つめる。寂しげに、けれども安堵の色をたたえて。

記憶を探る。自分の中に、部屋の景色に、スマイレ色をした瞳の中に——

「記憶……無いみたい。手がかりさえも……何にも思い出せないよ」

おねえちゃんの大きな瞳が、じいっと僕を見つめつづける。

ぼんやりと映り込む僕は、とても頼りなさげに見える。

「だから教えて、おねえちゃん。僕は誰？ ここは……どこ？」

「タクトは、タクト。マーシヤの弟。ここは、日本。埼玉県有加和越市っていうところ」

「僕はタクト、おねえちゃんはマーシヤ。ここは日本、埼玉、加和越市」

言われたことを繰り返し、事実関係を把握する。

描き出された関係性は一つの推論を導き出す。

「なら、僕たちは日本人？」

「そうだよ。あのね、ハーフってわかる？ 覚えてる？」

「ハーフ……うん。混血っていう意味だよね？」

「うん、そう。タクトとマーシヤのママはロシア人で、パーパが日本人なの。それでね？
国籍もちゃんと日本だから安心してね？ 日本語も多分、完璧に話せてるから……大丈夫」
「うん」

おねえちゃんが、何故だか急に心細げな顔になるから、僕がすっかりしなきやと思う。
「なら、僕たちの、名字は？」

「ミヨウジ？ って??？」

「ファミリーネーム。僕たち家族の、家の名前。姓名の姓」

「あ、うん。もちろんそのミヨウジだね。そのミヨウジならね、えっとね……」

きよるきよる、おねえちゃんが辺りを見回す。

口元を、小さく小さく動かしながら、あたりをうろろうろつきまわる。

（どうしよう、困っちゃたな……あの人の名字だなんて、マーシヤ、全然覚えてないよ。
ソーニヤのファミリーネームなら、ボルコンスカヤなんだけど——ボルコンスカヤって
いう名字、多分、日本だと目立っちゃうよね？）

……僕、ものすごく耳がいいみたいだ。おねえちゃん、多分、聞こえないように話して
るつもりなんだと思うんだけど、全部が全部聞こえてきちゃって、少し悪い気がする。

（けど、この位の問題を切り抜けれなきゃ、タクトを守ってあげるなんて出来っこない
し……あ、そうだ！ 問題を解くときは、考える前に良く見なさいってソーニヤが）

「あー」

嬉しげな声と同時に、おねえちゃんがベッドを降りてトテトテ駆けだす。

小さな手が、ドアノブに掛けられているタブへと伸ばされる。

【このお部屋の清掃は田中信子が担当しました】

そうしてタブをスカートのポケットにしまいこみ、おねえちゃんはベッドへ戻ってくる。

「田中だよ？ タクトとマーシヤのファミリーネーム」

「田中。それって、よくある名字なの？」

「え？ うん、多分——あ、じゃなくて、そうなの、良くある名字なの。マーシヤたちの
親戚なんて、みいんな田中なんだから」「ん……」

整理できかけてた頭の中が、おねえちゃんのその一言でまた混乱する。

「ならば、さっきのタグ。ドアに掛ってたやつ」「えー!?」

「あのタグの田中信子さんってひとは、親戚の人なの？ それとも、良くある名字の他人？」
おねえちゃんはまじまじ僕を見……ホっとしたように首を傾げる。

「ごめんね？ おねえちゃん、ちよっとわからないの。ひよっとしたら、親戚かもしれない
いし、違うかもしれない。パーパ、お父さんの姓を田中ってことにした——じゃないや！
ええと、お父さんの姓が、田中ただけだね？ けど、お父さんは、ずうっと前にタクト
とマーシヤを置いていなくなっちゃったの」

「そうなんだ」

おねえちゃんも知らないことなら、今 僕が考えたってわかるわけない。

から、名字の話はひとまずおいて、次の疑問へ思考を進める。

「ここは、信子さんの家？」

「え？ ううん、全然違うよ」

おねえちゃんはきよるきよる室内を見回して、満足そうにウフフと笑う。

「ここはね？ タクト。ラブホテルっていうホテルなんだよ？」

「らぶほてる——ラブ・ホテル——英語？」

「うん、きつとそう。LOVEっていうのは英語で愛。HOTELは英語で宿泊所だから

……ここは、『愛の宿泊所』っていう意味のホテルなの」

「愛の宿泊所」

オウム返しに言葉を返し、僕も室内を観察する。

大きく白くまん丸く、枕が二つあるベッド。

レースのカーテンも白の薄手。その手前には、厚手の、花柄のカーテン。

ライトグリーンの壁には風景画がかけられ、その下側には、木目調のパネル。

木製のテーブルに、白いスタンド。天井からは小さなシャンデリアが下がってる。

「この内装は……カントリー調がベース、けれど照明が不統一——で、あってるかな？」

「どうなのかな？ おねえちゃん、インテリアとかくわしくないの。けどね？ かわいい

お部屋でしょ？ ボタンで選べたから、いちばんかわいいのにしたの」

くすくす、おねえちゃんが笑いだす。

「っていうかね？ 他のお部屋がすごい！ 水族館みたいにおっきな水槽があうるお

部屋に、鎖と手錠でジャラジャラのお部屋、それから、回転木馬があるお部屋まであった

んだ！ おもしろいよね？ あんなお部屋で、どうやったら眠れるんだろうね？」

「回転木馬——遊具まであるんだ」

「そうなの！ それなのにね？ おねだんは他のホテルよりも全然安い。一泊で五八〇

〇円。それだけじゃなく、休憩だけなら三時間で二九八〇円で済んじゃうの」

「……愛の宿泊所。格安の料金。休憩だけの利用も可能。部屋はさまざま。遊具もある」

考える——推論は、すぐに導きだされる。

「ひょっとしたら、宗教的な施設なのかもしれないね。困窮した人たちのために安価に提

供される……緊急避難的な宿泊所なのかも」

「緊急避難的な、宿泊所？」

「そう考えると設備の意味が通じるように思うんだ。水族館みたいな部屋には癒し効果と

かがありそうだし……手錠と鎖はさ、不安や病気で暴れちゃったりする人が、自分を抑え

るために使うんだと思う。そういう、弱った人が使う避難所兼、宿泊所」

ぼんっ！とおねえちゃんが手を打ち鳴らす。

「そっか！ やっぱリタクトはおねえちゃんよりずつとずうつと頭がいいねえ」
にここにここにこ、おねえちゃんは満面の笑みでうんうん何度も頷いている。

「言われてみたら、本当にもう絶対そうにきまつてるもん！ この丸いベッドも——きつと、円卓と同じ意味のベッドなんよ」

「円卓って？」

「覚えて……ないんだよね。ええとね、ソーニヤが良く聞かせてくれたお話」

見えない剣を捧げるように、おねえちゃんは右手を真直ぐ前に突き出す。

「円卓っていうのは、いにしえのイングランドの王さま、アーサー王とその騎士たちが囲んだ丸いテーブルのことなんだよ？ そのテーブルにつく人たちには上も下もなく、対等だっていう意味を持つてるんだって」

「ああ」

おねえちゃんの言ってることが、僕の中でもつながってくる。

「愛のホテルであるからこそ、ベッドも円卓仕様なんだ。このベッドで眠る者は、上も下もなくみんな対等——そういう意味が込められてるんだね？」

「だよね、きつと。円卓の騎士のモットーは、受容・適応・改善なんだし」

「追い詰められた人たちは、ラブホテルの丸いベッドで、過去を受容し、現状に適応し——そして、未来へ向けた改善のために目覚めるんだね」

「うんうん！ すごいね、ラブホテルって、とつても素敵なホテルだね」

「すごいのはおねえちゃんだよ。そんな素敵なホテルを見つけてくれたんだし」

「そうかな？ そう？ えへへへへへへ」

照れくさそうに小さく笑い、おねえちゃんは、ああ、と小さな声をあげる。

「きつと、回転木馬も同じ意味だね。こどもたも、みんな平等で対等だから」

「なるほど——だから、円を描いて遊ぶのか」

だねっ、と頷くおねえちゃんの眼が、ちらり、羨ましそうにドアを向く。

「回転木馬の部屋がよかった？」

「えっ！？ う、ううん！！？ おねえちゃんは大人だもん。回転木馬になんて、ちよつとだけしか興味ないし……それに、タクトがちゃんと落ち着けるほうが大事だったから」

「そうなんだ」「とにかく！ ね？」

えへん、と芝居がかった咳払い。

「困った人たち向けのホテルなら、ちよつと良くって助かっちゃうね。……タクトがよければ、おねえちゃん、ここでしばらく様子を見るのがいいかなって思うんだけど」

「ちよつと良い。——つまり、僕たちは、困って人たちのなの？」

「う……ん。ええと……そうだね。正直、ちよつと……けつこう、困ってる、かな？」

おねえちゃんは、ベッドサイドのテーブルの上のバッグを指さす。

薄汚れた、けど頑丈そうな灰色のスーツバッグ。すぐ年季がはいってるっぽい。

「あのバッグ、ね？ あれの中身が、マーシヤとタクトの全財産なの」

「全財産——って、そうなの？ あれだけなの??」

「うん。お着替えが少しと、歯ブラシとコップとタオル。お金が四万円ちょっと、ソーニヤ——タクトとマーシヤとのマーマだよ——が遺してくれた綺麗な宝石。小さなナイフと、ソーニヤの使ってた工具がひとやま。ライトとライター、毛布が二枚。それで全部」

「ソーニヤ。僕たちのお母さんが使ってた工具と、遺してくれた宝石。……過去形、なの？」

「うん——それも忘れちゃったんだね」

ふっと、スマイレ色の眼が陰ってしまう。

「ソーニヤ……マーマは、死んじゃったから。おうちも、居場所もなくなっちゃって……だから、マーシヤとタクトは日本に来たの。ここで、暮らしを見つけるために」

「暮らしを見つける」

繰り返せばすぐ理解する。僕たちは、ロシアと日本のハーフっておねえちゃん言ってた。

「——つまり、お父さんを頼って？」

「ううん？ それは無理。マーシヤ、もう十年以上もパーパとあってないし。ソーニヤのお葬式にも来てくれなかったから。……パーパとも、きつともう会えない気がする」

「そうなんだ」

寂しいだとか、哀しいだとか、そういう気持ち湧いてこない。

けど、それは多分、記憶喪失のせいであるような気は少しして……

だとすれば、お母さんとお父さんの顔が思い出せれば、きつと悲しめるような気がして。

「タクト?」「いや——ううん。なんでもない。大丈夫」

陰りをおびたままの瞳が、じいっと僕を見つめてる。心配、させちゃいけない。

「ってかさ、なら——家族って、今、僕たちふたりきりなの?」

「違うよ? もう一人——じゃないや、えっと、いっぴき? いるんだよ」

瞳に、パッと明るさが戻る。よかった。良い話題を選べたみたいだ。

「一匹? ペットとか?」

「ペットっていうのとも違うの。家族だけど、いっぴき。名前はミケ。ネコさんなんだよ」

「ネコ!」

嬉しい、気がする。ということは、僕はネコが、あるいはミケが好きなんだ。

「ミケは、どこ? この部屋の中にいるの?」

「ううん、おでかけ中。タクトとマーシヤの行くあてを探してくれてるの」

「行くあて?」

「うん。ラブホテルは安いけど、それでも、お金があとちょっとしかないし……ちゃんと

お仕事とお家をさがして、新しい暮らしを始めなきやダメだから」

「新しい暮らし」

「うん」

ベッドの上を膝で進んで、おねえちゃんが僕のすぐそばに近づいてくる。

小さなその手が伸ばされて、ぽん——僕の頭に載せられる。

「心配しなくても平気だよ？ ソーニヤはいなくなっちゃったけど、おねえちゃんとミケがいるから。家族で力をあわせれば、こわいことなんてなんにもないから」

「う……ん」

おねえちゃんの手が、僕の髪の毛をくしゃくしゃ撫でる。

スマイレ色の眼がふわりと緩み、真正面から頬笑みかける。

「タクトが記憶をなくしちゃったことは、残念だけど……だけどね？ きっと、きっかけになる気がするんだ。新しい暮らしを、振り向かないで、まっすぐ初めていくための」

「うん」

言葉が、びったり心にハマる。

失くした記憶が空けてしまっていた穴を、埋めてもらったような感じで、心強くて。

「僕、そうするよ。新しい暮らしをつくるため、どんなことでも頑張るよ」

「うんっ！ うふふ、頼りにしてるからね？ タクト」

「おねえちゃん」

ぎゅうっと、手と手を重ね合う。

おねえちゃんの手はちっちゃくて、なのにもものすごくあつたかくって、

「おまわりさん、この部屋です」「！！！？」

ドアの外からの緊迫した声。ホテルの人のような気がする。

(こんこんっ)

短く、力強いノック。すぐさま、野太い声が響く。

「失礼。警察です。お楽しみ中すみませんね、少し、お話をお伺いしたいのですが？」

「ええっ？ 警察の人？ なんですか？ 事件とかですか？」

びっくり怯えてしまった声で、おねえちゃんがおろおろ問いかける。

何か……イヤな予感にかられ、僕はゆっくり立ち上がる。

「いえ、善意の通報がありましたね。匿名の方からなのですが……ラブホテルに未成年とおぼしき二人連れが入っていったと」

「はい？ ええと……ラブホテルに未成年がふたりではいると……何かあるんですか？」

くっくっというしゃがれた響き——多分、苦笑が、ドアごしにでもハッキリ聞こえる。

足音をそれにまぎれさせ、そうっとベッドから下りて、家財道具が一式はいつているというスポーツバッグを肩から下げる。

とたん、おねえちゃんが心配そうに僕を見るから、大丈夫って強くうなずく。

「いやあ、まあ十八歳未満なら条例違反になりますからねえ。そりゃ、一応は問題で」

「えっと？ なら平気ですよ？ マーシヤ、ちょうど十八歳ですから」

そのまま話が続けてと、身振りで合図してからそっと、おねえちゃんを手招きする。

「でしたら、身分証を拝見させていただけますかね？ そっちの方は、それで済んじまう話ですが……問題は、別の方にもありましてねえ」

「別の方？ 別の方って、なんですか？」

おねえちゃんが、怯えたように後ずさりしてそろそろドアから身を放す。

逃げる必要があるかもしれない。小さな体をお姫様だっこで抱きかかえる。

「ひゃっ！?!」「どうしました?」

よっぽど驚かせちゃったのか、おねえちゃんは、口を二、三度ばくばくさせる。

「なにかありましたか？ どうしました?」

「いえ、なんでもありません！ それであの、えと——別の方って?」

絞り出すような早口に、ドアの向こうは沈黙の後、慎重そうに言葉をつなげる。

「……事件性があるんじゃないかってことで、防犯カメラの映像を見せられましたね」

「防犯カメラ？ なにが映ってたんですか?」

おねえちゃんを抱きかかえたまま、足が勝手に後ずさりする。

「エレベーターにあきらかに未成年な二人組が乗り込む。背の高い男が崩れ落ちるようにしゃがみこみ、苦しみ始め、小柄な女に首筋を差し出す。小柄な女は躊躇したあと、男の首筋に何かを……多分、注射をしたんでしょ。途端、男が朦朧とする」

「注射？ そんなしてないですよ?」

“まずい、逃げろ”と、今は触れない僕の記憶が、けれどハッキリ警告してる。

大きな窓へ、音を立ててぬようゆっくりゆっくり近づいていく。

「では、何をなさったんですかな？ 廊下の防犯ビデオには、小柄な女がふらつく男を

なんとか部屋に連れ込んでいる——そうとしか見えない映像が残っています」

(あつ——)

ドアノブから、金属の擦れる音。鍵穴が、ゆっくりゆっくりまわされている。

「ええと……その……それは……言えないです」

「何故です？ やましいところが無ければ、お話くらいお聞かせいただけますよねえ?」

瞬間、カチリっ、鍵がまわってっ！

「おねえちゃん！ 僕にしっかりつかまって!」「うんっ!」

大きな窓を押し開くっ！ ほとんど同時に、ドアが開けられた音がするっ！

「動くなっ!」「飛ぶよっ!……!」「よせっ! バカっ!!! 三階だぞっ!!!」

警官の叫びが瞬時に空気に裂かれて消えていくっ！

落ちる、落ちる、落ちる、落ちる。

「きゃあああ！ やだっ、怖い、タクトっ！」

三階って、これ、めちゃくちや高いっ!?

とにかく、おねえちゃんだけは怪我させないようにぎゅうっと抱きしめっ

(ずんっ!)

衝撃っ！ 膝っ！ お尻と踵がぴったりつくほど折れ曲がりっ！

(ぐんっ!)

けど、走ってる、走りだせてるっ!?!?

「着地した!?!? いや、待てっ！ こらっ!?!?!」

「おねえちゃん、大丈夫!?!」

「だ、だ、大丈夫っ。ってか、タクトは!?!」

「平気、だと思っ」

痛く、無い。膝も、腰も、背中も無事で——だからこうして走ってる。

「えとっ——どこ行くの?」

「人ごみにまぎれる」

何故だろう。それが正解と知っている。

「人ごみに紛れば、僕らの安全度は高くなる。あの人がもし本当に警察の人なら、人ごみの中で無茶な追跡はできない。そして、もしも警察の人じゃないのに無茶な追跡をするのなら、本物の警察があの人を追いかけることになるはずだから」

「あ、そっか。うん、さすがはタクトだね」

僕の胸の中、ほわっとこぼれた頬笑みに、嬉しさと——同時に疑問がこみあげてくる。

(さすがはタクトって……記憶を失くす前の僕、こういうこと得意だったのかな?)

「待てっ！ おいつ!」「!?!?!?!」

警官の声。遠いけど——まだ追跡を振り切れてない!

(考え事は振りきってから——今は、頭より足を動かせ!)

芽生えた疑問を置き捨てて、走る速度をどんどん上げる。

最優先は、何が何でもおねえちゃんを、そして僕自身を守ること。

街が明るく輝く方へと、人の足音と声の方にと、走って、走って、走って——

「あ、向こう、賑やかだねっ!」

おねえちゃんの嬉しげな声——背後に、足音は聞こえない。

この路地裏を真直ぐいけば、なんとか商店街へとまぎれこめそうだ。

「これで……ひとまず……大丈夫かな?」「わ!?!」

そうっつと、おねえちゃんを地面に下ろす。

立たせてあげればそのとたん、おねえちゃんはプっと膨れて僕を見る。

「どうして!? 抱っこやめちゃうの?」

「だって、人目を……引いちやう、から。僕たち……ひとごみに……まぎれるのに」

「あっ……そうだね、そっか」

ほっぺがへこみ、おねえちゃんもしゅんと下を向く。

なんか……悪いことしちゃった気分。走ったせいで、呼吸が激しいせいもあるのか……心になにかつかえたような感じがしちゃう。

「ええと……あ、そうだ。手……つなごうよ。はぐれたら……困るし」

「うんっ!」

とたん、ぺかっと笑いがはじけて、おねえちゃんが腕にしがみついてくる。

(心細いんだ、おねえちゃん。僕が、もっとしっかりしないと)

思えば、不安がわきおこる。おねえちゃんも、高いところから落ちちゃってるんだ。

「おねえちゃん……落ち着いて、確かめてみて? 体、どこにも……怪我は……ない?」

「おねえちゃんは平気! つか、タクトの方が苦しそうだよ?」

「走ったから……少し呼吸……苦しいけど……体は全然……平気、だよ」

「あ、そっか! それじゃ、えと。ね? 目を閉じて、大きくみつつ、深呼吸して?」

「目を閉じて……大きく——三度——あっ」

三度目の息を吐いた瞬間、息の荒ぎが綺麗に消え去る。

全身に噴き出した汗も、魔法みたいに引いていく。

「なんだ、これ……あ、けど。うん、落ち着いた」「ならっ」

おねえちゃんがしがみついたまま、僕の腕をぐいぐい引っ張る。

「行こう?」

「うん」

手を引かれ、商店街へと入っていけば、すぐに人ごみが僕らを隠す。

だけれど少しも安心できない。追われる恐怖に、つつい耳をそばだててしまう。

(ねえ、見た!? 今のコ、超かわいくない?)

(見た! お人形みたいなコでしょ? 超かわいい〜)

(連れの人、お兄さんなのかな? あんまり似てなかったけど)

(デートじゃない? 兄妹で腕からめなくない?)

(やだ! だとしたら年の差ヤバくない!? 超モエだけど!!)

「……………どうしたの? タクト」

「ああ、うん」

おねえちゃんのささやき声に、視線を下げる。

立って並べば、僕の肩ほども身長がない。僕の方が兄に見えちゃっても無理はない。

「おねえちゃん、超可愛いって」「えっ……!?!」

「言ってた、とおりがりの女の子たちが」

「ああ……なーんだ、人の話が聞こえてきたのね？」

一瞬、まんまるく広がった目が、不機嫌そうに細まってしまふ。

「可愛いなんて当然だもん。オリジナルがそうだったから」

「オリジナルって？」「えっ!?!? ああ、やだ、そのっ、ね!?!?」

あたふた、瞳はふたたび丸くなる。

「あ、そうそう、お洋服! これ、ソーニヤのお手製、オリジナルなんだよ? マーシャに作ってくれたんだ!」

「ああ、そうだったんだ。素敵だね。おねえちゃんに良く似合ってる」

「うふふ、ホントに?」

嬉しげに、ちょこん、ワンピースの裾が持ち上げられる。

そのままパタパタ。足まわりの布地はゆるやかに上下して、小さな風を巻き起こす。

「暑いね、すごく。日本の夏の暑さは聞いたけど……夕方になってもこんななんだ」

「ん——」

記憶喪失のせいなのか、いまが暑いのかどうなのか、イマイチうまく判断できず、返事もあいまいなものになる。

ワンピースの裾を離れたおねえちゃんの手が、今度は胸元をおおぎ始める。

「着替えも、全然たりなくなっちゃうかもしれないね。これじゃ、半日で汗まみれだし」

迫る夕闇と水銀灯とが、おねえちゃんをどこか柔らかに照らし出してる。

女の子なんだ、と、今さら思う。

気だるげに揺れる布地の隙から、なだらかだけど、なめらかで綺麗な曲線が

「なーにをガン見してるニヤ」「うわっ!?!?!?」

耳のすぐ横っ、いきなり誰かに囁かれっ! 反射で体がっ

「ミケ! もう、すぐく待ったよ?」

おねえちゃんの囁き声に、動きかけてた体が止まる。

振り返り見る視線の先には、塀の上、ひらひら尻尾を躍らせている一匹のネコ。

真っ黒な顔と水色の眼と、くすんだ白の体とが、とても上品に調和している。

って、いうか……確か、ネコのミケって——

「キミが、ミケ? 僕たちの家族の」

「ニヤーン?」

ぺろり、短い舌が前足を舐め、次の瞬間!

「ああっ!?!? ミケ、待っ」「あはは! 逃げられちゃったね? タクト」

くすくす、周囲から笑い声。

ってか、僕、思わず大声だしちゃって——視線、集めちゃったみたいで。

「行こっ？ お買い物続きっ」

おねえちゃんが腕を引っ張り、早く歩こうとながしてくる。

素直にそれにしたがって——って！

(黒い尻尾——あれ、ミケのだ)

僕らの進むその先の、高くに、低くに、ちらりちらりと尻尾が踊る。

おねえちゃんの眼も足取りも、確かにそれを捉えている。

(ミケ、僕たちを誘導してくれてるんだ)

※ ※ ※

「あ……この匂い」

ミケの尻尾に導かれ、行き当たったのは人気のない、古びたアパート。

奥まった部屋の扉を開けば途端、おねえちゃんが小さな声でそっと呟く。

「グリスの匂い。懐かしいね、工作室を思い出しちゃう」

「んなこたいいから、とっとと入ってドアを閉めるニヤ！」

「あ、そうだね。いけないいけない」

隙間からスルリとミケが。ついでおねえちゃん、僕と入って、扉を閉める。

「電気、つけて平気かな？」

「危ないかもニヤ。このアパート、まる三日間、人の出入りが全然ニヤかったけど——」

きよろきよろと、余りを見回すミケの黒目は、暗がりにもんまるく広がっている。

「——ごく最近まで使われてたっぽいニヤ。ひとまずの隠れ場所にしかないかもニヤ」

「そうなんだ」

薄暗がりには瞳をこらし、おねえちゃんが慎重そうに、置いてある機械——ああ、記憶が

ある。あれ、ボール盤っていう穴あけ機械だ。ずいぶん小型のヤツだけど——に触れる。

撫でるようにして指を滑らせ、クン、と指先の匂いを嗅ぐ。

「ほんとだ、ちゃんと手入れしてある。使われてるね、これ」

「っていうかさ……」

僕も周囲を観察し、すぐに一つの事実気付く。

「この部屋、全然家具がないよ？ タンスもベッドも……イスすらないし」

「工作机があるよ？」

嬉しげに言ってモタモタと、おねえちゃんは横長の机の上に腰掛ける。

「マーシヤのヒザがあるニヤ」

言うやいなやでひらり、おねえちゃんの太股の上、ミケが丸まる。

「えと、僕は……っと、これでいいか」

作業机のすぐ近く、背の低い脚立に僕もお尻を下ろす。

キシんだ音は立つけれど、座りごこちは悪くない。

「ふう……これで、一安心かな？」

問いかけるようなおねえちゃんの目に、もう一度耳をすませてみる。

「うん………大丈夫っぽい。人の気配はまるつきり無い」

「タクトが言うなら、大丈夫だね！」

笑顔につられてホっとして、そういえばって思いだす。

「あの——ミケってき、僕らの家族のミケなんだよね？」

「んにゃ？ ニヤにを今さら」

「ミケ、あのね？ タクト、記憶を」「おーおーおー！ そーニヤった そーニヤった」

小さな頭でこくこく頷き、ミケはぺろりと前足を舐める。

「なら、んまいこといったのニヤ？」「えっ！？ ええと、あ、そうだ！」

ミケの言葉をさえぎって、びしり！ おねえちゃんが指先を僕に突きつける。

「タクト、あのね？ 他の人の前でミケに質問したらダメなんだよ？」

「え？ っと、どうして??」

「ネコ業界じゃ、家族以外の人間と、人の言葉で話しちゃダメって決まってるのニヤ」

だからおねえちゃん、あのととき話を遮ったんだと、納得すれば僕は素直に頷いている。

「そうなんだ。次から気をつける」

「そうして貰えると助かるニヤ。決まりを破ると、ミケ、死んじゃうからニヤ」

「死んじゃうのっ……？」

おねえちゃんと僕との声がピタリと重なる。

思わず顔を見合わせたなら、ミケはクスクス笑いだす。

「死ぬってなウソにや。けど、ひどい面倒にまきこまれるのは本当ニヤから、うっかり

することが無いように、他の人間がいるとこじゃ、ミケに質問しないで欲しいニヤ」

「わかった。覚えた。他の人がいる前では、ミケに絶対質問しない」

僕の答えに耳を小さく動かして、ミケはもう一度前足を舐め、ゆっくり顔を洗い始める。

「でさ、ミーケ？ なにかあった？ 新しい暮らしをはじめるとに出来そうなこと」

「にやう……まあ、あれこれ見るには見てきたニヤ」

顔を洗う手を止めぬまま、ミケは淡々と言葉をつなぐ。

「まず、マーシヤが仕事につくのは結構むつかしそうにや。この国じゃ子供は」

「マーシャ、子供じゃないよ？ おねえちゃんだよ？」

「……見た目が大人じゃないヤツは、この国じゃ仕事できないみたいニヤ。基本的には」

「そうなんだ。マーシャの見た目じゃ、働けないんだ………って、基本的には？ なの？」

「そーニヤ。例外も一応は見つけてあるニヤ」「例外って!?!」

期待に満ちた視線を受けて、ミケの尻尾が伸ばされ、揺れる。

「例外ってのは、TVの中ニヤ。アイドルとか、そういうTVに出る仕事ニヤったら、大人じゃないのもゴロゴロしてるニヤ」「アイドル!」

おねえちゃんは両手で口を覆い隠して、それからゆっくり、恥ずかしそうに首を振る。

「無理だよ。おねえちゃんにアイドルなんて……ね？ タクトも、そう思うよね？」

「ええと、そんなこと無いと」「無理ニヤ」「どうして?!?!」

ふくつと、おねえちゃんの頬がふくれる。ミケはダルそうにアクビする。

「マーシャがTVなんかに出たら、いっぺんで発見されちゃうにゃ？」

「あ……そっか、そうだよね」

こくこく頷き、すぐさま頬がまたふくれあがる。

「なら、アイドルだなんて最初っから」「ニヤから、“一応”って言ったにゃあ」
ぺろり、また前足を舐め顔洗い再開。

おねえちゃんは眉根にギュつとしわを寄せ、うつむきうんうんやり始める。

「でも、困っちゃうね？ お仕事しなくちゃお金が入ってこなくなっちゃうし、

お金が入ってこなかったら、あつという間に干上がっちゃうよ」

「おねえちゃん。なら、僕が仕事を」「ダメだよ!」「無理ニヤ!」

口にした言葉はダブルで止められる。

「タクト、記憶喪失なんだよ？ 一人で働くななんて危なくてさせられないよ!」

「マーシャもミケも、仕事場に付き添えニヤいから。それはあんまり無謀ってもんニヤ」

「あ……うん。そっか」

仕事くらいは一人で出来そうな気もするけれど、反論するほどの自信は持てない。

記憶がないのは、正直やっぱり心細くて。自分で出来てるつもりでも、とんでも無いミスとかしちゃういそうな気がして、怖くって。

「タクトがいて、おねえちゃんがいて、ミケがいてこそその暮らしだもん。事故とかのことを考えたら、タクト一人でお仕事なんて、させられないよ」

「そうニヤ。それに、働かなくても喰うテがあるのニヤ」「えっ!?!」

おねえちゃんと僕が見つめる中で、ミケは伸びをし、グイと弓なりに背を伸ばす。

「な、なに？ その……、“働かなくても喰うテ”って」

「特待生にゃ」「こくたいせー?」

「そうニヤ。二人して学生になればいいのニヤ」

……ミケの調べたところによれば、学校の、特待生っていうものになると、ただで勉強を教えてもらえるらしくって。

「その上、学校によつては寮費もタダになったり、無利子で生活費を借りたりできるようになったりもするらしいのじゃ」

「そうなの？ 無利子？ そんな素敵な制度があるの？？」

大きく頷き、スマイレ色の眼が夢見るように僕を見る。

「タクトは、どう？ 特待生って、どう思う？」

「僕は……すごくいいと思う、特待生っていうのになるの」

「だよね！ そんなにお得なんだから。特待生にならなきゃ絶対、損だよねっ！」

うんっ、と頷き。おねえちゃんは右手でミケを持ち上げて、あいた左手でお腹を撫ぜる。

「ねえねえ、ミーケ？ それで、特待生っていうのには、どうやってなればいいの？」

「まずは、行く学校を決めるニヤ。で、編入試験ってヤツを受けるニヤ」

「その試験は？ どうやって受けるの？」

「出願書類をそろえるニヤ。志願票とか、推薦状とか、各種証明書類とか、その辺をザラつと用意しなくちゃダメにやあね」

「えつと……なんか、結構ややこしい感じ？」「それほどでもないニヤ」

身をよじり、ミケはおねえちゃんの手からスルリと逃れる。

「ニヤの道はネコ。任せるニヤ。マーシャの分も、タクトの分も、半日もありや十分ニヤ」

「じゃ、それをお願いね！ つて、あ、えつとね？ ミヨウジ——ファミリーネームはタ

ナカナの。田んぼの中で、田中。それをお願いできるかな？」

「お願いされたニヤ——んニヤ！！？」

駆けだしかけてた足が止まって、ぴいんとミケの耳が立つ——つてかっ！？

「こりやマズったニヤ」「おねえちゃん……誰か——入ってきた」「！！？」

足音は、二つ。

声——いや、会話がどんどん近づいてくる。

(……面倒な因習よね。この時期に三日もロスさせられるだなんて)

(んな焦ったって仕方ないっしょ。ドライバーも見つからねえのに)

いかにもインテリな空気をまとった、気の強そうな高めの声と。

口調こそ少し荒っぽいけど、落ち着きと余裕を感じる大人っぽい声と。

「……女の子がふたり。話してる。なんか、ドライバーが見つからないとかいってる」

「ドライバー？ 職工さんかな？ なら話が合う——じゃなくてっ！ ええつと——」

あたふた左右を見回して、おねえちゃんはぺったりと、工作台の上で横になる。

「ね、寝たふりしよう？ タクト」

「え？」

「寝たふり！ 早く！ いますぐばたん！」「あ、うん！」
(かちや)

体を床に寝かすと同時！ ドアが開けられ、部屋の電気がつけられてっ！

「んー、ひさしぶーわわ！？」「んなっ！！？ 人っ」

ドサっと、何かが落ちる音。息をのむ気配……そして……沈黙。

「だ、誰？ この子——と、このネコ」

「金髪だぜ。って、うわ！？ むちゃくちゃ綺麗な顔してっけど……なんだってここで」

「んニヤー」「わわわっ！！？」

「んにや、んにやっ」

「んー……あと五分……」

「しゃべったわ」「日本語だっ！」

「ん……む？」

あくびまじりの眠そうな声。もぞもぞと身動きする気配。

どうやら、ミケがおねえちゃんを起こした……って筋書きっぽい。

「あの——あなたは誰かしら？ 誰の許可を得てここにいるの？」

「えっ！？ わっ、あっ、あっ、あのっ！！？」

「あーあー、怖くない怖くない、アタシら、ただの女子高生だ」

大人っぽい方の声が、慌てたようにおねえちゃんのことをなだめてくれる。

ってか、ラッキーだ。こどもみたいな見た目のおねえちゃんが、しかも自分から怖がっ

ちやうことで、女の子たちの警戒心を、ほとんど一気にゼロ近くまで下げてしまった。

なら、僕は……気づかれないよう、とにかく寝たふりを続けるべきだろう。

「あのっ、ええと、ごめんなさいっ！」

ぶん、と、音。おねえちゃん多分、凄いい勢いで頭をさげた。

「いや、まあ、ごめんはいいけど、とにかくアレだ。なんで……あんた、この部屋に？」

「あのっ、マーシャたち……おかあさんが死んじゃって、それで」

「えっ！？ 死んだって」「マーシャ、“たち？”」

大人っぽい声の驚きを、ふわっとした声がけれど鋭く塗りつぶす。

「“たち”って……“ネコとあなた”のおかあさん、の訳がないわよね？」「っ！」

こつり、足音が床を鳴らす。

こつり、こつり、慎重に一步、また一步。

「アルミ、居た。もう一人倒れてる。男……高校生くらい」「マジかよっ！？」

強い足音が駆け寄ってきて、最初の足音の真横で止まる。

「茶髪じゃん。こっちは……日本人だな」

「日本人です。日本とロシアのハーフの日本人なんです。マーシャもタクトも」

「タクト？ この男の子？」

「はい、田中タクトっていう名前です。わたしは、田中マトリョーシヤ。お父さんが日本人で、お母さんがロシア人です」

「ああ、ハーフなのか。なるほどね」「アルミ。そこで納得しない」
ビシッと、軽く体を叩く音。

その一瞬だけ和らいだインテリっぽい声は、けれどもすぐに、固い緊張を取り戻す。

「で？ どういう理由で、その田中さんごきょうだいが、この部屋に？」

「マーマっ、おかあさんが亡くなつて、タクトとマーシヤ、住むところがなくなっちゃって——それで、ずうつとさまよつて。そうしたら、この近くでタクトが倒れちゃって」

「マジで！？ ってか、コイツ、大丈夫なのかよ。おいっ！」「アルミっ！？」
ぺちぺち、ほっぺたを叩かれる。

大人っぽい声の、アルミっていう人。どうやら、根っからの善人だ。

「やめなさいアルミ。ちよつと！ 危ないから」「とぐるさんっ！」「っ！！！！？」
低く尖つた——張り詰めた声。

インテリっぽい声は、ぴたり、その緊張感に止められる。

「な——なによ突然」

「マズいぜ。こいつ、息してねえ」「えええっ！！！！？」「た、タクトっ！！！！？」
軽い足音がすつ飛んでくる。がくがく！ 襟首を掴まれ激しくゆすられる！！

「タクト！ タクト！ ねえ、息をして？ 大丈夫だよ？ すうはあつて、ほら！」

ってか、僕——ああ、本当に息を止めてる。緊張しすぎちゃったのか——

「タクト！ ねえ、タクト！ 目を開けて！ 息をするのっ！ お願だからっ！！」
じゃない！ おねえちゃんを不安にさせちゃいけない！ ええと、目を開けて息をっ

「タクト！」「あっ……！」「生き返つた！！！！？」

六つの瞳が、不安げに僕を覗き込んでる。

至近距離がふたつ。おねえちゃんの、スマイレ色の瞳。

少し離れたところにふたつ。真っ黒な瞳——この人が、きっとアルミだ。

そうして高い所にふたつ。立つたまま僕を見下ろす、黒ぶち眼鏡に包まれたとび色の瞳。

「あなたが、田中タクトさん？」

とび色の眼の持ち主が、警戒を隠そうともせず、ひどく冷たく問いかけてくる。

「はい」

「説明してもらえますか？ どんな理由で、どうやって？ この部屋に入り込んだかを」
「はい……ええと——」

おねえちゃんは、困ったように下を向いてる。

「ここは……僕が正直に話すしかない——けど。」

「あの、僕——どうやってとか知らないんです。ついてきただけで——」

「タクト、記憶喪失みたくなんです」「記憶喪失!?!?」

「そうなんです！ タクトが倒れちゃって、目覚めたらなんか、マーシヤのこともわからないみたいで。それはなんとか思い出してもらったんだけど、もう、本当にどうしていいのか怖くて……そしたら、ミケがニャアって鳴いて、それでっ!」

目のうち四つが、同時にぐるり、工作台の方を向く。

工作台上にぺたりと座るミケは注目にもせず、ぺろぺろお腹を毛づくろう。

「ミケがアパートに入って行ったんです。それで、中に誰がいるかもしれない、助けてもらえるかもしれないって思って、マーシヤ、タクトと一緒に、ミケをおっかけてアパートの中にはいったんです。けど、やっぱり誰もいなくて、ミケもどんだん先に進んで行ってちゃって。ミケがお部屋にはいつていったから、ドアが開いてるんだと思って、誰がいるか思ったんだけど、それでもやっぱり誰もいなくて……タクトはグツタリして調子わるそうだし、心細くて寂しくて……」

必死に一気に精一杯に、おねえちゃんはそこまで話しきり、けれども言葉を見失う。

五秒、十秒……どこか不安な沈黙が、部屋一面に垂れこめる。

なんとかフオローをしたいけど、何も頭に浮かんでこない。

「あ……泣き疲れて寝ちゃった、ってヤツか？ そこに、アタシらが返ってきた」

アルミの優しい声がふわっと、部屋の緊張をふるわせ、解く。

「たぶん……そうだと思います」

おねえちゃんのオドオドとした顔つきを、とび色の眼が冷たく見つめる。

「……鍵は」「いやとぐるさん違っって！ アタシ、ちゃんと戸締りしたぜ??」

「アルミ……」

目を伏せ首を横に振り。長く長く。とび色の眼の人がため息をつく。

とぐるさん、っていうのが、どうやらこの人の名前みたいだ。

(つてか——見事なまでに対称的な取り合わせだな、この二人)

黒い目に、見事な漆黒の長髪を持つアルミは、スレンダーな体と日焼けしていない肌をすっぽり、やっぱり黒い長スカートと、白のエプロンで包みこんでる。

口調だけなら男っぽいけれど、見た目は清楚で……おしとやかそうな印象だ。

とぐるさんは、焦がした感じに黒が混じった金髪を短めの二つ結びにし、メリハリの効いた体と健康的な肌とを、凄く短い服とスカートで、見せつけるようにして立っている。眼鏡と言葉はインテリっぽく、外見は派手でクツキリして……すごく存在感がある。

「……帰省で誰もいなくなるのに戸締りを忘れた。それは完全にアルミが悪い」

「信用ゼロかよっ!?!」

「けど、いくら困っていても。例え鍵が開いていても、他人の家に勝手に入り込んでいい

つてことには——なりませんよね？」

「……………」

全くもって正論だ。反論の余地はない。から——僕が矢面に立とうと思う。

「はい、すみませんでした」「すみませんで済んだら、警察はいらないっていう話です」
ピシヤリ。とぐるさんは強い言葉で謝罪を門前払いする。

「アルミ。部屋の中を確かめて。何か、無くなってるものが無いかどうか」

「なっ！！？」「あいつ、僕たちっ」「動かないで」

立ち上がるうとした瞬間に、冷たい何かをピタリ、首筋につきつけられる。

「ああっ！？ 長尺ノギスをそんな使い方っ」「えっ？」

おねえちゃんの悲鳴みたいなひとことが、瞬間、とぐるさんの動きを止めて。

「とぐるさー！ーん！」

響くアルミの大声が、全員の眼をひきつける。

「無くなってるものは無いけど、増えてるものはあつたぜ」

「あっ！ それ、マーシヤのっ」

「あなたのなの？ このボロ……そのっ、渋いスポーツバッグが？」

「はい。マーマの形見です。タクトとマーシヤの全財産がはいってます」「っ！」

とぐるさんが息を飲み、はつきりとした困惑を、その表情に浮き上がらせる。

アルミの立つ方、バッグの方へ、おねえちゃんが歩きだすのを止めもしない。

「あの？ 開けても」「もちろん！ あんた達のだろ？」

アルミの手からバッグを受け取り、おねえちゃんは元の場所、とぐるさんのすぐ隣へと

戻ってくる。

「あっ」「確かめてください」

短く言って、おねえちゃんはバッグの中身を工作台上へとあける。

ぼろぼろの毛布、少しの着替え、洗面道具に小さな財布。それから、油じみた革袋と

「確かめてもらった方が嬉しいです。泥棒だって思われてるより」

「……………」

とぐるさんの口元がぎゅっと結ばれ、少し震える。

瞬間、視線がそれかけて——けれどもすぐに、お姉ちゃんの手元をしっかりと見据える。

「工作台、よごしちゃったらごめんなさい」

白くて細い指がするする、ぼろぼろの革袋の紐を解いていく。

ざらり、無造作にあげられた中身は、工具とナイフとライターで。

「すげえ……滅茶苦茶つかいこんでんなー」

アルミの場違いなほどノンキな声に、だけれど僕もうなずかされる。

ボロボロなのに、マイナスドライバーの木軸なんて、鉄製みたいに黒光りしてるっての

に……金属部分にはサビひとつ、くもり一つさえ浮かんでいない。

「これが……おかあさんの工具？」

「うん、そうだよ？ ソーニヤ……ママが遺してくれた、大切なもの」
覚えてない。思い出せない。

おかあさんの顔も、匂いも、工具を使っていたのだろう手も。

「そっか……おかあさんのなんだ」

「ごめんなさいっ！」「！！！？」

不意の大声に顔を向ければ、とぐるさんが、ヒザにおでこをつける勢いで頭を下げてる。

「え！？ えと、悪いのはマーシャ」「ってか、僕です。そもそも、僕が倒れなければ」

「それはそうね。でも、やっぱり、ごめんなさい。私、あなたたちの話をハナっからウンだつて決めつけちゃって」

「そら無理ねえよ、とぐるさん」

とても穏やかにアルミが言つて、ぼん、と優しくとぐるさんの肩をたたく。

「記憶喪失とか普通ねえ話だし。もちろん、アタシはカギを閉めてたし」

「ニヤニヤ！？ にやーにやーにやー！」「うわっ！？ なんだよネコ急に」
鍵、多分空いてたんだろう。それできつとミケは抗議をしてるんだ。

……ネコ語の抗議は残念ながら、おねえちゃんにさえ伝わってないみたいだけれど。

「きゅ、急にどうしたの？ 落ち着いて、ミケ」「ミケ！」

とぐるさんが急に顔をあげ、アルミとふたり、面白そうに見つめ合う。

ふたりの動きがシンクロし、ぐるり、同時にミケを見る。

「ミケ？」「んニヤ？」「あはははははははははっ」

いきなり！ ふたりが笑いだす！

驚いたミケが雷に打たれたみたいにあとずさり、それが笑いを増幅させる！

「やっぱり！ お前がミケなのか！ 話の流れで、そうじゃねえかとは思ってたけど」

「このコがミケなの！ ミケなんだ！ シヤムネコなのにミケって、あはは！」

「やべえくだらねえ、くだらなすぎるっ！ 異文化ミスコミュニケーションだ！」

「え？ え？ え？」

おねえちゃんがキョトンと首を傾げる。もちろん、僕にもわからない。

「あの……何がそんなに面白いんですか？」

「い、いやっ——あれだ、あの、ごめんなつ。ちよつと……不意ウチされちゃったから」
問いかけてみれば、アルミは苦戦しながらも、笑いをなんとか抑えてくれる。

目のふちに浮いた涙をぬぐって、ミケへとそうつと手を伸ばす。

「おまえも、ごめんな？ 笑っちゃまって」

「んにゃ？」

怪訝そうに、ミケは指先の匂いを嗅いで、ペろりと一なめ。

「にやぐつ」「ありゃ」

そしてそのまま素早く体をひるがえし、背の高いラックのてっぺんに移動する。

「逃げられちゃったよ——ま、驚かしちゃったしな」

「つていうか！ どうして、ミケのこと笑うんですか？」

「ああ、それね？」

とぐるさんの声に、知性の響きが戻ってる。笑いで、何かがフツキれたみたいだ。

「一般的に、ミケっていうのは三毛猫につける名前なの」

「ミケネコ？」

「そうよ。少し待ってて」

とぐるさんはスカートのポケットに手をいれて、薄い何か——何か……ああ、確かスマートフォンっていうヤツだ——を取りだし、ちゃちゃちゃと操作する。

「これが三毛猫」「わわ！？ えっ？ やだっ！」

なんだろう、興味が出てきた。けど——僕には画面をのぞけない。

長尺ノギスはもう喉元から外されてるけど、動くなどまだ命令されてる。

「あの——僕も見たい」「あ、ああ！ ごめんね！？ 動いていい、です。どうぞ」

「はい」

立ち上がり、すぐさま画面をのぞきこむ。

そこに映るのは一匹の、ミケとは毛並みが全然違う——三色に別れた毛のネコだ。ん？

「ひよっとして……毛の色が三つだから、ミケなの？」

「はい来たご明答っ！」

パチッとアルミが親指を鳴らす。

「ミケってのは三毛猫専用の名前だっと思って思いこんじゃってたからさ。よりにもよって洋ネコ代表みたいなシャムにミケって……そのギャップがさ、妙にツボ突いて来た感じでさ」

まだ可笑しそうなアルミの声に、おねえちゃんは少しふくれて口をとがらす。

「だ、だって……こんな不思議な毛並みのネコは、ロシアには全然」

「ロシアの方が長かったのかしら？ 暮らし」

言っですぐ、とぐるさんは、しまったって感じに両手で口を覆う。

「ごめんなさいね？ つい。詮索する気はないのだけれど」

「いえ、いいんです。タクトにも、話しておいてあげたいし」

問いかけるような視線に自然と、うなずいている。

「ありがとう、おねえちゃん。ロシアでのこと、聞かせてくれたらすごく嬉しい」
記憶を、少しでも取り戻したい。それが無理でも、埋めて行きたい。

おかあさんのこと。僕とおねえちゃんとミケとの以前の、暮らしのことを。

「……ロシアっていつても、マーシャたちがいたのは、大陸の方じゃないんです。サハリン島の南部、ユジノサハリンスクっていう町の片隅で暮らしてたんです」
(あっ)

チューニングが、ほんの一瞬あったみたいに、パッとまぶたに景色が浮き上がる。もこもこのコートを着込んだおねえちゃんと、その懐で寒そうなミケ。そして、ただただ降り続ける雪——けれど景色は、すぐにノイズにまぎれてしまう。

「ユジノ……サハリンスク？」「サハリン島って……」

とぐるさんとアルミとは、困ったようにそれぞれ首を傾げてる。

「ええと、その携帯電話。日本の地図って、出すことができますか？」

「あ、そうね。出来るわ。少し待って」

「北海道を——そこから北に少し……あ、それ。その大きな島がサハリン島です」

「近っ！？ 何これ！ 日本とロシアってこんな近いのかよ？」

「うん。ママが教えてくれました。ロシアと日本は最も近いお友達同士なんだって」

どこか遠くを見るように、スマレ色の眼がほんの一瞬細められる。

「ママ、若い頃には、日本で勉強を重ねたそうです。そうしてロシアに帰国して、日本で学んだ知識をロシアのため、ロシアと日本とを結ぶため、役立てるお仕事についたって」

「お母さんの仕事って、何だったの？」

聞けば、うふふとお姉ちゃんは嬉しげに微笑んで。

「あのね？ マーマは工学者。ロボットを設計してたの」「えっ！！？」「マジでっ！！？」

とぐるさんとアルミとが、なぜか猛然と喰いついてくる！

「ママさんって、お名前、確か」「てか、どんなロボットを設計してたんだ？」

「えっ？ ええと——ママの名前は、ソーニャですけど」「ソーニャ……！？」

そしていきなり、二人は同時に絶句する。

目と目を見かわし、譲り合うような沈黙のあと、コホン、ととぐるさんが咳払いする。

「ソーニャって——まさかとは思うけど、ソーニャ・ボルコンスカヤ博士？ かしら」

「え！？ どうしてママのことを知ってるんですか？」

「知ってるものなにも…………」

とぐるさんとアルミの声が、見事にびたりと重なりあう。

「知らないやモグリ——いや、それよりアルミ！ 『二足二手』！」

「あ、だっ！ ちょっと待ってなっ」

アルミが壁際に走り、ラックの隅から、ボロボロになった分厚い本を持ってくる。

「これっ！ これ書いた人っ」

おねえちゃんが本を受け取る。

『二足二手ロボットの運動制御——その基本と応用！』

著者名は……ソニーヤ・イラリオノヴィーチャ・ボルコンスカヤ——

「つて!? おねえちゃん、これ——お母さんが書いた本なの？」

「マーマが? どうかなあ? ひよつとして、同姓同名っていうことも……」
おねえちゃんが裏表紙から本をめくる。

「あ——」

あとがきのところに載ってる、モノクロの小さな顔写真。

覚えてない——思い出せない——けど、心がホワっと、あつたかくなる。

「おかあさん……だよね、きつと、この人」

「うん、ソニーヤ。マーシャとタクトのマーマ。若い時だね……とっても綺麗、幸せそう」
「やっぱりか! すっげえ!」「じゃあ、この工具がソニーヤ博士の……?」

とぐるさんが、空気を切り裂く勢いでプラスチックドライバーに手を伸ばしかけ——

「あつ!? つてか、えと」「ええと……触りたいなら、どうぞ」「ありがと——っ!」

——おねえちゃんの許可と同時につかみあげ、指でこすって匂いを嗅いで持って回して眺めて降って、両手でそうっと押し抱いて……なんかもう、狂ったようなテンションだ。

「ああ、このドライバーが、ロボット工学界の扉を押し開いたのね」

うっとりとした視線に正直、ちよつとヒク。けど、聞かずにもいられない。

「その……おかあさんつて、そんなに凄い人だったの?」

聞けば、アルミが苦笑しながら肩をすくめる。

「アインシュタインつて知ってるだろ? 物理学者の」

「あ……つと。その名前は記憶にある。確か相対性理論を構築した人」

「二十世紀最大の物理学者にして、現代物理学の父。ソニーヤ博士は、そのデンでいうなら、二一世紀を切り開いたロボット工学者にして、ロボット工学の母なわけよ」

「マーマが、アインシュタインと同レベル……なの?」

「少なくとも、あたしらみたいな、ロボットやつてる人間にとっちゃ、な」

「ソニーヤ博士は、ロボットの運動制御における“基点”を打ってくれた人なの」

アルミの声をひきついで、とぐるさんはエヘンと豊かな胸を張る。

『定量的運動性制御』——聞いたことくらいあるかしら?」

記憶に………無い。黙って首を横に振り、おねえちゃんへと視線を送る。

少し考え、おねえちゃんも、僕と同じく黙って首を横に振る。

『二十世紀のロボットは、例えば歩くつて動作をさ、『カメラで見る』『画像処理する』『障害物の無い場所を判断する』『進める方向に体を向ける』『左側に体を二度傾ける』『右足を上へ三十ミリ持ち上げる』『前方へ百ミリ踏み出す』——って感じで、ひとつひとつの動作の集合としてしか行えなかったんだ。集合させて、連続させて、動作つてわけ』
言葉とあわせ、身振り手振りでアルミが説明してくれる。

……一個一個を順番にだと、動作って、すごくギクシャクしてみえる。

「“動作は、無数のポーズを足し算した解”。——この考え方が、ずっとロボット工学の基本にあった。それを一変させたのが、ソーニヤ博士の定量的運動性制御なんだ」

「動作の公式化。乱暴にいつてしまえば、定量的運動性制御が成し遂げたことは、それよアルミが息ついた瞬間、とぐるさんがストと説明を継ぐ。

このふたり、ものすごくコンビネーションがいい。

「“人間が二手二足で真直ぐ歩く”という動作の公式がどんなものかを、ソーニヤ博士が一番最初に見いだした。種々の変数——背の高さや、体重や、手足の長さやサイズや、筋肉の付き方や、基本姿勢や——を、その公式にあてはめてみて、出てくる答えが有意なら、その存在は、外乱の無い状態では“二手二足で真直ぐに歩く”ことが出来る」

「ええっと……ねえ、タクトはわかる？」

おねちゃんの視線を、っていうか期待を受けて、考えながら言葉を選ぶ。

「その公式にあてはめる変数っていうのは、ロボットでいったら……たとえば、ロボット自体のサイズや手足の長さとか、使うパーツの強度とか、手足の長さとか、モーターやセンサー類の付き方とか、全体のバランスとか——そういうこと、ですか？」

「ええ、そのとおりよ。その変数のどこかに無理があったなら、公式は有意な答えを導けないの。つまり、“公式どおりに、真直ぐでは歩くことはできない”ことが示される」

「ってことは……そういう場合には、“どの変数をどう変えれば”——つまり、“どのパーツをどう変えればいいか”とかを導けば、公式通りに歩くロボットを組めることになる？」

「ほい正解っ！」

嬉しげに、アルミがピシッと指を鳴らす。

「けどさ、ソーニヤ博士の功績の本当のすごさはそこじゃねえんだ。この理論が発表されたことをきっかけに、『動作は公式化できる』ってことが明らかになり——その公式の発見と発表、データベース化とが進められるようになったってことなんだ」

「ソーニヤ博士が打って下さった“歩く”という基点を元に、まず人間の基本動作が。そして、動物や昆虫や鳥や魚の動きたちが、徐々に、けれど確実に公式化されていった」

「もちろん、その中には今の技術じゃ再現不可能なものも山ほどあるぜ？ 例えば、『鳥と同じ動きで羽ばたいて飛ぶ』ロボットは、公式を満たす強度と柔軟性と軽さをあわせもつ素材が開発されないかぎりには、誰にも組めない。けど、逆にいえば——」

「公式があるから——『それを満たすには、何をどうすればいいのか』を導ける？」

「その通り」っー

冷静なとぐるさんの声と、勢いの良いアルミの声とが、重なりあって同意を示す。

「今アルミが言った、素材面や工作面でのこともそうだし。『公式とは外れた動作』をさせようというときにも、公式はリファレンスになってくれるの。ソーニヤ博士の理論と、

そこから産まれたデータベースとは、現代のロボット運動制御における、唯一絶対の、しかも拡張されつづけていく、座標軸であり、地図なのよ」

「ロボットがこんなにも身近な存在になったのも、その地図が出来たおかげなのさ。で、ロボット工学の発展は、地図もどんどん充実させる。だからよ、『ソニー博士はロボット工学の母』って言葉は、ウソでも大げさでもなんでもねえのさ」

対称的な声と声との重なり合いは、僕の心に、理解と感動とを響かせる。

「……お母さんって、凄なお仕事をした人だったんだね、おねえちゃん」

「んー……つと……公式化、って？」

けど、おねえちゃんが返す答えは、心細げであいまいで。

ああ、これ……最初のトコがわかってないんだ。けど、どうやって説明すれば――

「アルミ。見せてあげた方が早い」

「あ、そうだなっ」

まだまとまらない僕の思考を置き去りに、アルミはラックの方へと駆け寄り、一番下の段から箱を引き出し、がちやり、と――何か、金属塊を持ち上げる。

「わ！ 自作ロボットだあ」

一転！ 嬉しげに弾けたおねえちゃんの声に気づかされる。

金属塊には、手足と頭が付いている――人型をしたロボットなのだ。

「五分、いや、三分でやれるか。まあ、ちよろっただけ待ってな」

言ってアルミはラックから、手慣れた様子で、今度は長いものをゾロリ、引っ張りだす。

腰に手早く巻かれれば、その長物は無数の工具が下がったベルトと見てとれる。

「んー――お！ 久々の割に好調そうじゃん。いいね、お前はいつでも素直で」

アルミの手がロボットの上を、愛おしむように動き始める。

「……無駄の無い流れだね。マーマの手は、もっと綺麗に流れてたけど」

「流れ……」

おねえちゃんの言葉に素直に頷いている。レンチを手に取る、ボルトを回す、レンチを戻してグリスを搦んで塗って拭きとる――全ての動作が、流れるようにひとつつながりだ。

「うしっ！ 朝だぜ起きろ、アルケルっ！」

声と同時にパチン！ と小気味よい金属音。とたん、金属塊に生命が宿る。

「おおー！」

しゃがみこんでた手足が真直ぐピンと伸び。立ち上がり――二手と二足を主張する。

「いっちゃん最初にアタシらが組んだロボット。アルケル1だ。もう、何度改造してつか数えきれないくらいだけだな」

「で、こっちが市販品。いわゆるお掃除ロボットね」

とぐるさんも、押し入れの中からロボットを引っ張り出してきた。

真っ白なプラスチック・ボディのお掃除ロボは、金属部分がほとんど見えない。

お掃除ロボは全高1メートルほどで、アルケル1はその半分ほどあるかないかで。

ほぼ人間のシルエットをしたお掃除ロボと比べると、横幅だけはほとんど同じアルケル1は、ひどくずんぐりして見える。

「お掃除ロボと比べちまえば、アルケル1は手足のついたマッチ箱みたいなもんさ」

言いながら、アルミちゃんはコントローラのスイッチをいれる。

長いケーブルを引きずりながら、アルケル1は、とてもなめらかに歩き始める。

「けど、“公式”を満たすための必要要素は共通してる。つまり、基幹となるボディとセンサー系。上半身に二手、および肩、肘、手首の三関節。腰から下には二足、および股、膝、足首の三関節。一定範囲で、左右対称に近い構造」

今度はとぐるさんが、お掃除ロボを通电させる。

お掃除ロボは周囲をきよるきよる見回して、ホウキを取りに歩き始める。

その足取りは、やっぱりとてもなめらかで——つてか——

「同じだ……全く、同じ歩き方してる」

歩幅もサイズも体形も、手足の長さも、その付き方さえ違うのに、アルケル1は操縦されて、お掃除ロボは自動で動いているというのに……

「だね。歩き方……違うのと同じに感じる。不思議。どうしてなのかな？」

「ん……と……ちよっと待って」

今度こそ、おねえちゃんの疑問を解いてあげたくて——観察すれば、この問題は解ける気がして——目と耳を極限にまで凝らしてく。

「……………ああ、そうか。タイミングだ」

「タイミングって、全然ちがうよ？ 足の上げ下げにかかる時間も——ほら、ズレてるし」

「いや、一個一個の動作がおこなわれるタイミングじゃなくて——動作と動作との連携のタイミング……連動性が、共通してるんだと思う、多分」

「連動性？」

「ええとき、右手が垂直のときを起点としたらさ、歩く時、前に振りだしてからいったん後ろまでふって、それから垂直まで戻るでしょ？ その一挙動にかかる時間が1だとすると、左足が接地するのは、0.6のタイミングとかで、共通してるような気がする」

あつ、と小さな声をあげ、おねえちゃんが感心しきりにうなずいてくれる。

「そっか。連動性ってそういう意味なんだ」

「すごいわ。この短時間の観察で、よく気付くけたものね」

とぐるさんまで何故か驚いたような声を出し、そして視線をおねえちゃんへと向ける。

「マーシャさん、これが、ソーニャ博士……あなた方のお母様が産み出した、定量的運動性制御という公式です。つまり、連動性の徹底的な整理・分析と、数値化と」

「マーマが、この子たちの動きを作ったの？」

「だな！　で、それがきっかけに、いろんな動きの公式が産まれ、データベース化されるようになった。世界中にいまあるロボットのほとんど全ては、そのデータベースを参照した上で作られてる」

アルミの声を受け、とぐるさんは黒ブチ眼鏡のフチをくいと持ち上げる。

「ソーニヤ博士の功績は、私たちの生活全てに恩恵を与えてくれているのよ」

「僕たちのおかあさんが……そんな凄いことを」

「マージヤ、ぜんぜん知らなかった……だってソーニヤ——マーマは、お仕事のこと、くわしくは教えてくれなかったから」

「ま、子供に聞かせて簡単にわかる話じゃねえしな」

子供と言われ、おねえちゃんの頬がプッと膨れる。

アルミは全く気付かぬ様子で、僕にツイッと近寄ってくる。

「な？　もし記憶喪失がおつたらさ、その辺の話、聞かせてもらえないかなあ？　兄貴
の方なら、多分、いろいろ聞いてたんじゃねえかって気がするし」

兄貴？　って？　——ああ、そうか。そこのとこ誤解されてたんだっけ。

「ええとですね、それなんですけど」

「タクト、マージヤの弟だもん！　マージヤがおねえちゃんだもん！」

「えっ？」

再び。とぐるさんとアルミとの声がぴたりと重なる。

「え………」

「な、なによう！　そんなに驚くこと」「いや、だってよ？　姉……？」「弟……？」

とぐるさんは僕らを指さし絶句して、アルミもぼかんと口を開け——って……！！？

「ぶつかるっ！」「え、わっ……？」

お掃除ロボのナナメ後ろから、アルケル1があと数歩まで接近してる！

アルミが手早くコントローラーのレバーをフラットに戻して——っ！？

「止まらねえっ！？　なんでっ」

(衝突だけは回避しないとっ！　でも、どうやって——って！)

「とぐるさんっ、そのドライバーっ！」「え……？　あ、はいっ」

ドライバーをアルケル1の足元に向けて滑らせて　その瞬間！

「貸してっ！」「えあっ……？」

慌てるだけのアルミの手からコントローラーを奪い取るっ！！

「そのままっ——踏み込めっ！」「ああっ……？」

ドライバーの柄にアルケル1の右足が乗り、とたん、大きくバランスが崩れる。

「こけるっ！？　アルケルっ！」「いやっ、衝突よりまだ自損の方がっ」

「タクト！ ターンできるよ」「そのつもりっ！」

ここしかないってトコにずばり踏み乗ってくれたから——あとは余計なことをせず、アルケル1の歩みを信じて——

「……………」

歩く。お母さんの作った公式は、アルケル1の歩みをそのまま、守ってくれる。

左足、そして、ドライバーを踏み台に右足。また左足。

わずか二十度ほどのターンが、けれど衝突を回避させっ

「アルケルを止めてください！ バッテリーからっ」「あ！ 待ってるアルケルっ！」

アルミがアルケルの元に駆け寄り、抱き上げながら電源を落とす。

歩くモーションをほんの数瞬だけ続け、そしてアルケルの動きが止まる。

「…………あー、クソ。ごめんなアルケル。慌ててセッティングしちまったから」

「舞いあがっちゃったわね。私も、アルミも」

お掃除ロボの動きを止めて。とぐるさんがうなだれきったアルミの頭をぽん、と撫でる。

「それで無事故は僥倖だわ。反省を今後にロスなく活かせる」

「ああ。——だっ！」

アルミはすつくと立ち上がり——っ！？ 僕らに向けて、ふかぶか、黒髪の下げる。

「助かったぜ。おかげでアルケルにもソウジにも怪我させないですんだ」

「あ、いえ。ってか、こっちこそいきなりコントローラー奪っちゃって…………すみません」

とっさとはいえ、失礼な行動だったと気がついて、コントローラーをおずおず返す。

「あのまま行けばターンできるって確信してて——けど、他の動作を少しでもさせたら転んじやうから…………それが怖くて、つい」

「いや、タクトの判断は正しかったぜ。ってかさ。神業だった。アタシにや無理だ」

「でしょ？ タクトは、おねーちゃんの自慢の弟なんだから！」

「ああ、そーいやソレで驚いたんだっけか」

とぐるさんへと笑顔を向けたアルミの口が、なあ、と言いかけた形で固まる。

とぐるさんは、アゴに指を当て目を閉じて、真一文字に口を結んで…………動かない。

「な…………なんか、またマーシヤたち怒らせちゃった？ の？」

「いや、単なる考えごとだ。考えこむタチなんだよ、とぐるって」

「考え事…………これが」

ひそひそ声の僕らの会話も、とぐるさんにはまるで聞こえていないみたいで。

派手な外見をひっそり沈め、世界の全てを拒絶して、自分の思考に閉じ籠り石に変わってしまったみたいなの立ち姿は、神々しくさえ見える気がして、少し興味が湧いてくる。

「あの…………とぐるさんって」「わかったわ」「うわっ…………!?!?!」

「あなたたち、『さまよってる』って言ってたわよね？ ソーニヤ博士が亡くなってから」

唐突にその生命活動を再開させたどぐるさんは、不意打ちされた僕らの驚きを気にも留めずに、見事なまでの自分のペースで話し始める。

「それはつまり——“行くあてがない”ってことよね？ どこにも」

「あ……そうです。行くあてを、新しい暮らしを、タクトとマーシャは探してるんです。こくこく領き、おねえちゃんが怯えた瞳で、どぐるさんを見る。」

「あ……勝手に入っちゃったことなら」「それは済んだ話。聞きたいのはこの先」

「この先、って？ ——なあとどぐる。いったいナニが『わかった』んだよ」

慣れきった口調でアルミが問いかける。トビ色の眼はジレったようにアルミを捉える。

「忘れたの？ 私たちはドライバーを探してる」「あっ！」「それなら——」

おねえちゃんが、とてとて走ってちよこんとしゃがむ。

「あ……あげられないけど、貸すだけだったら、使っていいよ？」

その手には、おかあさんの形見だっというプラスドライバー。

「ドライバー違いだわ」「ええっ！？」

冷たく言い切り。けれどもすぐに、どぐるさんは慌てたように頭を下げる。

「けど、それはそれとして、あとでは是非とも貸してください」

「アタシらが探してるのは、ネジまわしじゃなく、操縦者の方。こいつらのな」

脱線しかけた話しを戻し、アルミはかちやかちや、コントローラーのレバーを鳴らす。

まっくらな目が、いたずらっぽく僕を見る。

「タクトみたいなのを探してるんだ。ぶっちゃけた話」

「僕っ！？」「ダメ！ タクトはわたしと一緒にいなきゃっ」

「田中マーシャさん？」「はいっ！？」

落ち着き払ったどぐるさんの声に、おねえちゃんの背筋がビクンと伸びる。

「あなたも込みで——私たちのチームを行き場にすることは不可能かしら？」

「マーシャも……込みで？ って」

「実現可能か不可能かどうかはわからない。けれど、もしも実現可能なら、この選択肢は私にとってもアルミにとっても、恐らく、あなたがたにとっても非常に有益なものになる」

おねえちゃんの質問の聲が届いているのかいないのか……どぐるさんは、ただただ自分の話したいことを話するようにしか見えなくて。

「検討してもらえるのなら、各論に話を落としこみたいのだけれど」

「えっと、あの——その」

おろおろと、おねえちゃんの眼が僕を向く。僕にも何とも判断できず、仕方なく首を

傾げれば、おねえちゃんの眼はさらにさまよい——

「ええと、ミケ！ ミケはどうなっちゃいますか？」

「ミケ？ ああ、ええ。ミケももちろん、込み込みで」

——いつの間に、ラックの上でまんまるくなり眠ってる、ミケの尻尾がピクリと動く。

「それならいい、かな？ ええと……あの、チームって？ 何のチームですか？」

「検討してもらえないようね。なら、まずはお互いの現況を整理していきましょう。アルミ？ レギュレーションシートを」(ぐ~~~~~)

大きく長く、どこかコミカルな音が会話を中断させる。

「わり。腹減った、メシにしようぜ？」

お腹を上下に撫でさすり、人懐っこくアルミが笑う。

「二人分も四人——四人と一匹分も変わんねえしさ。アタシが作るから一緒に食おうぜ？」

「え？ ええと……タクト、どうしよう？」

「そうね。空腹は人を攻撃的にしてしまう。交渉前に、食事にしましょう。アルミ、まずは片づけ。お二人も、お荷物。紛失のないように気をつけてください」「あ、はいっ！」

僕への問いの答えも聞かず、おねえちゃんはもう、とぐるさんの言葉に従っちゃってる。

僕も片づけを手伝いながら、それでも一応つぶやいておく。

「……ここは、お言葉にあまえておこうか、おねえちゃん」

※ ※ ※

くるくる、薄切りの牛肉を巻いていく。

僕の隣におねえちゃん。その向かいにはアルミが座り、みんなと同じ作業してる。

「チンジャオロース、チンジャオロース♪ とぐるさん手製のチンジャオロース♪」

うれしげに歌を口ずさみつつ、アルミは脅威の速度で肉巻きを量産していく。

「やっぱり、メイドさんだから慣れてるの？」

不意に、おねえちゃんがアルミに問いかける。

「別にアタシはメイドじゃねえよ。バイト先の制服だからコレ着てるってだけのこと」

「アルバイト先の制服？ それを……普段から着てるの？」

「換えが向こうにいくらでもあるから自分で洗濯しないで済むし、メイド服ってな、見た目より機能的なんだぜ？ 案外動きやすいし、汚れも全然目だたねえ」

なるほど、理解。アルミが着ている服はメイド服っていう名称で、メイドさんが着るユニフォームみたいなものなんだ。から、おねえちゃんはアルミをメイドさんだと誤認した。

「ん？ タクトはメイド服に興味津々か？ でもな、勘違いされちゃあ、ちと困る」

まじまじ見過ぎちゃったみたいだ。テーブル越し、アルミにつんつん突つかれる。

「メイド喫茶をいくら探しても残念、アタシはいないんだわ。アタシのバイトは、出張メイドお掃除サービスってヤツだかな」

ふはっ、とおねえちゃんがへんな息を吐く。

「すごいね！？ 日本には、そんな変わったサービスがあるんだ」

「いや、ウチなんか序の口さ。メイド雀荘、メイド耳かき、メイド美容室、メイド眼鏡屋、果てはメイド駐車場なんてのまで」「肉巻けたの？ 関東一不潔なメイドさん」

キッチンからとぐるさんが顔をのぞかせる。アルミは、ウへつと舌を出す。

「メイドじゃねえし、不潔じゃねえよ！ こりや、料理用のヤツに着替えたし！」

「好きなんじゃない。結局、コスプレ」

巻き終わってる肉の載せられた大皿を手に、とぐるさんはキッチンへと引っ込んでいく。

「ちえっ、コスプレってんなら、とぐるさんがよっぽどコスプレだろうにさあ」

アルミのぼやきを聞きつけて、おねえちゃんが小首を傾げる。

「どうしてなの？ 日本の高校の制服だよ、あれ。確か、ブレザー？ とかい」

「まあね。十八歳以下、ってか、高三までが着るなら全然普通。けど、とぐるさんは」

「ぼやっとしてないで手を洗いなさい！ 生肉を触ったんだから」

キッチンから、タイミングをはかったような鋭い叱咤。

アルミは苦笑し、肩をすくめて席を立つ。

「ま、本人から聞きゃいいさ。どうせその辺の話になるし」

「その辺の話？」

「だから後だって！ 肉が切られて焼かれる前に手洗って皿を並べとかないと。とぐるさんを怒らせちゃったら、配給、もらいそこねるぜ？」「配給をっ！？」

おねえちゃんが立つ！ 雷に打たれたような勢いで！！

「手はどこであらうの？ ああほら、タクトも早く」「う、うん」

何故だか突然焦り狂ったおねえちゃんの指示に従って、素早く手を洗い皿を並べる。部屋の隅では一足先に、ミケがおじやっぽいものとミルクとの食事を楽しんでいる。

「お待たせしたわね」

着席しなおしたその瞬間、中華鍋を手に、とぐるさんがキッチンからやってくる。

「ふわっ！？」「……………」

ザっ、ザっ、ザっ、と中華鍋が振られる。

その度に、緑と茶色が宙を舞い、一人前ずつ、ピーマンと牛肉と……多分、たけこの細切り炒めが、魔法のように皿へと移る。

「待あってました！ とぐる先生のチンジャオロースっ」

なるほど、この料理の名がチンジャオロースか。記憶した。

「ふわあ、すっごくいい匂い。とぐるさん、お料理上手なんだー」

「私は、炒め物と揚げ物だけ。煮物とかはアルミの方が上手だわ」

「すごいすごい。だったら、ふたりいれば何でも食べられちゃう！」

「んなことよりさ！ 冷めないうちに」 「ああ、そうね」

テキパキとご飯をよそい、中華スープをお椀に注ぎ、程なくとぐるさんも席につく。

「それじゃ、いただきますしよう」

「いただきますまー……すー」 「あ、いただきます」

勝手が解らず、僕だけタイミングがズレちゃったけど――

「なにこれ！ おいしいっ、お醤油ちよつと効かせてる？ すっごく白いご飯とあう！」

「ふある！？ ほの肉の味とピーマフの歯ほはへへ、アラヒはほぐるはんひ釣らへはふは」

「ああもうアルミ！ 口に物をいれて喋らない！」

――誰もそんなことは気にしてなくて、ホっとして僕も一口食べる。

「おいしい」

自然と言葉がこぼれてる。

味がどうか細かく感じられないけれど――とにかくこれは“美味しいもの”だと、僕のどこかが判断してる。

「そうだね、タクト、すっごくおいしいね」

にこにここと、どこかホッとしたような目で、おねえちゃんも優しく笑ってくれる。

ってか、チンジャオロース、ご飯、スープと食べ進んでいくと、三角形の連鎖に箸が全く止まらなくなってしまふから。やっぱきつと、すっごくおいしいものだと感じてるんだ。

(なのに、どうしてみんなみたいに、“醤油の効き”とか、“肉の味”とか、その辺のコメント、さっぱり感じ無いらろう？ ……これも、記憶喪失の影響なのかな？)

「ふたりとも、お箸、とても上手ね」 「！」

とぐるさんの不意の言葉に驚かされて、けど、おねえちゃんはニコニコ答える。

「あ、タクトもマーシャも、三食に一度はお箸を使う、ご飯の習慣だったの。日本で暮らすときのための練習って、ママが」

「ってこた、ソーニヤ博士、また日本で暮らす予定あったんかな？」

「んー……具体的にどうこうってトコまでは、聞いたことなかった」

お箸を使う練習だとか、そんなこともまるきり、覚えていない。

けれど体は、自然に上手にスムーズに、箸を動かし食事を進める。

それはもちろん心強くて……けれど同時に、なんだか寂しいような気もして。

「タクトくん、おかわりは？」 「え？ あっ」

とぐるさんに聞かれて気づく。ごはん、僕……ってか、みんなもう食べ終わってる。

「いえ、大丈夫です。ごちそうさまでした。おいしかったです」

「そう？　なら何よりね。お粗末さまでした」

「粗末だなんてとんでもないです。すごく美味しいご馳走だったと思います」

「だよね！　マーシヤもタクトにさんせー！」

「ああ、じゃなくて、謙遜。実際にご馳走だとしても、『あなたにとっては粗末なお食事でしょうけれど』って謙遜して相手をたてる、日本の習慣からきた、挨拶なのよ、これ」

「そう……なんですか」

自分の無知に寂しい気持ち膨らみそうでおねえちゃんへと問いかける。

「おねえちゃんは知ってた？　『おそまつさま』って」

「ううん？　ウチはだって、『ごちそうさま』に『どういたしまして』だったもん」

「そうなんだ」

ホっとする。おねえちゃんは僕と一緒に、心強くて。

「アタシの実家も家族だけのときは『どういたしまして』だったかなー。お客様とか、そういうときは『お粗末さまでした』って感じで。ま、その辺は家ごとか地方ごととかでも違うだろうし、どっちでもいいんだと思うぜ？　大事なのはさ、マナーと感謝で」

「そういうものなんだ」

「そうね。アルミの言う通りだわ。大事なのは、感謝と、“マナー”」

とぐるさんの優しい笑みに、アルミがパッと立ち上がる！

「さて、食器を片づけなきゃな。マーシヤ、タクト、手伝ってくれるか？」

「あ、もちろんです」「お皿、僕が持ちます」「ありがとなー」

アルミの指示に従って分業し、食器を下げてお皿を洗って拭いて乾かし棚へとしまう。そうしてみたら気づくけど、台所、もうものすごく機能的にピシリと整頓されてる。

調味料類は開けやすそうなビンに移され、見やすいラベルで手の届くところに並んで、鍋の全部もフライパンまでもピカピカに磨かれ壁からつるされて。包丁はラックに綺麗に並び、フォークもナイフもスプーンも、それぞれ固有の浅いバスケットに収められてる。

（……とぐるさんって、きっちりした性格なんだなあ。ってか、そういえば――）

なのにどうして、服装だけは、“きっちりした”とは正反対の……やけに目立った感じなのか気がなれば、アルミがさっき言ったことが思い出される。

（とぐるさんの方がコスプレ、ってどういうことだろ？　あとで、本人に聞いてみよう）

「終わったぜー、とぐるさーん」

「御苦労さま、ありがと。席に戻って少し待ってて？　お茶をいれるわ」

……淹れたての緑茶の熱さが喉を落ちて行く。

ほうっと、みんなが一息を吐く。

「さて。本題に入らせてもらってもいいかしら？」

とぐるさんが静かに言えば、おねえちゃんはピッと背筋を伸ばし直す。

「タクトが——タクトとマーシャとミケがこみこみで、とぐるさんたちのチームに入る、つていうお誘いのことだね？　そこを、行くあてに出来るつて」

「誘いというか、提案ね。それが現実的なものかどうかを、まず検討したいの」

「具体的には、どういう案なの？」

おねえちゃんが重ねた問いに、とぐるさんは、ん……つと言葉を止める。

「まずは、事実確認。あなたたちの年齢は、いまいくつ？」

「マーシャが十八。先月にお誕生日があったんばかり。それでタクトも、四月のお誕生日がもう過ぎていて、十六才」

なんか——おねえちゃんやけに“お誕生日”を強調してる。

……先月、ちゃんとパーティできなかったとかなんだろうか？

「学年でいうと二つ違いなのね？　マーシャさんが私の一つ下。そのさらに一つ下がアルミで、その一つ下がタクトくん。見事にバラけてるわけ」

ええと、つまり。とぐるさん↓おねえちゃん↓アルミ↓僕つていう年齢順になるわけか。

「うへー、マーシャちゃ、さん、アタシよりも年上なのか」

アルミが驚いた声を出し、すぐさま慌てていいおす。

「アタシより年上、なんでございますね」

「ううん、普通に話して？　その方が気楽だし」

「そ？　んじゃ」「こほん」

咳払いひとつで場を鎮め、とぐるさんはさらに問いかけてくる。

「教育はどういうものを？　その公的な証明書とかは受け取れるのかしら？」

「ええと——」

チラっとおねえちゃんがミケを見る。ミケの尻尾がぶん、と振られる。

「証明書とかは大丈夫。マーシャもタクトも九年生……義務教育は全部受け終わってて、マーシャが通ってたのと同じリツェイに、タクトは合格してたから」

「リツェイっていうのは——ロシアの高等教育機関？」

「うん。けど、マーマが亡くなって、通う間もなくロシアにいられなくなって……」

「義務教育は終わってる。高等教育機関にも合格している。公的な証明書も取得できるなら——ふたりとも、少なくとも編入試験を受けることには問題なさそうね」

「編入試験？」

ミケの口から聞いた言葉が飛び出してきて、おねえちゃんと顔を見合わせる。

「つて、急ぎすぎだぜ　とぐるさん。二人ともポカンとしちゃってるし」

「あ、ああ。そうね。編入試験、っていうのは」

「平気、わかる！　あのね？　タクトとマーシャも、実はその辺のこと考えてたから」

「そうなんです。編入試験を受けて、特待生になって、新しい暮らしができないかって」

「そうなの……」

今度はアルミととぐるさんが、驚いたように顔と顔とを見合わせている。

「ちなみに——具体的に入学を希望している学校とかは、既にあるのかしら？」

「そういうのはまだ全然。これから、調べたりしようかな？ って」

「すげえな。こりやあれだ、カモネギってヤツ」「渡りに船”ね？ アルミ」

前のめりになったアルミをたしなめ、とぐるさんは、スつと立ち上がり背筋を伸ばす。

「今さらだけど……改めて、自己紹介をさせてもらいます。私は、開閉器とぐる。可和越第二高専の四年生。生徒会長と、可二高専人型機械工作部部长を務めています」

おねえちゃんと僕も立ち上がり、差し出された手と握手して、そのままコトン、と、困ったようにおねえちゃんが首を傾げる。

「かいへいき？」

「開く閉じる器。で開閉器。私の名字——ファミリーネームね」

「そうなんだ！ で、かわごえだいにこうせん？ ええと……カニコーセンっていうのは」

「可和越第二高専を略して、可二高専」

言葉と一緒に勢いも良く、アルミも僕らへ手を差し伸べる。

「可二高専二年。ヒトガタ部製造班長、刃金有実だ。よろしくな。ヤイバのキンって書いてハガネで、アルミは有名の有に木の実の実」

「刃・金・有・実でハガネアルミさん——っつか、あ、あつ！ あのっ、マーシヤ、わ、わたしはマーシヤ。正しくは田中マトリョーシヤで、愛称がマーシヤです」

おねえちゃんが自己紹介して頭を下げて。僕もそのまま真似をする。

「僕は、田中タクトです。愛称とかは特にないと思います」

「でさ、マーシヤにタクト。ぶっちゃけ、可二高専に来る気ない？」

カニコーセン——可和越第二高専。それは説明してもらったけど……

「あのお……高専って、なあに？」

……僕の感じた疑問をそのまま、おねえちゃんが質問してくれて。

「高専。ただしくは高等専門学校」

すぐさまに黒ぶち眼鏡をクイと持ち上げ、とぐるさんが淀みない説明をくれる。

「義務教育課程を終えたものが進学可能な、五年制の高等教育機関。主に工学・技術系の専門教育を、高校から大学という七年間のコースで学ぶよりも、効率よく重複無く行うことを目的としている」

「工学・技術の専門教育……ああ。だから、ロボットのことに詳しい」

「またきたご明答！」

思わず零れた推測は、満面笑顔のアルミにすぐさま拾われる。

「アタシら高専生の感覚でいうとさ、高校に行くのは“やりたいことを探す連中”で、

高専に来るのは “ やりたいことを見つけてる連中 ” なんだ。で、ロボットってのは間違
いなく、高専生の “ やりたいこと ” のベストスリーに入ってる」

「そして、私とアルミもその例外じゃない。ロボットを一生の仕事にしていこう——そのた
めの重要なステップとして、ロボコンで実績を上げたいの」

「ロボコン？」

また出た知らない単語に自然と、おねえちゃんと僕の声が重なる。

「ロボコンって、いったい——」

「毎年変わるレギュレーションのもと、高専生達はその技術の粋を極めたロボットで、優
勝目指して競い合うロボットコンテスト——それが、ロボコン」

「今年の競技は、『RUN&THROW』ってあって、アタシらヒトガタ部には結構有利
そうなレギュレーションなんだわ。けど、ドライバーがいなくて」

「アルミ。見せた方が早い」

「あ、そうだな！ あたしの部屋か。ちよろっただけ待っててくれな」

ドタドタ大きな足音を立て、アルミは廊下へと駆けだしていく。

と、思った次の瞬間には、ボタン！ とドアを閉じる音。

そうして、薄い壁越しに、ガチャガチャと金属音が伝わり聞こえる。

「きっと、少し時間がかかるわよ？ あのコ、いつも自室は散らかしてるから」

「あ、やっぱり！ ここ、とぐるさんのお部屋なんだねえ」

納得、とクスクス笑うおねえちゃんに、とぐるさんは “ ああ ” と小さく頷く。

「そういえば、このアパートのことを話していなかったわね」

おねえちゃんが小首を傾げる。

「このアパートのこと？ なんか特別なアパートなの？」

「ここは、可二高専が借り上げている学生専用アパートなの」

学生専用、という一言に、なんだか納得してしまう。

ミケにつられて入ってきたとき、古めかしいなと感じてたから。

けど、白とこげ茶で統一されてるこの室内は、古さを感じず……むしろ都会的な印象だ

「可二高専は通学制主体の高専だから、いわゆる学生寮はないのよ。その代わり、こうい

う学生専用アパートがいくつかあるの。その中で、この『九頭励荘』は、最も古い物件」

「くずれそう？」

「じゃなくて。くずれいそう。九つの頭を励ます、で、くずれい。その名の通り、学生用

の部屋は九つ。一階に四つと、二階に五つ。一階の残りの一部屋は管理人室で、普段は、

管理人さんが常駐してるの。けど、今はご病気で入院なさってる」

「病気……」

おねえちゃんの表情が暗く沈む。おかあさんのこと、思いだしたのかもしれない。

「おねえちゃん……」

「あのっ、お大事にとって——ええと、伝えられるなら」

「そうね、ありがとう、電話で毎晩の報告をしているから、そのときに」

「あ、お話できるんだ！ よかった」

嬉しさと安心を顔じゅうににじませて、ホっとお姉ちゃんがつぶやいて。

とぐるさんまでつられたように、わずかな笑みを頬に浮かべる。

「そんなに重いご病気じゃないって聞いているわ。ただ、安静が絶対に必要で……責任感の強い方だから、ここにいとどうしても動きまわってしまうの」

おねえちゃんと思わず顔を見合わせる。

隣室からの金属音は、少しも休まず響き続けている。

住人にアルミがひとりいるだけで——確かにいろいろ、騒がしそうだ。

「それで、私は今暫定的に管理人代理を任されている。私の部屋がこの一〇二。両隣が管理人室の一〇一と、アルミの一〇三。廊下の向いが一〇四と一〇五で、両方空室。うちひとつ、一〇五は、学校と管理人さんとの許可を得て、私達が使わせてもらってる」

「さっきの、あの部屋ですか？ ロボットを動かした」

「そうよタクトくん。ちなみに二階は全て空室。防犯のため、今は階段を封鎖してある」

「ってことは……今、くずれっ——九頭劔荘には、とぐるさんとアルミちゃんだけ？」

「ええ、そのとおりね、マーシャさん。で、ね？——さっきの話の続きなのだけれども」

言って一息小さく吸って、とぐるさんは眼鏡をキラリと光らせる。

「可二高専の特待生になれば、在校中は無償で学生アパートへ入居できるの」

「むしよー！！？」「無償……って、つまりは、タダってことですよね？」

「ええ。実際に特待生の私が言うんだから、間違いないわ」

静かな答えは、おねえちゃんの眼をみるうちに丸くする。

「わわ！ とぐるさんってば特待生だったんだあ！ だったら、ええっと——」

「そうね。多分、教えてあげることができる。ソーニヤさんとタクトくんとの、編入試験対策の勉強を。ふたりの努力次第ではあるけれど、特待生合格になる可能性を、相当程度には引き上げることができるんじゃないかと、私としては思っているわ」

「すごいねタクト！ 本当にこれって、渡りに船だね」

ぴよんぴよん跳び跳ね、おねえちゃんは無邪気に喜んでいる。けど——

「あれ？ どうしたの、タクト？ 嬉しくないの??」

「嬉しいけどさ。ええと、僕たちにとっただけじゃなく、『とぐるさんとアルミにとっっても、有利』って話だったでしょ？ これ。なら、僕たちが可二高専ってどこに入学することと、とぐるさん達にどんなメリットが産まれるのか。そうして、そのメリットを僕たちが本当に産み出せるのかを確認しないと——まだ喜ぶのは早いかなって思ったから」

「あ、そっか。それはそうだねえ」

「慎重ね、タクトくん。理想的だわ」「え?」「おーい! 片付いたから来てくれよ」その瞬間、元気いっぱいのアルミの声が薄い壁ごしに響き渡って。

「行きましょう、マーシャさん、タクトくん」

とぐるさんはすぐ立ち上がり、ドアノブに手をかけながら僕らに告げる。

「すぐに解るわ。私たちが求めるものも、あなた達がそれを満たせるかも」

「——はい」

……はつきりとした記憶はないけど、多分、テストを受ける前ってこんな気持ちだ。普通に歩いてるつもりなんだけど、どこかが妙にふわふわしてる。

「入るわよ」「おうっ」

許可を求めるのではなく、当然のように入室を告げ、とぐるさんの手がドアを開く。

黒と銀。っつか、黒と鉄とが、そのとたん、視界の全てを埋め尽くす。

壁紙も、家具もカーテンも黒基調。その中に、無数の金属部品たち。

「わわ——すごいねえ。黒いお部屋だあ」「にやう」

ついて来てくれたミケが、今にも崩れそうな部品の山をトッ、ト、と一息に跳ね登る。

「へえ、ネコってのは器用なもんだな」

アルミの素直な感嘆に、とぐるさんがフっ、と聞えよがしに鼻を鳴らす。

「あなたの方が器用だわ。よくも、崩さずに積めるものね?」

「慣れだよ、こんなん。けどま、ちよつとしたコツはある。聞きたいんなら」「結構よ」

アルミのスルーを華麗にスルーし、とぐるさんはスつと部屋の中央を指さす。

「あれを見て貰えるかしら」

その指の先、テーブルの上。かなり大きな——五メートル×一メートルくらいの——

箱庭のような、道路の模型? が据え付けられている。

「わ、なんだろ。……何かを走らせるコースかな?」

おねえちゃんのご感想に、なるほどと僕もうなずいて、瞬間、そうかと思いがたる。

「その、ロボコンでしたっけ? ロボットコンテストのレースコースなんですか?」

「ほい来たご明答!」

アルミがパチンと指をならして、待ってましたとコース模型の手前に座る。

「んつと……どこから説明すればいいかな」

『RUN&Throw』は、二手二足のロボットを使つての、二チーム対抗のタイムレースなの。ただし、ただのタイムレースというわけじゃない」

アルミの言葉を即座に受け取り、とぐるさんはスラスラと説明を重ねてくれる。

「模型の真ん中がフェンスで区切られてるわよね? その奥側を赤チームのコース。手前側を白チームのコースと考えて?」

「ええっと、それなら——赤組と白組は、それぞれのコースをそれぞれに走るの？」
おねえちゃんの問いかけは、満足そうなうなずきを引き出す。

「そのとおりね。見てのとおり、赤組のコースは逆S字。白組のコースはS字っていうことになる。スタート地点は、それぞれ最奥と再手前。つまり、ゴールはフェンスを挟んで隣接して向かい合うことになる。タクトくん、ここまでは大丈夫かしら？」

問いかけられて、慎重にコースを確認しなおす。

S字といっても、横の直線三本と、縦の短い直線二本で構成された、全ての角が直角になった、“カチツとしたS字”のコースだ。

白組のコースは、Sの字の一番下の横直線の左側、切れてる部分がスタート地点で、上の右で切れてる部分がゴールになる。

白組コースの真上に横線でフェンスを引いて、その線をセンターにぐるり、縦方向にひっくり返したのが、そのまま紅組のコースになってる。うん、大丈夫だ。

「はい、わかります」

「各コースには、それぞれに同一の高低差と障害物とが設置されてる。S字の三本の横線の、それぞれ中央に位置するところね」

「ふわ——模型でもちゃんとしてあるね」

「そりやそうだ。正確な縮小模型じゃなきゃ、シミュレーションの役にたたねえからな」
自慢げなアルミの声が、疑問をひとつ呼び起こす。

「この模型の縮尺は——」

「きつちり一／一〇で作ってあるぜ？」

「なら実際のコースは、白組なら——スタートから一〇メートルを走行して直角に左折。二メートルを走行して、また左折で一〇メートル。今後は右折して二メートル、そして右折で、ラストの直線一〇メートルを走ってゴール。で、合計が——全長三四メートル、プラス高低差プラス障害物、ってことになりますか？」

「すげえな！　どんピシャだ」「距離感どうやって取ってるの？」

アルミととぐるさんの声が被って、ほめ言葉には頭をさげて、口では質問に答えてく。

「いや、S字の横線が一本が、だいたい一メートルだと思ったから。縦線一本は、その五分の一くらいだろうって……その程度の目安をつけただけですよ」

「にしても凄えよ」「そうね、一対五を目視で迷わず取れるのは、素晴らしい特質だわ」とぐるさんの静かな声は、ほめるといふより、採点評価のように聞こえる。

「ねえねえタクト、じゃさ、障害物のおつきさはわかる？」

おねえちゃんの問いかけは、もう純粹な好奇心。そして、わくわくした期待。

僕が出来ると思ってくれて——だったら、必死で目を凝らす。

「……スタート最初の直線の中央にある障害は、高さが一メートル高くなる、垂直な段差。

そこに幅五十センチメートルのハシゴがかかっている。二番目の直線の中央には、平均台。幅が三十センチで、長さは三メートル。みつつめ、ラストの直線中央の障害は、下りの急坂。長さが三メートルで、一メートル低くまで下りるから、三三三、三%の勾配、

「パーフェクトだぜ！　すげえな、タクト。めっちゃめっちゃいい目してるじゃん」

「いや、模型の方が出来が精密だったからだよ。ハシゴの段とか、全部完全に等間隔だし」「ま、それだけがアタシの取り得だかんない」

アルミが二へつと笑えばジャラリ、腰の工具ベルトも笑う。

その音が消えきらないうちに、とぐるさんはサラリと話を元の流れへ押し戻す。

「このコースを、二手二足のロボットで五分以内に走破して、相手チームより先にタッチダウンする。これが、『RUN&Throw』の、最優先の勝利条件」

「タッチダウンって？」「そこ、ゴールの黄色い丸印」

おねえちゃんの質問に、すぐさまアルミが答えを返す。

「そこがタッチウダウンゾーン。そこにロボットが、手でボールを触れさせれば勝ち」

「ボールって？」「ボールがあるのは、スタート地点」

とぐるさんの静かな声に、自然と視線がコース模型を遡っていく。

白・赤両方のスタート地点におかれているのは、ミニチュアサイズの精密なカゴと、その中にある、それぞれ三つずつのボールとだ。

「このボールを、ロボットが持って運んでいけばいいんですか？　で、手を使って、相手よりさきにタッチダウンできたら、勝ち」

問えば、満足そうにとぐるさんは頷いてくれる。

「基本的にはそのとおりね。それがいわば、『RUN&Throw』のRUNの部分」

ん？　とおねえちゃんが小首を傾げる。

「ランもスローも英語だね？　ランが走るで、スローは……遅い？」

「おしいっ！　SLOWじゃなくて、Throw。ってか、アタシの発音がダメだったら

ゴメンだけだよ。——ともかくもまあ、こっちの方だよ。」

おねえちゃんに向けニヤリと笑い、アルミは大き振りかぶってブンっ、腕を振る。

「三発だ。相手ロボットにボールを投げて、三発ぶつければそれで勝ち」

「つまり——競技ロボットは競技時間内に、投擲によって、相手ロボットのハンド・アーム・脚を除いた部分に、ボールを三回命中させることでも勝利出来るというわけね」

「アームとハンド？」

「アームは肩から手首まで、手首からと指とがハンドって思っといってくれればいいさ。ん

で、手っていうときは、アームとハンドの集合体な」

「ふうん、そうなんだ」

「両者を区別してること——その区別がルールと関わってくるんですか？」

聞けば、とぐるさんの口もとが微かにほころぶ。

「そのとおりよタクトくん。けど、それは設計レベルの話だから……今は先に、競技内容の説明を続けさせてもらってもいいかしら？」

「はい、もちろんです」

「競技に使われるのは、表面に特殊な加工がされたゴムボールになる」

「表面に特殊な加工——ですか？」

「これこれ。実物、ハンズで買ってきた」

メイド服のポケットから、アルミが直径10センチくらいの白いゴムボールを取り出す。

「タクト、そこに転がってるアクリル板拾ってくれよ。んで、胸の前にかまえる」

「アクリル板——これ？ で、こう？」

「そそ、それでいいぜ」

B4サイズくらいの透明板を床から広い、言われたとおり、胸の前にかまえる。

アルミは力強く振りかぶり、メイド服の下の細い足を一気に持ち上げる！*

「よっと！」（パシンっ！）

「あっ！？ 赤いのついた！」

おねえちゃんの言うとおり、ボールの命中した部分——アクリル板には血痕みたいな赤がべったり貼りついている。

「瞬間的な衝撃があると、その瞬間だけ塗料が外ににじみ出るように作られている。から、当然。ボールをぶつけると対象物に、塗料が付着することになる」

「塗料はすぐ引っ込む。で、瞬間的じゃねえ、じわじわとした力のかけ方だと、ほら」

跳ねて足元に転がったボールをアルミは拾ってギュウっと握りつぶして——

「な？ 塗料は出てこない仕組みなんだわ」

——開かれたアルミのてのひらは、言葉の通りに、真っ白で。

「すごいすごい！ これおもしろいっ！ ねえ、タクト」

「そうだね。……ってか、えと」

「試してみる？ マーシャさんも」「うんっ！」

頼むよりさき、とぐるさんが空気を読んでくれる。

おねえちゃんの手にもアルミがボールをヒョイと渡して。

「いくよー！ えいっ！ー！」

「「あっ」」

良く狙ってねと言うより早く、おねえちゃんの投げたボールは僕を遙かに飛び越え

「にやぐっ！！？」「ふわわ！ー！？ ミケっ！ー！？」

哀れ、うたたねしていたミケの背中に狙ったように直撃しちゃって！

「ミケ！ ごめんねっ！？ あっ」

おねえちゃんの言葉が聞こえていないのか、ミケは尻尾をもうブワブワに膨らませ、瞬時に柵を駆け下りて、その後ろへと隠れてしまう。

「おねえちゃん、ミケ——大丈夫かな？」

「ミケだもん。落ち着けば出てきてくれるよ？ けど……どうしよう、赤いの」

「ああ、水性だから洗えば簡単に落ちるぜ？」

「付着力が強く、けれど落としやすいという特性から、競技に採用されたのだと思うわ」

おねえちゃんとミケのドタバタに少しも動じず、とぐるさんはサッと話を戻す。

「さっき言ったように、競技ロボットは、相手ロボットに向け、ボールを投擲することができる。一個でも複数個でもかまわないけど、命中判定は一個ずつ」

「そっか！ その命中判定に塗料があると便利なんだ」

おねえちゃんの声には、小さな頷きだけが返され、そのまま言葉が続けられる。

「投げられたボールが、ロボットの手と足以外の部分に命中したら、命中させられたロボットには六〇秒間のペナルティストップが命じられ、同時に、両ロボットへの九〇秒間のボール投擲禁止が宣言される」

「レース時間が五分。うちの、一分間ですか。……かなりキツイペナルティですね」

「そのペナルティが解除されたあとも、んと……二十秒、どっちもボールを投げられない？」

「そのとおりね。投擲禁止期間中にもしもボールを相手に命中させても、それは無効とされてしまうの。複数同時投擲の場合も、最初の一個以外の命中は無効」

「となると……『相手にボールを三つ命中させる』は、かなり達成が難しい気がする——」

「そうね。ボールには相手のもの、自分のものの区別はないから、相手が投げたボールを偶然かキャッチかで回収しないかぎり、三つ目のボールを投げた時点で、RUNでの勝利条件は満たせないということになってしまう」

「それでもなくても投擲させて命中させるって芸当は超絶に難しいわな。けどよ——」

言って、アルミがコース模型の中心を指す。ゴール直前、ラストの直線は、赤コースと白コースとが、背の低いフェンスだけを挟んで、ほとんど隣接してしまっている。

「ゴール直前の直線で並べばゼロ距離同然の投擲になるし、他のトコでも結構な高低差があるからな。ペナルティストップを狙うだけでも、投げなきゃ損ってツクリにはなってる」

「そっか——そうだね、平均台とか、超ネライ目だね」

おねえちゃんの声につたれて、二番目の直線の真ん中にある障害物——平均台を見る。

開けた高所で、幅が狭く、回避運動の余地が無い。確かに……狙撃レベルの正確な投擲さえが出来るなら、コース一番の狙いどころ——いや——

「最終直線の障害の下り坂も狙い目だと思う。多分この坂、手を使わなきゃ下りれないだろうから……先行さえしてれば、ほぼ確実にあてられると思うよ」

「あ、そっか！ そうだね、さすがはタクトだねっ」

「つてかさ、マジでいい目してんな。なあ、とぐるっ」

アルミの問いに、ほんの僅かだけ頷きかえし、とぐるさんはルール説明を再開する。

「両ロボットが共に、タイムアップより前に、『タツチダウン』も、『二つ命中による勝利』も満たせなかった場合には、判定で勝者を決めることになる。まず、『ボールをハンドに持っていて、ゴールに近い方の勝利』が勝利者とされる。距離判定は、ゴールからの直線距離じゃなく、ゴールから、コースの中心線を逆にたどっていった距離で行われると規定されてるわ。で、それも満たされない——つまり、両ロボットがともに、ハンドにボールを持てていない場合には、単純に、『よりゴールに近い方の勝利』と判定される。万が一、それでも同着になった場合は、三十分の再整備のち、再レースね」

一気呵成の説明をうなぎながら聞き終えて、おねえちゃんがぼつり、呟く。

「……判定のときも、ボール持つてるほうが有利なんだね」

「つてことなら——ボールはやっぱり、投げ切っちゃわないう方がよさそうか」

「うんにゃ、ところがそうとも言い切れねえ」

待ちかまえてでもいたかのように、アルミが素早く口をはさんでくる。

「何故つてな？ ペナルティストップ中のロボットは、『実際の状態がどうしても、“ボールを手を持ってないもの”と判定される』ことになっちゃうからなんだ」

「え？ えつと……」「なら——」

混乱しかけてるっぽいおねえちゃんのため、一端ピシっと言葉をとめて。

それからゆっくり、話を整理しなおしていく。

「一番単純に考えれば、試合終了一分前が最大のポイントになりますね」

「えと、どうして？ タクト」

「ボールを命中させれば、相手ロボットは『手にボールを持たないと満たされる状態で、その場に静止する』でしょ？ もし、試合終了まで一分を切った状態でそうできれば……」

「んと、ペナルティストップが一分だから……そのまま試合終了になっちゃううね？」

「そう。で、両方ゴールできないときの優先勝利条件が、『ボールを手を持っていて、ゴールにより近い方』だから、自分が、一個でもボールを手にしてさえいけば——」*

「そっか！ 試合終了時点で相手をペナルティストップさせちゃえば、自分はコースのどこにいたって、ボールだけ持ってたれば勝ちなんだ！」

今まさに勝利を決めでもしたかのように、おねえちゃんがピヨコンと跳びはねる。

「じゃあえつと……二個目のボールは、試合が終わる一分前までは投げない方がいいね？」

「そうだね。それが当たれば、その時点で勝利確定だからね。けど——相手にそれを回避されちゃって、そのままじゃ負けが確実なときには、三個目のボールを投げざるを得ない」

「んつと、それが当たれば『両方がボールをもってない』つてことになるから……そっか、止めてる間に、相手よりゴールの近くにいければ、ボールなしでも勝てるんだ！」

「だね。『三個あてての勝利』以外でも、投擲が一発で試合を決められる要素になるよう、ルール設定がされてるんだね」

「素晴らしい理解だわ、ふたりとも」

こどもを褒める女教師のような口調で、とぐるさんは僕らにゆっくりうなずいてみせる。
「それでも、投擲が必須要素じゃない以上——それを捨て、踏破能力と速度、速度にもなう回避性能を武器にして、先着ゴールを目指していくという戦い方も選択できる。というか——ある程度のロボットたちは、その戦略を実際にとつてくるでしょうね」

問いかけるような沈黙に、おねえちゃんが素直な言葉を流す。

「そうする方が簡単だから？ 投げるっていう要素を削れば、走ると越えるのに集中させられるし——シンプルな分、トラブルの少ないロボットができあがる気がするし」

「だな。けどな、タクト。そんなロボットじゃつまらねえだろ？ ロボコンってなさ、アイディアマンシップを競ってナンボの競技だぜ？」

アイディアマンシップ——初めて耳にする言葉だけれど、それにアルミが強い誇りを感じていると、ひしひし僕にも伝わってくる。

「投擲して、しかも移動目標に命中させられるロボット。——そいつを作るのは難しい。難しいけど、だからこそ挑戦する価値がある」

「そして、私にはそのロボットが設計できる。設計をしたロボットならば、アルミが必ず、完璧な精度を持って組みあげてくれる」

「けどよ——あたしらが勝てるロボットを作っても……それでもまだ、足りねえんだよ」とぐるさんが、アルミが僕を、真直ぐに見る。

ふたりが僕に何を求めているのかを、強く感じる。

「操縦を——僕が担当すれば、勝てる？」

「少なくとも、私はそう確信した。アルケルを助けてくれたあの瞬間に。そして二人の会話を聞いて、その確信は深まった」

「ふたりって……タクトとマーシャのこと？」

おどろいたようなおねえちゃんの言葉に、アルミが真面目な顔で答える。

「ああ。ロボコンは基本的に、一チーム三人十一人って構成なんだ。操縦者一人に、ピットクルーが二人。これがチームで、プラスの一人は、引率者」

「いんそつしゃ？」

「大抵は、そのチームを指導している教職員が行うの。やることは、チーム全体の監督ね。競技中には、ロボットやチームの戦い方に関しての作戦指揮。オペレーションも行うわ」

「だけどな？ ウチの顧問の富田先生は……なんだ、いわゆる名義貸しみたいなもんなんだ。から、今まではとぐるさんがピットに入らず監督をやってたんだけど……」

言いづらそうに、チラリ、アルミがとぐるさんを見る。

「向いていないのよ、私は。独善的なもの。自分の判断が100%と信じ切り、現場の判断や状況を理解しない。普段は——今もね？——気をつけるようにしているのだけれど、いざ競技となり、興奮してしまつと……完全に視界がこうなつちゃうの」

両手のひらを垂直に立て、とぐるさんは自分の視界をギュッと狭める。

「創部当初には二十名を数えた部員も、今ではたったの二人。私のせいで」

「いや！ とぐるさんは悪くねえよ。アイツらに根性がなかつただけで」

「……私とアルミは、こうなのよ」

とぐるさんが苦笑して肩をすくめれば、アルミもあつ！ という顔をする。

「だから、マーシャさんにはオペレーションを担当してもらいたいの。お互いの意見を交換し、その中から新しい気付きを見つけだしていく。……私とアルミが設計・製造で行っていることを、指揮と操作で、マーシャさんとタクトくんとは行えるように思えるから」

「みゃう」「にっ！」「に」

棚の影から、赤い模様をつけたまま——けど、何事もなかったようにのんびりミケが姿を現し、おねえちゃんの足元に体を何度も摺りつける。

「ほら、ミケも賛成してくれてるぜ！？」

調子のいいアルミの言葉は、けど、目の前の光景にピッタリはまる。

ミケは実際、「話に乗れ」つておねえちゃんに、促すために来たんだろう。

「タクトは、どうしたいの？」

それだけ言つて、おねえちゃんが、まっすぐまっすぐ僕を見る。

「え？ 僕は——おねえちゃんが決めたとおりに」「それじゃ、ダメ」

背伸びして、ピッと真直ぐ、僕の鼻先におねえちゃんが人差し指を突き立てる。

ふざけたような仕草だけれど、おねえちゃんの眼は真剣だ。

「おねえちゃんは、タクトの味方。タクトがそれを望んでくれる限り、私がいられる限り、ずっとタクトと一緒にいるし、いつでもタクトを助けてあげる。でも、おねえちゃんともしはぐれちゃたら——そのときは、タクトは自分で、自分のことを決めなきゃいけない」

「うん」

頷いている。おねえちゃんが僕を心配してくれてるつて、心の全部が感じとつてる。

「だから、自分で決めなきゃいけないことは、ちゃんと自分で決めなさい？ 記憶がなくても、自分が何をしたいのか、自分がどうしていききたいのかは、ハートで判断できるでしょ？ それに素直にしたがつたなら、それがきつと、一番タクトにいいことだから」

「僕は——」

目を閉じ、静かに考える。

僕が一番に望むのは、おねえちゃんと一緒にいること、おねえちゃんとミケと一緒にいること、そして感じる幸せを、そのまま守っていくことだ。

そうするためには、居場所とお金が必要で、特待生と奨学金とは、その大きな助けになつてくれる。

「……僕とおねえちゃんととぐるさん達のチームに加わり、ロボコンに参加すれば、僕たちは、ここに居続けられるんですよ？」

「そうすることができれば、そうね」

確認のつもり言葉はけれど、とぐるさんによって訂正される。

「そうなるためには、二人に可二高専に編入してもらうことが必要になる。だから私は、二人が編入試験に特待生としての合格を果たせるように、可能な限り勉強を教えるようにする。——完全に、利害は一致しているように思うのだけれど」

「でしたら僕は——」

おねえちゃんを見ず、自分で決める。そうすることを望まれてると思うから。

「——僕は、この提案を受け入れさせて欲しいって思います」

「あのっ！ マーシャからも質問してもいいですか」

そのとたん、弾かれたように待ちかねたように、おねえちゃんがビュンと手を挙げる。

「もちろんよ、マーシャさん」

「ええと、編入試験について受けられるんですか？ あと、奨学金についていつから借りられるのかと、マーシャがタクトと同じ学年に編入できるかどうか知りたいんですけど」

「編入試験の期日については、今日明日中にも確認するわ。多分、だけれど、夏休み中に受けて貰って、合格したら二学期——九月一日からの編入ということになると思う」

ひどく早口な質問の連続にも、とぐるさんは少しも慌てず答えを重ねる。

「奨学金は、編入合格をしたその日にでも申請し、お願いすれば当座のお金も借りられるはず。マーシャさんとタクトくんが同じ学年に編入するのも、可能だと思う。これも、今日中に確認しておく」

「編入試験までの間も、ここに住ませてもらうことって可能ですか？ もちろん、食事は自炊しますし、光熱費とかも払います」

「全室の鍵は預かっているから、一〇四を使ってもらってかまわない。ただし、編入試験に合格するまでは……言葉は良くないけれど、“勝手に住み着いている”って扱いになる。

できるだけ出歩かないで、編入試験の勉強だけに集中するようにして欲しい。水道光熱費については、私たちも請求されていないから安心してもらって大丈夫。食事は——」

とぐるさんが言葉を止めたその一瞬に、ビシっ！ とアルミが手をあげる。

「アタシは勉強とか手伝えないからさ。夏休み中の食事当番、全部引き受けてもいいいぜ？」

「食事当番？」

おねえちゃんと僕と。オウム返しという言葉が重なる。

「九頭劔荘の学生はさ——って、今はアタシととぐるさんだけだけど、管理人さんがいな

いときには順番に食事当番してるんだ。一食三百円の食費を徴収して、その範囲内で当番のヤツが全員分の食事を作る。月末、余ったお金でちよつとしたパーテイしたりしてな」

「夏休み期間中は昼食もまとめてるから、一日あたり九百円でやってるわ」

「なら、僕とおねえちゃんの二人で、八月一杯だと、五万五千八百円」

「そのとおりね。計算が早いのは良いことだわ」

おねえちゃんを見る。と、おねえちゃんはカバンに頭をミケと一緒につつこんで、なにやらゴソゴソやったあげくに、カバンから頭を抜いて、僕を見る。

「タクト。おねえちゃんも一緒にここにいさせてもらって、構わない？」

「そんなの、もちろんだよ！　　ってか、おねえちゃんがここをイヤなら、僕も出てくし」

「ありがとう！　　タクト」

大きな花がぼんと音を立てて咲くように、おねえちゃんが笑う。

そして真面目な顔になり、とぐるさんとアルミへと深々と小さな頭を下げる。

「その話、受けさせてもらいたいって思います。チームのことも、編入試験のことも、個々に住ませてもらうことも、お食事と食事当番のことも」

「あ、僕も同じです——お願いします！」

慌てて僕も頭を下げる、

パチン！　　指の鳴る音がして、よっしやと小さなアルミの声。

「よろしく頼むわ！　　ってか、食事当番、九月からは四交代だかな？」

「えっ？　　四交代って——僕、食事なんて作れないような気が」

「ひと月もありや覚えらあ。勉強の合間、気分転換に教えてやるから」

「あ……うん」

「話はこれでまとまったわね。改めてよろしくね？　　マーシャさん、タクトくん」

とぐるさんがスつと右手を差し出してくる。

「よっ、よろしくお願いしますっ」「よろしくお願いします」

おねえちゃん、僕の順番で握手して、とぐるさんの次はアルミとも握手する。

とぐるさんの手はあったかで、アルミの手はすごくひんやりで、温度差がある。

「おねえちゃん、ちよつといい？」

「どうしたの？　　タクトと——あ、なあに？　　おねえちゃんとも握手？」

微笑んで、おねえちゃんはキュつと僕の出した手を握ってくれる。

……おねえちゃんの手の温度は、とぐるさんとアルミの間くらいで、ちよつどいい。

「あはは、何だそりや。ってかさ、とぐる。あたしらも」

「ええ……と、そうね、よろしく。新しいチームですものね、これからみんな」

とぐるさんとアルミとも、照れくさそうに握手している。

ってか、手の体温の個人差が少し気になったただけだったんだけど——全員の握手交換で、

チームっていう雰囲気、ほんの少し、産まれ始めたような気もして。

「さて、と」

とぐるさんが小さく吹き、眼鏡のフチをクイと持ち上げ背筋を伸ばす。

「二〇四、今から開けるわね。夕食は、そうね、十九時にしましょう。それまでは自由時間で、夕食後から早速勉強を始めましょう。まずは、二人の学力を確認したいし」

「うええっ!? 今日からすぐ——に、ですよ。特待生合格しなきゃダメなんだし」
抗議っぽかったおねえちゃんの声が、尻すぼみになり同意の言葉へ見事に変わる。

……とぐるさんって、こんなに怖い眼も出来るんだ。あ、ってか——

「ん？ タクトくんも何かあるのかしら？」

「あ、いえ。勉強のことじゃないんですけど」

ちようどいい機会っぽいから、ここで聞いちやうことにする。

「さっき、アルミの服がコスプレとか何とか言ってたときに、アルミが言ってたんです」

「うわあっ!? ちょっと、タクトおまつ——っ！」

一睨み。それだけでアルミは沈黙させられる。

「アルミが何を言ったのかしら？ 続けて？」

「意味は良くわからなかったんですけど 『とぐるさんの方がよっぽどコスプレ』 『十八才以下が着るなら全然普通』 っ。それで僕、さっきの年齢の話とあわせて、とぐるさんが十九歳だと思ったんです。だけど、その服——ブレザー、でいいんですか？ を、なんで十九歳のとぐるさんが着たら “よっぽどコスプレ” なのかが疑問なまま——!!?」

「そうなの。そう。アルミがそんなことを」

とぐるさんが笑う。ゆっくりゆっくり、万年氷が溶け出すような冷たさで。

とたん、アルミは逃げ出した。

※ ※ ※

♪チャラチャララスーチャチャチャチャ (ピッ！)

「あ、もしもし？ うん、どう、届いた？ あ、わかった。じゃ、取り——え？ もう来てる？ マジで、ありがと！ じゃ、すぐ行くからっ」

携帯を切り、アルミが部屋を飛び出していく。

僕らが待ってた電話かどうか、それさえも説明しないまま。

「たぶん堅三さん——アルミのお爺様だと思うわ。機会があるたび、アルミの顔を見に来られる心配性の方だから」

「アルミちゃんのおじいちゃんなら、ひよっとして!？」

じれったそうなおねえちゃんの問いに、とぐるさんは落ち着き払った答えを返す。

「そうね。電話で『届いた』っていったし——まず間違いなく通知でしようね。それを、堅三さんがわざわざ持つてきてくださったのよ」

「ああ……結果、どうなのかなあ」

おねえちゃんが息苦しそうに身悶える。

とぐるさんの言ってる“通知”は、僕とおねえちゃんとの編入試験の結果だ。

おねえちゃんと僕との現住所が九頭劔荘だと……つまりは隠れ住んでると、まさか願書に書けないから。書類上では僕らは、アルミの実家に下宿させて貰ってることにした。

だから通知も、アルミの実家——九頭劔荘から徒歩五分——に、届いたわけだ。

「アルミちゃん、なかなか戻ってこないよ……ダメだったから、戻りづらいのかなあ」

「ありえないわね」

フン、と短く鼻を鳴らして、とぐるさんはおねえちゃんの弱気を否定する。

「この私が、特待生編入試験だけに絞って一ヶ月間、基礎学力の極めて高い二人に徹底指導した。これで落ちたら？ 試験官の採点ミスを訂正させればいいだけよ」

「でもでも、マーシヤ、本番に弱いからっ」

「それは……根拠の無い思い込みだと思うよ？ おねえちゃん」

編入試験を受けてたとき、おねえちゃんはむしろ堂々、落ち着き払ってた。

ってか、ラブホテルから逃げ出し時も、全然慌ててなかったし……

「どっちかっていうと、おねえちゃんは本番に強いタイプじゃないかな？」

「えー!!? そうかな？ でも、タクトがそういつてくれるなら」「んにゃ!」

ミケの声、ついでドタドタ、元気な足音が近づいてくる。

「きたぜ！ 二人とも分厚い封筒だっ!」

乱暴にドアを開いたアルミの手には、本当に分厚い二通の封筒。

とぐるさんが、すぐにハサミを貸してくれる。

おねえちゃんのを切ってあげてから、自分の分も丁寧に開ける。

「あ——」

合格通知書——五文字の下には、僕の名前が書かれてる。

「やった！ やった!!!!!! とくたいせ————っ!!!!!!」

どんっ! と軽く心地よい衝撃。おねえちゃんが僕に抱きついてくる。

「やったね、タクト！ これでまた一緒にいれるねっ!」

「えと、僕はっ——」「特待生合格よ、タクト君も」

とぐるさんの指が僕の封筒に入り込み、薄いピンクの紙を引き出す。

“あなたは選考の結果、特待生と認められましたので、これを通知します”

「やった——僕も、特待生だ」

「ね！？ すごいよね！ やったね、タクト！」「うん！ やったよおねえちゃん！」

おねえちゃんと握り合った手に、アルミががっしり手を重ねてくる。

「マジでよかったな二人とも！ アタシもめっちゃホっとしたよ」

「当然の結果とはいえ——おめでとう。一カ月の努力が実ったわね」

そうして、とぐるさんの手も。

喜んでもらえることがなんだかすごく嬉しくて——だから自然に、僕の頭は下がってる。

「ありがとうございます。勉強を教えてもらって、それに、九図励荘に住まわせてくれて」

「本当に！ 本当にマーシヤ達たすかりました！」

おねえちゃんも言って深々とお辞儀して。

「困ったときはお互い様だけ。ってかさ、今日からは大手を振って仲間だし。あーっと、

あれだ。とりあえず、明日明後日の食事当番は任せるしなっ」

「そうね、気にすることはないわ。最初から、相互利益のためって話だし、ね？」

「あっ——」

照れ隠しのような二人の言葉に、けれども強く、責任感が湧いてくる。

そうだ。こんなにも良くしてもらったお礼なら、僕が僕のベストを尽くして、とぐるさ

んのため、アルミのために、求められてる仕事を果たしていくことでは——返せない。

「食事当番のことか教えてね？ マーシヤ、がんばるからっ！」

おねえちゃんの声にも力がこもってる。僕もすぐさま、言葉を重ねる。

「それにもちろん、ロボコンのことも。やるべきこと、なんでも言ってください」

「ありがとう。そういつて貰えると心強いわ。けれど、一つづつを順番に行きましよう？

まずは書類。早く書いて提出した方が、いろいろとお互い安心でしょう？」

こんな時でも、とぐるさんは恐ろしいほど冷静だ。その指摘には、素直に頷く他にない。

「それじゃ、書いて、郵送してきちゃっていいですか？」

「郵送じゃなく、直接持参した方が早いわね。書き終わったら声をかけてくれる？ そう

したら、一緒に出かけて——ついでに、部屋にも案内するから」

「わかった！ じゃ、すぐ書いてくる。いこ？ タクト」「あ、うんっ」

ペこり、おねえちゃんが頭を下げて、封筒を抱き部屋を出て行く。

その後に続く僕の背を、二人の声を送ってくれる。

「んじゃ、またあとでな——」

「書類、わからないところがあったらすぐに聞いてね？」

「ふあっ！」

部屋に戻ったそのとたん、おねえちゃんが布団に寝転がる。

「やったーやったねータクトー！ えへへへ、これでまた一緒にいられるねー」

「うん。本当によかった」

しみじみ嬉しく、そう思う。編入試験に、特待生で合格できたおかげでこれから四年半、おねえちゃんと、ミケと一緒にここでくらしが出来る。

その間に、記憶を取り戻すか——それが無理でも、一人でちゃんと働けるだけの常識とかを身につけ直せれば、そこから先の生活も、きつと作って出来るだろうし。

「つていうかき、ミケもありがと。チェックしてくれたとこ、全部テストにでたよ」

頭を下げれば、ミケはピピピと、くすぐったげに耳をびくつかせる。

「んにやこと、大したこたニヤいな。ネコはカンがいつて決まってるもんニヤ」

……とぐるさんに勉強を教わり、その夜復習していると、ミケは必ず、『明日は、ココとコレを覚えてもらえニヤ』つてアドバイスをしてくれた。

大抵はとぐるさんに“ああ、重要なポイントね”とほめてもらえて。ほんのときどきは“どうしてここを？”と首を傾げられもしたけれど——結果を見れば、とぐるさんの理詰め以上に、ミケのCANはテスト問題を的中させたことになる。

「ネコのCANつてすごいんだねえ。あ！ つてかさ、なら、どんなロボットで出場すれば『RUN&Throw』で優勝できるかも、CANであててよ」

「そりやあ無理ニヤ」

ぺろり、短い舌が前足を舐め、ミケはその手で顔洗いをする。

「ネコのCANは、金庫の中にしまつてある類の問題にしか働かニヤ——ふぎやっ！？」

「ミケ！？」「あああ！？ ミケごめんっ！」

ボールペンを手に立ちあがったおねえちゃんが、うっかり尻尾をふんじやつたらしい。きゃつと悲鳴でミケは跳びはね、尻尾をふくらせ、本棚の上へ電光石火で避難する。

「つてかさつか、書類書いちゃわなとなんだ。おねえちゃんは、もう書き終わったの？」

「うん。ね、おねえちゃんの終わったの見て書いて？ そしたら、チェックにもなるし」

「あ、そうだね。じゃ、そうさせてもらう」

……特に悩むところも無しに、必要書類を記入していく。

おねえちゃんは僕の隣で、奨学金のパンフレットを一生懸命に読みこんでいる。

「奨学金つて、約束どおりに返せば無利子なんだ！ すごいね、日本は優しい国だね」

「そうなんだ。でも、返すときのことを考えたら無駄使いはできないね」

「だよねだよね。でも、最初のを借りられたら、もう少しだけは買いたいね」

……一〇四に以前住んでた先輩は、使ってた家具をそのまま残していつてくれていて。全部小さくて古いけど、冷蔵庫に炊飯器に洗濯機。本棚にタンスにホウキにチリトリ。

ヤカンにお鍋にフライパン——と、本当に一通りそろってて。

「当座の着替えと食器類とは、おかあさんのお金で買いそろえたよね。他に、何がいるの？」

「おふとん、アルミちゃんちに借りっぱなしじゃだめなもの。あとカーテンとスリッパ！」

布団は大納得。いわれてみればカーテンも、確かに日焼けてボロボロだ。けど——

「スリッパはどうして？ 家の中なのに」

「どうしても、靴下だけでお部屋の中っておちつかないの。おねえちゃんのスリッパは白。

タクトのは明るい茶色にしたらよくない？ それでね、カーテンは深いグリーン」

「あ、うん。そうだね、わかった」

話をあわせてうなずくけれど——正直なところ、靴下だけで部屋の中なのが落ち着かないって、その感覚が僕には共有できないみたいで、少しさみしい。

ユジノサハリンスクで……部屋の中でも靴を履いて暮らしてたころのことをもし思い出せたら、僕もおねえちゃんと同じに、足先をモジモジさせるんだろうか？

「おーい、タクト、マーシヤ、まだかー？」「あつ、アルミちゃんだ！」

ドアの外からの声に弾かれたようにびよこんと立って、おねえちゃんの眼が僕を見る。

手元の書類を見直して、ミスが無いことを再確認する。

「大丈夫だよ、おねえちゃん。ちゃんと書けた」

「なら、いこっか！」

とぐるさんとアルミに連れられ、長い坂道を登っていく。

アスファルトに焦がしつけられそうな日差しをけれど、道路わきの木々が遮ってくれる。

蝉の声、遠くから響くチリン——ガラスの鈴のような音。なかなか、気持ちの良い道だ。

「ニヤウウ」

塀の上、ミケは気ままに寄り道しながら、はぐれかけては追いかけてくる。

「なあ……あのさ、ミケに、首輪とかさせねえのか？」

その様子を、どこか不安げに見守りながら、アルミがおねえちゃんに問いかける。

「首輪？ うーんと、しないっていうか、したことないだけ」

「したことじゃなく、させたことだろ。けどよ、ロシアだったらそれでよかったかもしれ

ねえけど——日本だと、ちょっとアブねえかもしれないぜ？」

「んぐぐ」

「“保護”、されちゃう危険があるわね。飼い猫でも、首輪をしてないと」

とぐるさんの静かな言葉に、何故か背筋がゾットする。

“保護” っていうのされちゃうと……ミケがひどいめにあわされそう。

「だからさっ！ もしミケがいやがんなかったら——首輪、プレゼントしてもいいかな？」

「プレゼントっ？」

またおねえちゃんと声が重なり、ふたりで目と目を見かわせる。

「ミケに？」「アルミちゃんが？」

「アタシ、動物があぶなつかしいのヤなんだよ。だからさ、迷子よけのお守りになるやつ。それに、こないだ偶然さ、ホームセンターでミケに似合いそうな首輪みつけたんだよ」
ネジや油や工具を買うのに、アルミがホームセンターに入り浸ってるのは知ってたけれど……ネコの首輪も売ってるだなんて知らなかった。

「首輪だって、ミケ。どうする？ 似合うので、お守りなんだよ？」

おねえちゃんの声がわくわくしてる。もう欲しくって、つけさせたくて仕方ないんだ。
「うにゃおん」

良くも悪くも迷惑そうにも聞こえるような、どうにもハンパなミケの鳴き声。

「ありがとうって、ミケいつてる！ アルミちゃん、わたしからもありがとう」

そうだったのかと僕もあわててお辞儀をすれば、アルミは照れて激しく手を振る。

「いやいや、ホント、ただのきまぐれだからさ、気にしねえでくれ」

言って、アルミは坂を一気に駆け上る！

「見えるか？ あれがアタシらの母校。可二高専だ」

「ふたりとも編入試験のとき見てるでしょ？ おおげさよ、アルミは」

とぐるさんが、ねえ、と僕らに視線を送る。けど——

「確かに見ました。僕もお姉ちゃんも。でも、見たのは見てるんですけど……」

「だよ。試験のときは、緊張しちゃってそれどころじゃなかったから」

坂の上、見え始めたなら一歩ごと、可二高専はその姿を現していく。

大きな石づくりの、古びているけど、見るからに堅牢そうな校舎。

その傍らには、コンクリート製の真新しい建物が、たくさん窓を並べてる。

「石の方が本校舎。コンクリの方が新校舎——アタシらは、“工場”って呼んでる。基本的には、教科書つかってやる勉強を本校舎で。実習だのなんだのを工場でやる感じかな」

「実習——」

嬉しげに、ひよこつとおねえちゃんの腫があがる。

「実習って、ロボットを作ったりする？」

そのままコトリと傾いだ首に、とぐるさんは困ったような笑みで答える。

「機械工学科だから、いずれはそれもやるけれど——一年に編入したふたりには、まだ少し先のことになるわ」

「一年のときの工場は、旋盤、せん断機、電動カッターの使い方とか、その辺からだわ」とたん、おねえちゃんがしぼんでしまう。

「なんだあ……ロボットの勉強は先なんだ」

「あ、いや、ならよ、とぐるさん」「そうね、アルミ」

二人が素早く視線を交わす。

「作りたいなら、部活の方でやっていけばどうかしら。競技機はさすがに、アルミ一人に組んでもらうことになるけど——最初はキットモデルからとか」

「マーシャもつくっていいの？ 部活でロボット！」

「いいぜー。超いいぜー。技師は多いにこしたこたあないし」

「わーい！ マーシャがんばるね！」

びよんびよん跳ねて喜んでいる。つてかおねえちゃん、そんなにロボット作りたいんだ。……おかあさんの血、とかなんだろうか？

「あ、でも——タクトくんには、出来れば操縦に専念をして欲しいのだけれど……どう？」
慎重そうなどぐるさんの問いかけに、何の抵抗もなく頷ける。

僕——少なくとも今の僕の中には、ロボットを作りたいって気持ちは、流れていない。

「つと、本校舎だ。靴ぬいでな？ ああ！ ミケは入っちゃダメだぜ？」

「んにゃあ？」

アルミに行く手を遮られ、ミケは素早く身を翻し、木の枝の上に登って座り込む。

「マジで頭いいなミケ。ご主人さまたちが戻るまで、そこでおとなしくしてろよ？」

「二人は入って？ そのスリッパを使うといいわ」

指示のとおりには靴を脱ぎスリッパを履く。おねえちゃんは落ちつかかなげな表情だ。

「その奥が事務室よ。書類、あそこに提出すればいいはずだから」

「わかった！ タクト、いこっ？」

「うん。じゃ、ちよつと行ってきます」

入口で待つ二人を置いて、事務のお姉さんに書類を提出する。

中身を確認してもらい、なにほどもなくOKをもらい、引き返す。

「どうだった？」

「オッケーだって！ 奨学金はね、こないだ、とぐるちゃんに教えて貰って作ったでしょう？ 作り方。銀行の口座！ あそこに振り込んでくれるんだって」

「そう。ならよかった、一安心ね」

とぐるさんとおねえちゃんとは、うふふと頬笑みあっている。

つてか……ひよつとしたならおかあさんって、とぐるさんみたいな人だったのかも。

おねえちゃん、とぐるさんという、すぐく甘えてる感じにみえる。

「んじや、部室行くか。タクトにも意見聞きたいしな」「っ！」

アルミの声に、とぐるさんの表情が引き締まる。

「そうね。行きましょう」

さっきまでとは打って変わった早足で本校舎を出て、コンクリづくりの新校舎——工場の中へと入っていく。

靴箱に靴をしまつて、また来客用のスリッパを借り——上履きっていう室内靴を買わなきゃダメだと教えてもらう。……お金つて、本当に何をやるにも必要なんだ。

「あ……グリスの匂い。アパートのと同じヤツ」

言つてばたばた、おねえちゃんが走りだし——一番奥のドアの正面でピタリと止まる。

「ここ？ 部室つて」

「うおっ!? すげえなマーシヤ! 匂いでかよっ!」

目を丸くしてるアルミの横を、とぐるさんがスツと通りぬけ、おねえちゃんと並ぶ。

横開きのドアを一息に開き切り、そうして、僕らへと振り返る。

「ようこそ、マーシヤさん、タクトくん。可二高専・人型機械工作部へ」

「ふわあ!」

ドアの向こうを見た瞬間、おねえちゃんが小さく叫んで動きを止める。

スマイレ色の目をキラキラと、期待に満ちたして輝かせながら。

「あの、中に入つてもいいですか?」

「ええ、もちろんよ?」「失礼しますっ!」

尋ねた瞬間、予想通りにお姉ちゃんが部室内へと駆けこんでいく!

「すごい! ロボットがたくさんだあ!」

たくさん——というか、人っぽいヤツなら五体。部室の壁際に並べられてる。

完全な人型のもの、頭を持たず、手足と胴体だけのもの、平べったい円筒型のボディから手足が付き出してるだけのもの、腰から下だけに見えるもの、やけに小ぢんまりとしたサイズのもの……かなり、バリエーションに富んだ外見だ。

「あ! これ、アパートにあるの、おっきいのだ! 実物大?」

「まさか! 実物大ならコースは十メートル長になっちゃうんだぜ? この部室にや入りきらねえよ。障害物の方は、そこに実物大作つてあるけどな」

アルミが指さす部屋の隅には、梯子のついた段差と、平均台と、急な角度の傾斜とが、綺麗に並べられている。つか——確か平均台と坂の長さは、各三メートルだから……。

「なら、この模型のスケールは……三分の一?」

「相変わらずいい眼ね、タクトくん」

とぐるさんの簡潔な褒め言葉が、僕の目測が正しかったと教えてくれる。

「二——一もコース模型も体育館にあるのだけど、それはウチの部だけで占有できない。だから、このサイズのコース模型と——障害物だけは実物大で、自前で用意しているの」

「素材は全部、レギュレーションシートに記載されてるものばっかり作つてあるかな。試験・調整用なんかにはこれで、それなり以上に役にたつだろうと思うぜ?」

「そうだね——うん、この大きさの方が、アパートのよりずっと感覚掴みやすい」

つていうか、そこまで徹底してやるんだと、今さらながらに驚かされる。

アパートに一／一〇、部室に一／三、体育館に一／一のコース模型。

障害物は部室のだって実物大だし……整列してるロボットたちも、つてことは多分、コースの試走や試験するためのものなのだろう。

「すごいね……お金、ものすごくかかってない？ ふたりって、お金持ちなの？」

おねえちゃんの生活感にあふれる疑問に、アルミはイヤイヤと手を横に振る。

「ロボコンってイベントは、高専の……学校側からみたらさ、入学希望者がたっぷり確保するための、最高の宣伝場所だから。部費は、相当厚めに出してもらえんのか」

「体育館のコースは、学校が設置したものだしね。そういう仕組みになっているのよ」

「ふうん」

納得したような、納得してないような返事をし——おねえちゃんの目がキョロつと動く。

「あ！ この手きれい！ 作りかけなの？」

駆け寄っていった先には、床の上から生えてるような、機械仕掛けの手と腕がある。

「作りかけたら作りかけだし、完成形ったら完成形。こいつあ、精密マニピュレーターの試験用マニピュレータだかんぞ」

「精密マニピュレーター？ の、試験用？」

「定量的運動制御での公式化は、範囲を限定することでしか為し得ないから」

とぐるさんの流れるような言葉はけれど、おねえちゃんのところまで引つかかる。

「範囲を限定する……って、何の？」

それなら何だかわかる気がして、おねえちゃんの隣へと寄る。

「ええと、例えばば——手を使って、握手をするでしょう？」

「あ、うん。はい、タクト」

おねえちゃんが手を差し伸べてくれるから、素直に受け取り握手する。

「僕はさ、おねえちゃんの手がやわらかくって小さいって判断できるから——おねえちゃんの手が痛くならないようにって調節して、ふんわり握手できるじゃない」

「うん」

「で、僕と同じように、例えば“人と握手する”って範囲に限定すれば、同じように、相手の手の大きさを判断して、ちゃんと握手して、なおかつ相手の手を傷めないって公式を作って、それをロボットに行わせることは可能なんじゃないかって思うんだ」

チラっと見れば、とぐるさんは強く頷き、アルミは親指を立ててくれている。

よかった。ここまでは、僕の理解は正しいみたいだ。

「けど——例えば」

握手をほどこき、おねえちゃんの頭をそうつと撫ぜる。

一瞬、おどろいてしまった顔が、けれどもすぐさま、心地よさげな笑顔に変わる。

「こうやってさ、握手をした手で、相手がきつと気持ちいいって感じてくれる強さと速度

で頭を撫でるって……そこまでを組み合わせて公式化しようとしたら……それって、出来たとしても、むっちゃくつちゃ複雑な式になっちゃうような気がしない？」

「あ……なるほど、そっか。そうなんだ。範囲を限定するってそういうことか！くるり、スマイレ色の目がとぐるさんへと向けられる。」

「えっと——なら、この、“試験用マニピュレータ”ってのも、ロボコンの……『RUN & Throw』で使うためのロボットの手の、実用？」

「ええ、そうね。どこまでに公式を使い——つまり自動化し——どこからを操縦によって制御するのか、その最適を判断するため、使っているの」

ふうんと呟き、おねえちゃんは今度はアルミへと向き直る。

「その、マーマの運動制御のデータベースに、“ボールをつかむ”の公式はあるの？」

「あるぜー。ゴムボールの大きさ、重さ、反発係数やなんかをハメりゃ、ちゃんとかませてくれるのが。でもって。投げるの方もバッチりある。バッティングセンターのアームロボが、ものすげえデータ量を蓄積してくれてるかんや」

「じゃあふたりは、その公式を両方つかって、で、狙うのをタクトにさせよ——って風に考えてるの？」

「選択肢のひとつとしては、というレベルではね」

「ってゆーと？」

おねえちゃんが傾げた小首に、アルミは肩をすくめて見せる。

「レギュレーションで許可されてる“投擲”は、“ボールがハンドに保持された状態から、ハンドおよびアームの働きのともなって投げる”って行為だ」

「うん」

「けど、ハンドとアームとは、走つてのゴールも目指す、つまり“障害物群を越えてタッチダウンする”ためにも使わなくちゃいけねえ。つまり、ボールを持つ他にも、ハシゴを登る補助、平均台移動時のバランス補助、三三三%勾配の坂を下るときの補助——にも、それぞれきちんと機能した方がいい。障害を越えるとき、ハンド・アーム・脚以外の部分が障害にふれちまうと、コースアウト扱いになっちゃうからな」

「加えて言うなら、相手が投擲してきたボールを——ま、キャッチは無理な芸当だとは思うけど——防御するための盾としても、ハンドとアームは機能した方がベターだわ」

「ロボット形状は二手二足、の制作予算は二十万円以内、総重量は二十kg以下、使用できる電源は各自が用意で二十四ボルト以下、あとは——」

「ハンドを含むアーム、および脚は、最長に伸ばした状態で五十センチメートル以内、アーム・ハンド・脚を含まないロボット基幹部——いわゆるボディ部分の最低容積は、その高さ、幅、奥行き之最長部で測った値で五万立方センチメートルを下回ってはならない。ハンド、および脚の接地部には五本までの指を持たせて良い。が、指、およびセンサー類

を除く、キャッチや移動の補助になる物理機構——つまり、トリモチやらスパイクやらなんやらのことね？——は、一切これを設けてはならない」

交互に言葉を重ね合い、とぐるさんとアルミとは、目を見合わせて、うん、とうなずく。

「このレギュレーションの中で、私たちは、私たちのチームが最も上手く扱えるロボットを組まなくちゃいけない。つまり、選択肢は有限だけど、いくつも作り出し得るの」

「ええっと」

いつもの“ええっと”とは違い、途方にくれた感じではなく——じいっと考えこむように、数秒間だけ瞳を閉じて、おねえちゃんはゆっくりとした言葉を紡ぐ。

「レギュレーションの中で、一番キツイ制限って、どれ？」

「それは——ロボットに何をさせたいかによってくる。だから、私たちとしては……」
とぐるさんの視線を受けて、アルミがニヤリ、僕を見る。

「まずはさ、タクトの操縦適正を精査するところから始めてみようと思ってるんだ。タクトが一番向いてる部分を生かせる戦略をたて、その戦略を実現できるロボットを設計して組み立てる——って順番だな。とぐるさんに設計させりゃ大抵のコンセプトは実現できちゃうし、アタシはとぐるさんの設計なら楽しく組めるしな——」

「ふうん」

「ってことでさ！ タクト」

笑顔のままに、アルミがグイッと近寄ってくる。

「試験用のロボット群、ひととおり操縦してみてくんねえかな？」

「やってもらいたい操作はこちらで指示するわ。タクトくんには、ただ集中してその操作だけをしてもらえばいい」

「了解です。それは全く問題ありません」

いって、おねえちゃんへと目を走らせる。

さっきの『ふうん』は、なんとなく納得していないように聞こえて、気になって——

「がんばってね、タクト！ おねーちゃん、応援してるから！」「んにゃあ」

「ミケー……」

いつの間に部屋にまぎれこんでたミケに、視線が集まる。

ってか、おねえちゃん、別に不満とかなさそうだ。……僕の気にしすぎだったのかな？

「タクト、ミケも、『しっかりやれよ』って！」

「うん」「よっしゃー！ キアイいれて頼むぜっ！」

アルミの手からコントローラーが渡される。どうやら最初は例の試験用マニピュレータを操作させられるみたいだ。

「それじゃあタクト君、まずは手を握る動作からはじめましょう。コントローラーの右スティックをゆっくり前に倒していって？」

……集中しようと意識する。感情を殺し、雑念を消し、自分が機械になったつもりで、言われたことを、ただ正確に淡々と、何も考えずこなしてく。

「アルミ、次」

「おう、タクト。んじゃ、こんだこっちの走行試験機」

「了解」

コントローラーの動きと、ロボットとの動き。完全にシンクロしきらぬズレを、けれども今は補正しない。試験だから、実験だから——言われたとおりに操作する。

「次——あ、休憩する？」「不要です。続けてください」

——そうしているからこそ、解る。

自分のどこを、今試験されているのが。

試験機と呼ばれる機能を絞られたロボットたちの、設計思想と工作精度の高度さが。

そして『RUN&Throw』という競技の難易度が、どれほどに高いものであるかが。

「ラスト。マニピュレーターに戻って、投擲試験」「了解」

……出来る限りに正確に狙い、設計通りに工作されたアームとハンドとは、僕の操作に忠実に答え——それでも、投擲にはズレが生じる。

一球、二球、もう一球。

全く同じポジションから、同じ投擲を指示しても——壁に貼られた的に貼りつく塗料の後は、一致はおろか、ミリ単位を越え——五センチほどもバラついてしまう。

「……………OK。予定全試験終了よ。お疲れ様」

「がんばったね、タクト！ かっこよかった！ おねえちゃん見ててドキドキしちゃった」

「え？ あ……………ああ、うん。ありがとう、おねえちゃん」

おねえちゃんの柔らかな手に触れられて、集中していた視界がパッとほじけ広がる。

雑音と色彩が五感の中に戻ってきたような感覚に、本当に深く集中できてたと知る。

「お疲れ、タクト。しかし実際、すげえもんだな——想像以上だったぜ」

まだ熱いだろうマニピュレーターの各関節をチェックしながら、こちらを見もせず、アルミは僕をほめてくれる。

「すごすぎてさ——自分の甘さがわかつちまった」

「いいえアルミ。甘いのは、恐らく私の設計よ」

黒ぶち眼鏡を右手で支えるようにして、とぐるさんがホウッと長い一息を吐く。

「特に投擲……………あれほどに精度が出ないとは、夢にも思っていなかった」

とぐるさんの左手には、プリントアウトされたとおぼしき紙束がある。

その紙束が一枚一枚、睨みつけるようなまなざしの下、めくられていく。

「タクト君の操作には、計測可能な誤差は一切ないっていうのに——」

その一言に、そうか、と気付く。

コントローラーの操作データは——今考えれば当然だけど——とぐるさんの側でもモニターされていたんだ、と。

「——私の認識が甘かったのよ。この精度じゃ、とても公式には頼れない」

「けど、投擲に使った制御演算って、バッティングセンターのアームのヤツだろ？」

「そう、最新鋭の、五本指アームのもの。ただ、バッティングセンターではゴムボールが投げられているわけじゃないから……ボールの違いによる差異が、私の計算より甘かった」

「バッティングセンターで投げてるのって、野球の硬球なの??」

おねえちゃんの質問に、アルミがきよとんと目を丸くする。

「いや、普通は軟球だけどき——ってか、ロシアでも盛んだったりするわけ？ 野球」

「ううん。ユジノサハリンスクは、日本の衛星放送映るもん」

答えてブンっ！ と、おねえちゃんはバットをスイングするポーズ。

「マーマ、日本時代にヤクルトのファンになったんだよ？ だから、ヤクルト戦がたまーに中継されてるときは、マーマと一緒に見てたから」

「そうなの。ソーニャ博士は、野球がお好きだったのね」

とぐるさんの、さも意外そうな呟きに、おねえちゃんほうん、とうなずき言葉をつなぐ。

「だからね、マーシャも知ってるの。あのね、野球のピッチングって、めっちゃくつちゃに高度な運動なんだって。指先がボールに与える回転は、ボール自体の個体差とか傷とかそういうのにさえ影響されて、どうしてもブレちゃうんだって、マーマ言ってた」

「あー……だよな。言われてみりゃ、カーブとかフォークとか、ああいうハッキリした変化だって、回転と空気抵抗だけで産まれてんだしなあ」

「それにね？ 全部おんなじボールがきたら、練習にならなくない？ バッティングの」

「あゝ」

……ふたり、野球に全然興味がないんだろう。盲点をつかれ、絶句してるみたいだ。

「あと、あのアームは、安定度の高い床の上に、右腕だけがあるわけだけど——」っ！
言われた瞬間、とぐるさんが神経質そうに眼鏡の位置を修正する。

「二手二足ロボットに行わせる場合には投擲動作が遥かに複雑になることはもちろん当初から想定していたわ。だから、野球のピッチング、つまり全身連動運動をさせるのではなく——両足をヒザまで設置させて安定を取った上で、この試験機と同じ、独立スイングアーム形式での投擲を想定していたのだけど……」

ふっと、吐かれた息にはハッキリとした諦めの色。

「この精度じゃ、遠投はとも無理ね。最後の直線で並走になったときの投げ合いでならなんとか……っていうレベルまでにしか、持っていけない」

「っていうか、そんなにすぐなの？ ロボコンって」

「アタシらの出る関東甲信越大会は十二月十日。明けて正月一日に国技館で全国大会だ」

「えっ!?! 今日が八月一日だから……ええと、あと四カ月ないんだ!?!」

「つてかさ、そのための試作機群だぜ? ダメな選択肢を消してくことも、前進だしな」

「あー」

こっくりゆっくり、おねえちゃんが大きくなる。

気をとりなおそうとするように、とぐるさんはキリリと豊かな胸を張る。

「投擲をメインとする設計は、断念しましょう」

「なら——走行型ってことになるか」

「走行型?」「ああよ」

オウム返しのおねえちゃんの声に、アルミは即座の答えを返す。

『RUN&Throw』で勝ちに来るロボットは、大雑把にいや三タイプになるんじゃないかねかと、とぐるとアタシは睨んでるのさ」

「投擲型は、三発命中、ないしは、命中によるペナルティストップを積極的に狙い、試合序盤から投擲を試みるタイプ。走行型は、投擲を捨て、走行・踏破性能を高め、タッチダウンでの勝利をひたすらに目指すタイプ。この場合、重要なポイントは、最後の直線での並走に持ち込まれないことになるわね。長距離の不正確な投擲であれば、投げられたあとで十分に回避可能と想定できるから」

「ふむふむ。それじゃあ、三つ目は?」

「防御型。つまり手、足の表面積を大きくし、そこで投擲を防ぐことを想定するタイプ」

「レギュレーションで有効な投擲とされているのは、ロボットのハンド・アーム・脚部以外の部分への命中だ。つてこた、手足で防げりゃ、正確な投擲も無効化できる」

「あ、そっか。そうだねえ」

「けれど、余分な質量はむしろロボットの動作自体を妨げる。防御の度合いを強めれば強めるほどに、スピードも、障害物の踏破性能も、投擲能力も落ちるでしょうね」

「なるほどなるほど」

「と、いうことなのだけれど。タクト君」

とぐるさんの眼が、まっすぐ僕へと向けられる。

「タクト君の操縦精度は、投擲以外の部分においても理想的——いえ、それ以上のものがあると断言できるわ。その能力を、走行型の機体で活かしてもらえるかしら?」

命令じゃなく、質問だから——思ったことを、僕はそのまま口にする。

「競技の参加目標は——“勝利” つてことで、いいんでしょうか?」

「もちろんだぜ! アタシらは、勝つためにロボコンに出る。最低最悪でも、ロボコン部よりは上にいけなきゃ、話にならねえ」

アルミの激しい剣幕に、おねえちゃんが半歩下がって恐る恐ると口にする。

「ええと……その……ロボコン部、つて?」

「可二高専ロボコン部。……私とアルミとが、かつて所属していたクラブよ」

「その名のおり、ロボコン部はロボコン参加を目的としたクラブなんだ。けど——なんてえのか、姿勢が甘くてよ。参加することに意義があるってか……慣れ合いつてか」

珍しく、アルミが表情を曇らせる。いまいましそうに、その口調までが重くなる。

「特に、とぐるさんなんか美人だからさ。お姫様扱いつてか——誰も、とぐるさんの本気を理解しようとしねえでさ」「アルミ」

とぐるさんの声は、優しくて。

「まあ、ロボコン部では色々あったのよ。で、私とアルミはロボコン部を割って出て、人型機械工作部を立ち上げたのだけれど……今は、ご覧の通りのありさまね」

「ついて来た連中も、結局とぐるさん目当てだったんだよ。本気でロボットを作つて、技術の限界に挑んで、それを乗り越えて——。そんな楽しさよりも、カレシカノジョでラブラブいちゃいちゃみてえな、甘ったるいコトがやりてえヤツらばかりだった」

「アルミ目当ての人の方が多かつたんじゃないかしら？」

とぐるさんの静かな声は、否定のようで、アルミの言葉を肯定してる。

「あ！ だからとぐるちゃんもアルミちゃんも、いつも女の子な服装てるんだ」

突如、おねえちゃんがすつとんきようなことを言い出す。

「いんにゃ、いったる？ アタシのはタダの作業着だ」

驚いたようなアルミの声にくすりと笑い、とぐるさんは嬉しげな目でお姉ちゃんを見る。

「マーシャさんにも、そういう経験が？」

「んつとね……違うかもだし、似てるかもなの。マーシャは、勝ちたいとかじゃなく……ただマーシャがマーシャなんだつて、認めてもらいたかっただけだから」

「そう。そうね——私は、“認めさせたい”だけ」

うふふと、おねえちゃんにとぐるさんとが、楽しげに、少し寂しげに頬笑みあつて。

その意味が僕にはサツパリわからなくて……ふと、見ればアルミもなんか難しいような顔をしていて、仲間はずれの仲間をみつめて、ホっとして。

「まあ、だからさ」

アルミも多分おんなじ気持ちで、僕に向かって肩をすくめる。

「男なんて二度と仲間にするもんか、つて思ってたんだけどよ。タクトは、なんか全然違つたからな。下心が無いってゆーかさ……ねえちゃんて頭がいつぱいつていうか」

「ええええっ！？」

おねえちゃんが、ポンつと音が聞こえてきそうな凄い勢いで真っ赤になる。

酸欠の魚みために口をばくばくさせちゃつてもいて——なんだかフオーが必要そうだ。「僕は、おねえちゃんとミケと一緒にいることがとても幸せだから。だから一緒にいるために、そういう暮らしを守らためなら、なんでもするし、なんでもしたいし、しなくちゃい

けないって思うし。ふたりと初めて会ったころは、本当にそれだけで頭がいっぱいだったんだ。だから、アルミのいつてることは正しいよ」

うへっ、とアルミがへんな声を出す。ニヤリと笑い、おねえちゃんへと視線を向ける。

「だってさマーシヤ。あたしもこんな弟欲しかったよ」

「で、でしょっ！ タクトはマーシヤの自慢だもんっ」

開き直りでもしたかのように、けれど真つ赤な顔のまま、おねえちゃんはVサインまで掲げてみせる。

「タクト君、今は？」

くすくす小さく笑いをこぼし、とぐるさんが僕に問いかけてくる。

「え？ 今はって……何がですか？」

「『ふたりと初めて会ったころには、それで頭が一杯だった』——今は、変わった？」

「あ……そうですね。そういう言葉が出てきた以上、変化はあったんでしょうね」

よく考えずに出した言葉を改めて精査しなおせば、自分の心の変化を細かく分析できる。

「……基本的な部分は、変わってません。おねえちゃんとミケとの暮らしが最優先で、何より大事です。その上で、とぐるさんとアルミとこうしてロボットに触れてる時間に、とても大きな充実を感じ始めています。恩返しっていう義務感だけじゃなく。自分の希望としても、ロボコンに——『RUN&Throw』に——参加して、勝ちたいな、って」

「あ……えーっと、その、なんだ」

なんでだか、今度はアルミが照れくさそうに視線をそらす。

「ありがとう。そういつてもらえて嬉しいわ。すごく素直なね、タクト君は」

とぐるさんの頬までが、ほんのり薄く赤らんでいる。

なんか僕、恥ずかしいことを言ってしまったんだろうか？

「で」

コホンと。切り替えを宣言するように、とぐるさんが大きな咳払いを響かせる。

「“勝つ”のために——改めてどうかしら？ 走行型という選択は」

「それでも、勝てるかもしれません。けど、勝ちやすい選択ではないと判断します」

「「っ！」」

言った瞬間、三人ともが息を呑む。

とぐるさんは不愉快そうに、アルミはビックリしたように、そしておねえちゃんは——緊張した、どっか不安げな面持ちで。

「ふみやう」

棚の上、ミケがあくびして寝返りをうつ。

コホン、とまた一つ咳払いして、とぐるさんは眼鏡のフチを持ち上げる。

「何故？ 走行型が勝ちやすすくないと判断するのかしら？」

「ライバルたちと、同じ土俵での勝負になるだろうと想定できるからです。

……走行型、防御型、投擲型の三タイプって、石、紙、ハサミですよね？」

「へっ？ 石紙ハサミって？」「あ、これ。ええと、日本語の——あ、じゃんけんっ！」
握って石、開いて紙、指を二本でハサミと順に、おねえちゃんの手が作って見せる。

「ああ、そのままか。ってか、そか！ 確かにそういうダイアグラムになりそうだな」

「走行型は、投擲が不得手で速度も遅い防御型に対して有利。

防御型は、しかし投擲型よりは速度に優れ、しかも当然、投擲に対して強みを持つ。

投擲型は、回避だよりの走行型に対してはアドバンテージを保てる。

……タクト君の分析は、つまり、こういう想定かしら？」

「はい、そうです。ロボットの構造とか、予算とか指定重量とかの制限がある以上——伸ばした他は切り捨てるって制作をしかできないなら、そういう傾向になるんじゃないかって、僕は推測しました」

「——その推測は、妥当なもの認めらるわ」

とぐるさんの声は、感情を殺したような静かさだ。シン……と部室が静寂に満ちる。

「……………どうしたのかしら？ 続けて？」

「あ、はい」

おねえちゃんの不安げな顔の意味がわかった気がしたけれど——勝つためならば、例え不愉快がられても、言うべきことを言わなきゃいけない。

「とぐるさんとアルミのコンビでも、投擲型を作るのが難しいっていう答えが導かれるのなら、投擲型はもちろん、防御型を選択するチームも激減するでしょう。当然の結果として、走行型が主体の競技となれば、これは全員が同じ土俵の勝負です。負けづらくはありますが、同じ強さで、勝ちにくくもある——そういうことになると、僕は思うんです」

「いんにゃ……とすると、純粋な走行型はむしろ不利だぜ」「!!？」

思わぬアルミの言葉に思わずとぐるさんを見——

「そうね。“限定的でも有効な投擲を行える”——いわば、ハチの一刺し型の機体がアドバンテージを得ることになりそうね。ペナルティストップを取ることで、タッチダウン、もしくは先行勝利を確定させる」

「なるほど」

ふたりの言葉に、素直にうなづく。ってか、とぐるさんもアルミも本当に頭がいい。もらったヒントは、僕の確信を強めてくれる。

「そうであるならなおのこと——僕は、徹底した投擲特化型。いうならば、“狙撃型”が、一番勝ちやすい選択であるのではないかと、考えます」

「狙撃型！？ 徹底した投擲特化って、おまっ」

「そうね。理屈の上ではその通りだわ。ハチの一刺し型が、走行・投擲の両取りを目指す

以上、回避・防御とともに犠牲にすることになる。『正確な遠距離投擲さえ可能であれば』——狙撃型は、まさに猛威を奮うでしょうね」

言って、伏せぎみにされてた顔が持ち上がる。とぐるさんの眼鏡がキラリ、光を放つ。

「けれど、逆に言えば——『正確な遠距離投擲が出来る機体』を組めない限り、その構想は、机上の空論にすぎない」

まっすぐ、とぐるさんを見つめ返す。

「はい。そうだとも思います。ですから、とぐるさんに確認をしたいんです。本当に——

『正確な遠距離投擲が出来る機体』は……組めないんですか？」

一瞬、面喰ったような顔をして——けれどもすぐに表情を引き締め、とぐるさんは、アルミの方へと顔を向ける。

「アルミ。試験投擲機の振動をより減らすことは可能かしら」

「現設計をベースにすんなら……改良の余地は、ほとんどんねえような気がするな」

「質問っ！」

はい、とお姉ちゃんが手をあげる。とぐるさんは、無言のままにひとつ頷く。

「ええとき、安定しないのって、“大きく手を振って投げる”って方法を選ぶからでしょ？なら、手を振らないで投げるって方法は取れないの？」

「残念ながら、レギュレーションはこう規定しているわ」

とぐるさんの手がデスクに伸びる。

クリップバインダーにとじられた書類が、一枚一枚とめくられる。

「ああ、ここね——“投擲は、必ず『ボールがハンドに保持された状態から、ハンドお

よびアームの働きをともなって』なされなければならない”つまり——っ……？」

声を呑みこみ、とぐるさんの目が驚いたようにアルミを見つめる。

アルミはすぐさますつとんで来て、とぐるさんの手からバインダーを受け取る。

「……………ハンドで保持された状態のボールを、アームの働きをともなって——それが成立してりゃあ、投擲って書いてあるぜ、とぐるさん。ってこた、働きは、スイングじゃなくともかまわねえってことになる……よな？」

とぐるさんが、すぐさまスマートフォンを取り出す。

「もしもし、すみません。私、可二高専人型機械工作部部長の開閉器とぐると申す者です。

高専ロボコン競技、『RUN&Throw』のレギュレーションについてお伺いを……」

……数分間の会話の後に、とぐるさんは通話を切って僕らの方へと向き直る。

「書いてあるままの解釈でいいそうよ。つまり『アームの働きについての制限はない』ってことになる。無論、他のレギュレーションに違反しない限り、だけれど」

んんっ、と気まずそうに咳払いして、とぐるさんは僕らに向けて頭を下げる。

「ごめんなさい。こんな基本的な確認を怠って選択肢を狭めてしまって。そして、ありが

とう。私の見落としを指摘してくれて」

「いや——そんな」「そんなのあたりまえでしょ？ チームなんだから」

あっさりきっぱり、おねえちゃんが言い切る。

ふっ——っと笑みのような息を漏らして、下げられていた頭があがる。

「そうだったわね。チームだなんて……長いこと組んでなかったから」

「つてええ！？ とぐるさん！？ アタシ、アタシっ！」

「コンビでしょ？ アルミ、私とあなたは」

「あっ——そか、うん、そっすね。ええへへ」

アルミを激しく照れさせて、とぐるさんは、ふたたび少し——さっきよりは浅い角度で、僕らに向けて頭を下げる。

「では、新しいチームメイトに対してお詫びをするわ。私は、貴方がたをロボットの素人だと考えて——ソーニヤ博士のご子弟であることをあまりにも軽視して——チームメイトではなく、コマのように考えてしまっていた。その不明と失礼とを、謝罪します」

「もー、とぐるちゃんは固いなあ。そんなの、全然気にならなかったよね？ タクト」

「つていうか……とぐるさんは僕らを、コマのようになって扱ってませんでしたよ」

確信してる。だから迷わず言葉に出来る。

「だって、命令じゃなく、いつも質問をしてくれましたから。僕は、命令されたら素直に従っていただけ——それが質問だったから、自分の意見や、疑問点を思ったままに言葉に出すことができたんです」「あっ——」

「はい！ はい！ ソーニヤ博士のご子息、つてので思い出したんだけど」

再び、おねえちゃんの元気いっぱいの挙手。

ふっと柔らかに息を吐き、とぐるさんはおねえちゃんへと視線を向ける。

「なにを思い出したの？ マーシャさん」

「うん、あのね？ マーマ、いつてたの。『ロボットのお仕事には二つある』つて」

「二つ？ つて、ナニとナニだよ」

「うん。一つは、『人間に出来る動作を、より正確に、疲れることなく代行するつていうお仕事』で、もう一つは、『人間には出来ない動作を行うつていうお仕事』だつて」

「……そうね、そう。その通りだわ」

ふっと、とぐるさんが僕らに背を向ける。

そのまま製図台の前に座つて、カリカリと音を立てながら、何かを……なんだろう？

——ああ、鉛筆の芯をカッターナイフで削ってるんだ。

「あの……えと、とぐるちゃん？」「しーっ」

人差し指を唇にあて、アルミが楽しげにそっと囁く。

「とぐるさん、スイッチ入った。あとは質問に答えていきやあ、いい設計案が出てくらあ」

「質問に答える？　って??」 「物を遠くに飛ばす機構」「わひっ!!？」

ボソリ、いきなりのとぐるさんの声。途端、アルミは矢継ぎ早の言葉を繰り出し始める。

「ロケット！　に、飛行機、鉄砲、大砲……花火……それからええっと——」

「ああ、そういう」

おねえちゃんはポン、と理解の手を打ち鳴らし、そのまま質問に答え始める。

「空気銃でしょ、輪ゴム鉄砲、水鉄砲。ガスガンに……、磁力の……ええと」

「リニアレールガン？」 「そうそれ！」

なんか、おねえちゃん鉄砲しぼりで始めたみたいだ。

っていうか僕も……ああ、それだったら、人力系で行ってみよう。

「弓矢、ボウガン、スリング、砲丸投げに、やり投げ——投石機、あとは……」

「あとさ、プロ野球の選手が使うバッティングマシンの仕組みもあるよね？　こう、ふ

たつまわるのがあってあ、その間からボールがピュ！　って飛び出すの」

「あー、ホイールってかローターが回転して射出する感じか？」

「あとは……ええっと」「ひとまずいいわ」「っーっー」

またいきなりのとぐるさんの声。すぐさまアルミが人差し指でしーっとサイン。

……先の尖った鉛筆は、紙に当てられ、けれどそのまま動かない。

静寂の中沈黙すれば、チチチチと、小刻みなゼンマイの音が耳につく。

……アルミの、メイド服のエプロンのポケットの中からだ。

僕の視線に気付いたアルミが、何か用？　って顔をする。

ポケットのどこを指さして、自分の左手首をしめせば、アルミはああと一つ頷く。

そしてポケットの中からは、銀色をした小さな懐中時計が

「ボールよね、ボール、ボール。ボールが一番真直ぐ飛ぶのは、どんな回転？」「！」「！」

のぞきかけてた懐中時計がすぐポケットに逆戻りする。

「ちよっ、今ネットです」「ストレート回転だよ。つまり、進行方向に対するバックスピンの

すらっと、おねえちゃんが答えを返す。

「その回転が唯一、自然落下に抵抗する力を発揮してくれるから、比較的まっすぐにボー

ルを飛ばすことができるんだよ？　他の方向の回転や無回転は、全部変化しちゃう」

ぽかんと、アルミが口を開け。そしてゆっくり、感心したように首を振る。

「すげえな。思わぬところに変化球博士がいやがった」

「ええ！？　マーシャ、普通だよ？　野球ファンなら、みんなそのくらい知ってるよ？」

「……ああ、うん。だよな。マニアってのは、みんなただのファンだっていうんだよ」

無駄口きいてて大丈夫なのかってちよっと心配になったけど、とぐるさんの尖りに尖っ

た鉛筆は、何やら書きつけ始めている。

図面——じゃなくて、アイディアのメモ書きみたいな感じだ。

「……ハンドで保持したボール。その制限さえなければホイール射出で楽勝だけど——ハンドで保持して、なおかつバックスピンをかけて、同時に姿勢を安定させる……」

メモ書きに絵が混じり始める。とぐるさんの中で、何かが固まりつつあると、はたで見ている僕にもわかる。

(なあ、タクト。なんかいいアイデアはねえか?)

小声でアルミが問いかけてくる。僕も考えてはいるんだけど、その方面には全く頭が働かないみたいだ。

どうやったら勝てるのかってことになら、あんなに色々考えたのに……

(変化球博士はどうだよ? なんか、思いついたりしねえか)

(その言い方やめてよう!)

ふうっと頬をふくませつつ、おねえちゃんは首を傾げて考えこんでる。

けど——アルミの時計の秒針だけが、むなしく時を

「ふみやおあん」「二つ!!!?」「二」

あくびまじりの鳴き声をあげ、棚の上、ミケが大きくノビをする。

退屈したのか、トットと窓の棧へと登って、ちよいちよい、手を伸ばし遊び始める。

「ああ、ダメ! ミケっ! 爪でカーテンひっかけちゃうよ!」

おねえちゃんがびよんぴよん跳びはね手を伸ばすけど、ミケにはまるで届かない。

ってか、ミケはおねえちゃんをまるで無視して、カシヨン、カシヨンと、カーテンとカーテンレールを接続してる留め具をひたすらにはじいてる。

「ネコってなへんな生きもんだよな。あんなん繰り返して何が——」

不意に、ぼかんアルミの口が開く。

「あ、アルミちゃん? あの、ミケ、すぐにおろすからっ」

怒ってるような表情じゃない。ミケの猫足とカーテンレールをじつと見て——

「とぐるさんっ! どうかっ!? レール+ローラー+指って構造」

「詳細に」

「だからっ、アームをレール構造にするんだ。ハンドは、先端から肩口までレールをスライドできるようにする。配線は、全部レールの下にまとめれば問題ないしさ」

アルミの言葉を聞くと同時に、とぐるさんの手は鉛筆を捨て、シャーペンを掴む。

引かれた線は図へと変わって、アルミの言ってる構造を、僕たちの目にも示してくれる。

「腕の全部がレールになるんだ。それで手首から先が、その上をスライドして移動する」

おねえちゃんの言葉がさらに、僕の理解を助けてくれる。

「なら——ボールは、レール上をスライドする手に持たれて……押し出される形で射出されるってこと? それで、おねえちゃんのいつた逆回転って、かかるの?」

「なるほど。そのための指とローラーね? いいアイデアだわ、アルミ」

とぐるさんの言葉を聞くと同時にアルミの笑顔が弾ける。

ふたりはもう、すっかりアイデアを共有できたみたいだけれど……

「指とローラー、どう使うの？ ローラーで回転かけても、指がかえって邪魔にならない？」

「こう使うのよ、マーシャさん」

とぐるさんが、てのひらを垂直に立てて、親指以外の四本をそろえて直角に曲げ伸ばす。

「回転をかけるためじゃなく、フタに使うの」

「わかったあ！ じゃあ、ローラーはレールの端っこ、いちばん先っぽにつくんだね？」

「ほいきたご明答！」

パチンとアルミが指を鳴らす。つてか……ああ、僕だけが置いてけぼりだ。

「ローラーを、ええと……どう？」

「んだからよ。逆回転を加えるためだつてば」

アルミが、床にころがってたボールを拾う。

「上からフタ。ボールの下にはローラーだ」

右手と左手でボールを挟み、アルミは左手だけを後ろへ滑らす。

と、ボールはころころ、逆回転をしながら後ろへくっついていく。

「この左手が、ローラーの仕事。実機ではローラーは高速回転し、ボールの方は、アー、ムレールの最後端から、ハンドのてのひら部分に押しだされる。ハンドの指部分は、フタつてかコースガイドとして機能する」

「こういうことよ、タクトくん」

いつの間に、とぐるさんが綺麗なスケッチを起こしてくれてる。

レールになつて腕。その上をスライドして動く手首。

……ああ、そうか。これ、カーテンレールと留め具の動きから連想したのか。

今さらながらそこに気付けば、僕の理解も進んでく。カーテンレールの留め具が、カーテンレール上に置かれてるボールを押しだしていく。その先っぽにはローラーがあつて、ボールの勢いを増しながら、逆回転を同時に加える。で、そのときにヘンな方向に飛びださないよう、留め具につけられてる指が、ガイドの役割を果たしてくれる。

「わかった——と、思います、多分」

言えば、とたんにみんながホっとした顔をする。

「なんか……ごめんなさい。僕だけ理解が遅くて」

「なんで！？ タクト全然わるくなんてないよっ！？」

「だぜ。つてか、そもそもこの構造を考えるきっかけくれたのがタクトだしよ」

「そうね。皆が同じ分野だけを得意とするなら、そもそもチームである必要なんてないのよ。逆に言えば、『どうすれば勝ちやすくなるか』っていうことについて、タクト君以外には誰も、タクト君ほど深く考えることができなかつたのだし」

くちぐちに言ってもらえる言葉が、感じちゃってた無力感を、綺麗に洗い流してくれる。僕は僕に出来ることを一生懸命やればいいって、気持ちがあつてすぐ前を向く。

「そのロボットなら、遠距離投擲の命中率を、試作機よりもあげることが出来るんですか？」
「確実に誤差は減らせるはずだぜ？　ってこた、命中率もあがんなきゃウソだ」

「けれど——どこを取ってどこを捨てるかで、詰められる精度も変化してくる」

「ボールをどう保持しながら障害物を越えるか——ってなあ、どのタイプにも共通してくる課題だし、アームとハンドは投擲だけじゃなく、障害物、特に第一障害のハシゴと第三障害の急な下り坂を越えるためにも、当然使っていかなきゃばならねえ。に、射出補助用のローラーの値段と重量、消費電力」
「その辺のことは、私とアルミとの専門分野だから」
アルミの言葉をスパッと断ち切り、とぐるさんは製図台の前から立ち上がる。

背筋を伸ばし、胸がくっついちゃいそうな至近距離から、こげ茶色の目が僕を見つめる。

「だから考えてタクト君。どうやれば一番勝てるか——その、戦い方を」
頷く、強く。とても自然にそうできている。

「はい、それなら出来ると思います。僕、その、『一番勝てる方法』とか——そういうことは、すぐくアイディア、たくさん湧いてくるみたいなんです」
言った途端に、あつと気がつく。

これって、もしかして僕の失くしてしまった記憶と、何か関係があるのかもしれない。問いかけたとおねえちゃんへと視線を移し、その瞬間に言葉を失くす。

スマイレ色の目は僕を見ず、どこか寂しげに、困ったように……沈んでるから。

※ ※ ※

「いよいよ開幕まで残り二時間！　高専ロボコン、今回の競技は『RUN&Throw』！
「タツチダウンを狙いに行くか、それとも投擲で勝負をかけるか——その選択がポイントとなる競技ですね」

「実況は私。千葉県・鉄艇高専四年の東田。そして解説は——」

「栃木県・等高専ロボット工学科教諭の西森です。よろしくお願いたします」

「さて西森先生、我々同様、各チームも練習に余念が無いようですが——」

……大きな総合体育館の中、実況の声がマイクを通して響き渡る。

体育館のフィールドを囲み、二階席、三階席には各校応援の生徒たち。

プラスバンドやチアガール、応援団の姿もあって、お祭りじみた雰囲気だ。

「ふわわわ、こんなに凄い大会だったんだねえ。甲子園みたい」

「そうね。ソーニャ博士の功績により人型ロボットが極めて身近なものになり、ロボット工学が活発になり、高専が一気に増設された——いわゆる、大高専時代を迎えてからこっち、高専ロボコンは年々盛り上がりを増しているわ」

「体育館のまわりも、すごかったもんね」

そこを抜けてきたおねえちゃんの手も凄いことになっている。

右手にわたあめ、左手にはりんごあめ。

お祭りの出店が相手だと、おねえちゃんの財布の紐も緩んじやうみたいだ。

「マーシヤ。そろそろ食べ終わらんねえと。二時間なんて、あつという間だぜ？」

アルミの声に、おねえちゃんはあたふたとあたりを見回す。

実況の声が体育館内に響き始めたあたりから、徐々に緊迫感が増してきている。

「ふわわ！？ えと——りんごあめ、タクトにあげる！」

「え？ うん。ありがと——えと、アルミ、頼める？」

「おおよ！ こいこい、ミケ」

アルミが嬉しげに覗きこんでるバスケットには、ミケが大人しく眠ってる。

その首には、ミケの耳の先と同じ色の、濃いグレーの首輪。

部活を始めたばかりのころに、アルミにもらったプレゼントだ。

“迷子よけのお守り”って言ってた小型発信器が仕込んであるから、こんな遠くの大会にだって、安心してつれてこられる。

「おまえはホントかしこいなー。首輪、いらなかったかもな」

まあ、実際、ミケならどんなところからでも、自力で帰ってこれるだろうけど。

けどおねえちゃんはぶんぶん首を横に振り、嬉しくてたまらないって笑顔を浮かべる。

「そんなことないよ！ あつたら安心！ それに、すつごく良くミケに似合ってるし」

「うん、僕もそう思う。色がびったりでかっこいい」

「へへ、そっかな」

笑顔のアルミにバスケットを預け、おねえちゃんの歯型がついてるりんご飴をパリン、噛み割る。……相変わらず、味とかはよくわからないけど、なんだか楽しい歯ごたえだ。

「わわ！？ もう食べちゃったの！？ ちょびつとずつ舐めても美味しいんだよ？」

「あ、そうだったの？ じゃあ、次のときにはそうしてみよう」

「ドライバー組はリラックスできてるみたいね」

微笑まじりのとぐるさんが、きよろきよろとあたりを見回す。

「ひとまず、荷物を下ろさせてあげたいのだけれど」

眼鏡の下の視線がちらりと僕へ向く。

……女の子の中に男が一人。バスケットをアルミに預けてもなお、大荷物のほとんど全
ては、もちろん僕の両肩だ。

「あつたぜとぐるさん！ あそこだ！ “可二高専Bチーム”」

アルミが指さすのは、観客席の下。フィールドをぐるり囲んでいるスペースの一角だ。
いくつものブースにロープでくぎられ、そのうち一つに、なるほど、アルミの言ったと
おり、“可二高専Bチーム”っていう札が貼られている。

「Bチーム？ なの？ マーシャたち」

「ええ。高専ロボコンは、各高専から2チームずつが出場できる決まりになってる。可二
高専Aチームは、ロボコン部——私とアルミの古巣ね」

「あー！ なんだっけ？ えっと、『参加することに意義がある』なチーム？」

「良く覚えてたな！ その通りだぜ。見ろよ——あそこだ。あ、タクト、ケースはここに」
アルミの指示に従って、ガツリとしたアルミケースを慎重に慎重に床へと下ろす。

下ろしてすぐに視線をあげれば、アルミが指さす“あそこ”には、携帯カメラであちこ
ちパシャパシャ取りまくっている一団がいる。

「真剣勝負の場だつてのによ。のんきなもんだぜ。お祭り気分だ」「むぐっ！」

わたあめが、突然苦くなったような顔をして、おねえちゃんがあーんと大口を開ける。

「ああ、ゆっくり食べていいわ。そういうメリハリ、マーシャさんは上手なもの」

かばんを開けて、クリップバインダーを取り出しながら、とぐるさんの目もほんの一瞬、
可二高専Aチーム——ロボコン部の方を冷たく捉える。

「あの人たちにはね、メリハリも、規律も役割分担も無いの。誰ひとり自分の責任範囲を
明確にせず、あいまいさに甘え、何かあってもなあなあで済ませてしまう——そんな集団」

とぐるさんの声を聞いているのかいないのか——工具ベルトを装着し終えたアルミはも
う休みなく手を動かして、黙々と、僕らのロボットを組み始めてる。

その姿を頼もしそうにジッと見つめて、けれどふと、とぐるさんの眼が寂しげに曇る。

「……今ならわかるわ。私とアルミは、その対極に立とうと力みすぎていたのね」

「対極？」

「自分の責任を果すことだけに拘泥し、他人にもそうあることを要求していた。自分の
あれ、他人のあれ、ミスは個々人の責任であり、許されざるものだと思っていた。……

それを責め、修正していくことこそが、最善の結果へつながっていくと、盲信していた」

「あー……なんだか息苦しそうだね？」

「そうね。この私でさえ、息苦しかった」

素直にうなずき。そうして、とぐるさんの声が自信なさそうに細まっていく。

「けど……今は少しは、変化できたように思うのだけ」

「少しどころか全然ちがうよ！ “他人”だなんて、ここには一人もいないし」

自信満々なおねえちゃんの笑顔に、とぐるさんはホっとしたような息を吐く。

「そうよね。私も、そう感じてる。多分……今のこれが、チームっていうものなんだって」
「“チームっていうもの”じゃなくて、“いいチーム”だよ？ マーシヤだって、タクトがきちんと操縦できるように、オペレーション、ちゃんと練習したんだし！」

「ええ、その点は信頼してるし期待もしているわ。タクト君には一番まつすぐ届くのは、マーシヤさんの声で間違いないわ」

「えへへー、それはだって、きょうだいだもん」

言って。ん？ っとおねえちゃんは眉根をひそめる。

「その点“は”信頼してる、なの？」訂正。その点、“も”
プっ、と小さな拭き出し笑い。

そうしてジャラリ、工具ベルトを歌わせながら、しゃがみこんでたアルミが立ち上がる。

「オッケ！ 組めたぜ。とぐるさん、チェックよろっ！」

「ええ」

すぐさまに、とぐるさんの顔が引き締まる。

眼鏡をキラリと光らせて、僕らの機体の正面にペタリ、しゃがみこむ。

「とぐるさんのチェックが済んだら最終調整に入る。タクト、頼むわ」

「うん」

うなずいて、コントローラーに手を伸ばしかけ——ひっこめる。

「あん？ どしたい」

「手、ちよつとベタついてる気が……洗っときたい」

「あ、マーシヤもいくっ！」

「そっか。トイレだったらそこ出て左だ」

「はーい！」

良いお返事のお姉ちゃんをつれだって、トイレの前でいったん別れる。

「あ、タクトっ」

おねえちゃんの顔も、なんだかキリツと引き締まってる。

「うん。なあに？ おねえちゃん」

「あのね？ ええつと——そのっ」

いや、違う。引き締まってるというよりも——これって……緊張しちやってるんだ。

「ううんと、ね？ 今日の『RUN&Throw』——その、競技のことなんだけど」
「うん」

「競技っていうのは、えとね？ 戦いじゃなくて——その、そう！ スポーツ、なの」
「スポーツ」

なんだろう。なんでおねえちゃん、こんなに緊張しちやってるんだろう。

何か大事な理由があるのかもしれないと感じれば、僕にも緊張がうつちやいそう。

「そう、スポーツなんだよ！ 決められたルールの中で、正々堂々とプレイするのだからね？ あのね？」

言いづらそうに、おねえちゃんが口の中で言葉をもごもごさせる。

言っているのか悪いのか——すごく、悩んじゃってるようにも見える。

「だからっ！ あのね？ えと、『やっつけてやる！』みたいなふうに考えすぎないようにして、その……スポーツとして……あ、うん！ ベストをつくして楽しもうね？」

言われた瞬間すごい違和感が、僕の一番深い部分からこみあげてくる。

「やっつける——相手を打ち負かすためじゃなく。ベストを尽くし……“楽しむ”？」

「うん、そう。出来る？」

おねえちゃんの不安げな顔。そんな顔、僕は絶対みたくない。

だからちろん、すぐに“出来る”と答えたくなって、けれども言葉が喉に詰まる。

半ば無理やり、ひとことひとこと吐き出すように繰り返してみる。

「やっつけることを目的としない。スポーツとして、ベストを尽くして、楽しむ」

水なんてほんの少しも欲しくないのに、ものすごく——自分が乾き切ってる気がする。

……なんでだろう、なんで僕は、倒すことこそが全てだなんて——相手を倒さねば自分がやられてしまうだなんて——そんな考えが当然のように、頭にうかんでくるんだろう。

「タクト？」

おねえちゃんの、スミレ色の眼が揺れている。

そこに小さく映り込む僕は——表情を失くしてしまったみたいで……怖い気がする。

だから心配なのかも、と。そこに自分の過去を見ちゃったような気がして——

「大丈夫……。うん——出来る、よ」

おねえちゃんに、ただただ安心してもらうため。

心の中の、自分でも驚くほどの強い欲望——いや、むしろ恐怖とか強迫観念に近いものをなんとか誤魔化し、折り合いがつくギリギリの表現を必死で探して、口にする。

「スポーツとして楽しんで、ベストを尽くすことを最優先するよ。そうすれば——みんなで作ったロボットだもん——結果も、きつとついてくると思うし」

「うん！ そうだね、うんっ」

ホっとしたように微笑んで、おねえちゃんは僕の手を両手でつかんで、目を丸くする。

「うわっ!? ごめんね！ おねえちゃんの手、べたべただあ！」

「や、僕のがべたべたなんじゃないの？ だから、洗いきたんだし」

「あ、そーだね、手を洗いにきたんだっけ。ごめんね？ へんなことで呼びとめて」

「ううん、全然」

ありがとうって、何故か思って。

それはけど、口には出しちゃいけない気がして、掴まれてる手に左手を重ね、ほんの一瞬、キュってにぎって、そうして、ゆっくり手を解く。

「洗ってこよう。手」「うんっ！」

トイレに入り、すぐに水道の蛇口を一杯に開き切る。

手が、物凄く熱い気がする。心地よいのと、気持ち悪いのが混じっちゃてる。

流れ出る水に手をひたし、ひたすら、熱を冷まし続ける。

(記憶をなくす前の僕——ひよっとしたら、ケンカばかりしちゃってたとかなのかな) 記憶が無いと初めて告げたあのときの、おねえちゃんの表情を思い出す。

嬉しさと、哀しさが、同時に入り混じっていたような顔。

もし以前の僕がケンカっぱやくて、それでおねえちゃんを困らせてしまっていたとかだったら——全てが、綺麗につながる気がする。

(……うん、過去がどうあれ、今の僕も、勝ち負けに熱くなりすぎるみたいな傾向はあるみたいだし——そこは意識して注意しよう。熱くなって冷静さを無くせば、絶対にミスは増えちゃうし……そんなミスで負けたら、とぐるさんとアルミにも申し訳がたたないし) 水をすくって顔を洗って、蛇口を閉める。

トイレの外でしばらく待てば、おねえちゃんは僕を見つけて笑ってくれる。

「じゃ、もどろっか」「うん」

並んで歩く。歩きながらふと、思いたず。

「そういうばさ、顧問の——確か、富田先生っていう人」

「あー！ うん、結局一回もみたことないよね？ 今日もやっぱり来てないし」

「ってことはさ、今日もおねえちゃんがやってくれるだよね？ オペレート」

「当然でしょ？ おねーちゃんが一番上手って、とぐるちゃんも言ってたじゃない」

えっへんと、自信ありげな態度に心がホッとする。

おねえちゃんになら、僕はいくらでも甘えられる。

「ならさ。おねえちゃん、注意しててくれる？」

「注意って、何を？」

「だからさ、僕が、熱くなり過ぎないように。勝ち負けとかに拘りすぎてるようなら」

「あ！ うん。もちろんだよ！ タクトがベストを尽くせるように、お手伝いするっ」

顔をキリリと引き締めて、おねえちゃんが拳をつきだしてくる。

僕も拳をつくってちょこんと合わせれば、とたん、笑顔がぱあつと弾ける。

「よかった。せっかくの試合の前に、へんなこと言っちゃったかって、気になったの」

「そんなことないよ」「ああー。おーいー。やっと来たっ……」「あっー」

アルミが大きく手を振っている。その足元には通電までを済ませた機体——ってか！ 僕たち、のんびりしすぎたみたいだ。

「待たせちゃってごめ」「いいから！ 最終チェックを頼まあ」

この四カ月ですっかり僕の指に馴染んだコントローラーを渡される。

同じく完全に叩きこまれた動作チェックのための手順を、集中しながらなぞり始める。

「ジゲンmk1は、知ってる通りの狙撃型——遠距離投擲特化型の競技ロボットよ」

とぐるさんの声が、集中している僕の耳へと、催眠学習のように滑りこんでくる。

ジゲンとは、日本最高のガンマンである、Dジゲンのという人の名前からとったって、そんな細かなところまで。教え込まれた知識がするする、条件反射で浮き上がってくる。

「右腕は、レール長を確保するため、ギリギリまでを下腕としている。レールの歪みを防ぐためにも、移動時は常に右腕の全てを肩関節から直上方向に向け続けること。つまり、障害物踏破は左腕、両脚の三点のみで全て行うこととなる」

ちようと、腕部のテスト動作だ。右腕は——垂直に持ち上がるのと、照準動作とが出来ればいい。投擲動作は、最後の最後に確認となる。左腕は、肩、肘、手首、各指まで、全ての関節を動かして、細部までをもチェックしていく。

「うし。腰から上はオールグリーン。下を頼まあ」「了解」

「アンバランスな構造のため、速度をあげての歩行動作は不安定になる。投擲性能を最大限に確保した代償として、下り急勾配を確実にクリアできる構造とはなっていない。ので、基本戦略は——」

呪文のように唱えられ続けてたとぐるさんの言葉がフと止まる。

ちらり、眼鏡に捉えられ、ハッと気づいたおねえちゃんが、慌てて言葉の続きを紡ぐ。

「ええっと、まずはミスの無いボール取りこみ。それから、できるだけ早期にハシゴを登り切ること。ハシゴを登り切った時点で、もしも相手より先行したら、梯子を登り切った直後の相手を。相手が先行していたら、できうるかぎり早期に相手を狙撃する」

「——というものとなるわ」

おねえちゃんの言葉は当然びたり、僕らが練りに練ってきた戦略と一致する。

相手が完全踏破型なら、三発的中による勝利を。

防御型であるなら、相手を下り急勾配まで到達させず、判定勝ちを。

それぞれ、僕らは目指して戦うと決めている。

もしも相手が投擲型で足を止めての撃ちあいになるなら、それこそまさに望むところだ。

パイロットが、僕と同等までのヤツなら——絶対に、機体の差で勝てるから。

「あいよ！ 腰から下もオールグリーン、あとは投擲系だなー」

「あ、アルミ。少し待って」

とぐるさんが手をあげ僕らの動きを制して、慎重そうにあたりを見回す。

——他のチームを見てみれば、暗幕とかで目隠ししているところもあって、なるほどそういう考え方かと理解をすれば、自然と右手が持ち上がる。

「あの、とぐるさん。質問、良いですか？」

「もちろんよ。何かしら？ タクトくん」

「開会式までの時間って、あとどのくらいですか？」

「ん……っと、四五分ちよつとはあるぜ？」

アルミの声に、なら、と気持ちが強まっっていく。

「あの、とぐるさん。提案」「許可するわ。何かしら？」

間髪いれずの返事にすぐさま、僕の言葉も流れ出してく。

「投擲試験なんですけれど、隠さず、見せつけるようにやってはどうかと」

「おいおい！ 見せつけるって」「理由は？」

「どのみち、一回戦で僕らの手の内は全部バレます。なら、今隠すことにはあまり意味がありません」

「けどよ、その一回戦の相手にもしも」

「開会式までに行えるような付け焼刃の対策が脅威になるとは思えません。それより——」

「なるほど？ 威圧ね。相手の動揺を誘えれば……そうね、それはいい考えね」

こくり、とぐるさんが小さく頷く。途端、アルミが大声を出す！

「さあて！ いよいよ投擲試験だっ！」「！！！！！！」

たくさんの眼が、一気にアルミに引き寄せられる。

「メイドさん！？」「メイド服ですね」「メイド服——可二高専の刃金有実かつ！」

アルミ、なんだか一部の人には有名人みたいな雰囲気だ。

眩きがまた注目を呼び、場内のざわめきが大きくなつてく。

「可二高専の、開閉器とぐるの方のチームか」「ロボは毎年凄いなんだよな。いつも仲間割れして負けてるけど」「どれ今回は——うわ、操縦者、男でござるよ！？」

あ、今度は僕が注目されてる。

「顔も身長もスタイルも……まあ、普通？」「見事に平凡な印象だな」「けど、あの刃金有実と開閉器とぐるがチームにいられた男だろ？」「これは……リア充の匂いですよ……！？」

……なんか、向けられる視線が凄くピリピリ尖ってる。

敵意むき出してか……おねえちゃんはスポーツだっかってたけれど、スポーツってのも——なんだか結構、戦いじゃないか。面白い。

「んじや、マーシャ。的を頼まあ」「はあい！」

おねえちゃんがアクリル板を胸に抱えて、とてとて、壁際に走ってく。

とたん、しいんと——ざわめき達が鎮まり還る。

「……………なん、だ、あの金髪幼女」

静寂の中、だれかが呟く。

とたん、ざわめきは妙な熱を帯びよみがえる。

「うわ！？ 可二高専とぐるチームに、ついに第三の美少女が！！？」「否っ！ 第一の美少女でござるよ」「キモいなお前っ！ でも……うっわ、ホントにめっちゃ可愛いコだな」

「タクトー？ 準備できたよ？？」「あ、ごめん、おねえちゃん」

「『『『『『『おねえ——っ……！』』』』』』」

再び、静寂。集中するには、ちようどいい。

「よっしゃタクト！ 派手にブチかまそーぜっ！」「了解」

集中する——集中しろ——僕。

焦るな、焦らず、目標を照準しろ。

照準したら、ためらわず——スイッチ！

（パスンっ！）「うしっ！」「命中……っ！！！！」

何千回と繰り返し返されてきた練習動作と同じに、今回もまた、ジゲンmk'1は僕の操作に僅かの誤差も無く答えてくれる。

「な——なんだよ、今のボールスピード」

「っっていうか、距離——会場の端から端まで届いたぞ！？」

さっきまでとは種類の違うざわめきが、いっそう激しくまきおこる。

「コース上の最長辺って——」

「対角線だろ？ ええと、一〇七ちよい」

「あの機体、どっからでも狙えるのか！？」「いや、落ち着け、高度があるから——」

ざわめきは、動きをとまなうバタつき変化し始める。

顧問らしい先生を囲み、会議を始めるチームまである。

「……タクトくんの思惑どおりと言ったところね」

満足そうにとぐるさんがメガネのフチを持ち上げる。

アルミはキシキシと悪者じみた笑い声を立て、観客席の一角をそつと指差す。

「みるよ、カメラもこつち向いてるぜ？ こりゃ、注目チームの仲間入りかもな」

「カメラ？」

指された方へと視線向けて、途端！ おねえちゃんがグルリとそちらへ背中を向ける！

「お、おねえちゃん？ 一体どうしたの？」

「カメラ——カメラって……あれ、テレビのカメラ？」

「おうよ……国営放送のカメラ」「国営放送っ……！？」

だつと！ おねえちゃんが逃げ出しかけて、慌てたアルミに抱きとめられる。

「ちよっ！？ どうしたんだよマーシャ」「ダメ！ やめてっ！ 目立っちゃうっ！」

「目立つ？ ……ねえ、マーシャさん、落ち着いて？」

とぐるさんが言い、観客席のカメラとおねえちゃんを結ぶ線上に立つ。

目隠しになるつもりなんだと理解して、僕もすぐさま隣にならぶ。

「アルミ?」「ああ、うん」

「おねえちゃん——目立っちゃうってどういうこと? 目立つと、ダメなの?」

「うん。ええと、そのっ——目だったら、追手」

「追手!?!?」「じゃなくてっ! あの時、そのっ」「ンニヤっ!」

足元! いつの間にミケがバスケットから外に出ちゃってる!

「ミケっ!」

おねえちゃんがミケを抱きあげる。

(マーシャ、しゃがむニヤ)

「C...」

言われた途端、おねえちゃんはミケをかかえてしゃがみこむ——

今、ミケ——ものすごく小声でだけど、人の言葉でしゃべっちゃった。

……とぐるさんたちには聞こえてなかったみたいだけど、それだけ、緊急事態ってことなんだろう。ってか!

「あの! とぐるさん、アルミ——ええと、セッティングのことです」

「セッティング? 今さらっ!?!」「いやええと、そのっ」「いいわタクトくん。何かしら?」

僕の思惑を理解してくれたのか、そうでないのか。とにかくとぐるさんはアルミを促し、僕と一緒にジゲンmk.iのところ——おねえちゃん達と離れたところまで移動してくれる。けどまあとにかく、これで、ミケの内緒話が聞かれる可能性は減らせたわけだ。

「で? タクト。セッティングに何か問題が?」「え? あ、えと——」

「その件で、我々からも確認したい事項があるので」「!?!?!」

背後から、今度は全く知らぬ声。貫禄のある男性の声が僕らを呼びとめる。

「はい? 何でしょう」

動揺のかけらも見せず、とぐるさんがミニスカートの裾をひるがえし振り返る。

「競技参加機について、レギュレーション違反の可能性があると指摘があつてね」

年齢は、五〇才くらいだろうか? 競技委員の腕章をした男性は、声と同様貫禄のある態度で僕らを圧迫してくる。

「競技開始以前に確認させてもえれば、大会進行がスムーズになると思うが、どうかね?」

「意義はありません。顧問は病欠しておりますので、私が窓口になります」

「可二高専のBチームさんの顧問さんは、毎年この時期体調を崩されるね」

カッコと、男性は大笑いする。なんか、とぐるさんとは顔見知りとかなのかもしれない。

「で? レギュレーションのどの部分への違反の疑いが」

とぐるさんがレギュレーションシートを貼ってあるクリップバインダーを手にする。

「ここだよ——“投擲とは、“ボールがハンドに保持された状態から、ハンドおよびアームの働きをともなうて投げる行為”というところだな」

「つて、そこは電話までして確認をっ」「アルミっ！」

「ああ、機構自体には問題ない。エアだろうがガスだろうが油圧だろうが、押しだす”機構も立派に“アームの働きだ”」

「ならっ！ 何が問題だったて」「落ち着きなさい、アルミ」

口をとがらすアルミを、それを制止したとぐるさんを、まるで気にした様子も見せず、男は淡々と説明を続ける。

「“保持”の部分だ」「！……？」「」

「どうかな？ 杞憂であれば我々としても幸いだがね」

男がジゲンMk.1の真正面へとしゃがみこむ。

興味深げに、けれどもとても鋭い目つきで、その細部までを観察していく。

「ボールを射出する前の状態で止めてもらおう。ローラーの動きは停止させてだ」

「はっ」

〈開会式開始二〇分まえです。各チームは入場準備を進めてください〉
場内アナウンスが響く。けど、僕たちにそれに応じてる余裕はない。

「——出来たぜ」

「よかるう、それでは失礼して確認させてもらうよ」

射出寸前状態のジゲンmk.1が、男の手により慎重に持ち上げられる。

そしてそのまま、機体は床へ向け傾けられ——

「！っ！！！！」

——四本の平行に揃えられてる指立ちと、ボールの脇の親指と。

ジゲンmk.1のハンドは、傾斜によって転がろうとするボールを……まるで支えない。

ボールはアームレールを転がり、停止しているローラーにゆっくりあたる。

「これでは“保持”とは認められんだろう。最低限、位置エネルギーに抗してボールを制止させることができ、初めて保持だ。異論はあるかね？」

アルミがすがるような目でとぐるさんを見る。

とぐるさんはじつと下を向き、唇をわなわな震わせて、そして大きく開きかけ。

——けれど、無言のまま閉じて。それからゆっくり、とてもゆっくり言葉を吐く。

「異論の出しようもありません。ご指摘に感謝します」

「まあ、まだいささかの時間はある」

〈開会式開始二十分前です。各チームは、入場の準備を始めてください〉

「最善を尽くしたまえ。期待しているよ」

言って、男は軽く手を振り立ち去っていく。

ってか……これって、僕のせいだ。

僕が、余計な——いらぬことを言ったからっ——

「あのっ」「アルミ。開会式は出なくていいわ」「ああ、そのつもりだぜ」

工具ベルトをジャラリと鳴らし、けれどアルミは厳しい顔でジゲンmk.1と向かい合う。
「とぐるさん、指示を」

「調整部分は親指と小指、他は一切いじらない。親指小指の二本で保持し、射出時にはその両方を同時に緩める。悪いけど、タクトくんも残って調整に参加して？ 開会式には、私とマーシャさんで」

「ごめんなさいっ！ なんか、トラブルなのっ！？」

タイミング良くおねえちゃんの声が——つて！！！！？

「なっ、なに？ マーシャさん——その格好は」

とぐるさんが、目を丸くして問いかける。アルミは頬をぶくぶくにして、肩を震わせ必死に笑いをこらえている。

おねえちゃんはギャングみたいな帽子をひどく目深にかぶり、サングラスをして——なんていうのか、それこそ出来の悪いコスプレみたいになっちゃっている。

もちろん、これはこれでかわいいんだけど。

「あのね？ 変装しなくちゃだめなの。あの、マーシャたち……ママがなくなったとき、借金があつて、それから逃げてきちゃつて」「！！？」

ピンとくる。だからおねえちゃんは、テレビと聞いて、すごく慌てちゃってたんだ。

ということとは、この変装は……心配そうに、今もおねえちゃんの足元をうろうろしてる、ミケのアイディアなんだろう。

「だから、借金とりの人に見つかつちやつたらこまるの。でも、マーシャ、タクトと一緒に、とぐるちゃんとアルミちゃんと一緒にちゃんと頑張りたいから、変装するの」

「なるほどな。だからそんな格好——とかいってる場合じゃねえしっ！！！！」

アルミがドライバーを手に、ジゲンMk.1の手を弄りはじめる。

その顔からは、怖いみたいなああ厳しさが消えている。

いつものように、楽しげに踊る手つきをみると……おねえちゃんのこの変装が、思わぬ効果を発揮したんだと強く感じる。

……僕のミスを、おねえちゃんが薄めてくれたんだ。

「え？ なんでジゲンちゃんの手バラしてるの？ やっぱり、何かトラブルなの！？」

「トラブルじゃないわ。回避できたの。タクトくんのおかげで、事前にね」「っ……！？」

あまりに意外な言葉にまじまじ、とぐるさんを見る。

その顔はすごく真剣で——本当にそう思ってくれてると伝わってきて。

「競技が始まってしまつてから、相手チームの抗議で確認されたら——その時点で私たちは、失格チームになつてた。タクトくんがデモンストレーションを提案してくれたから、失格を回避するチャンスをつかめたのよ」

「せっかくのチャンスだ。無駄にはしねえ。んでもって勝つ」

手と目はジゲンmk1から話さずに、アルミが力強く宣言する。

「そっか！ なあんだ、大丈夫ならよかったあ」

ほうっと大げさに一息を吐き。そして、おねえちゃんも笑ってくれる。

みんなの言葉に、動きに、笑顔に——感じかけてた罪悪感が消えて行く。

いれかわるようになって何か——うまく言葉に直せない、熱い気持ちがおみ上げてくる。

「僕、調整がんばります。一回戦開始までに、必ず改造前と同じ状態まで詰めて見せます」

「がんばれタクト！ がんばってアルミちゃん！」

僕らにガッツポーズを見せて、おねえちゃんはとぐるさんへと向き直る。

「それで、マーシャはなにすればいいの？」

〈開会式開始十分前です。各チームは、メインスタージ前に整列してください〉

とぐるさんの手が、おねえちゃんのブカブカ帽子をまっすぐにそっと整え直す。

「私たちは開会式に。私の後ろにぴったりついて、目立たないようにしてればいいわ」

「……選手宣誓まではじまっちゃったか。クソっ」

悪態をつき、それでもアルミの動きは少しも焦らない。

「こいつでどうだ……親指、まだ渋すぎか？」「どうかな、やってみる」

ボールをセットして——照準して——スイッチ！

(パシンっ！)

「よしっ……」

壁際に立てかけていたアクリル板に見事的中！

すぐにアルミは駆けだしボールを拾いなおして、ジゲンmk1の手に——

「落ちねえっ！ 保持したっ！ よっしゃ！ これで誰にも文句はいわせねえっ！」

「うん、ばっちりだ。僕ももちろん、文句ない」

自信満々のアルミの笑顔に、集中と緊張が解けて行く。

雑音が、喧騒が——僕の周囲に戻り始める。

へ——にて、開会式を終了します

アナウンスの声。すぐさまに体育館を埋める足音の中、ひとときわ軽い駆け足が僕らめが

けてすつとんでくる！

「どう！？ タクト、アルミちゃん！」

「完璧だぜ！ これで、いつでも一回戦にいけらあ」

「ほんとに！！？ すごい！ すごいね、さすがはアルミちゃん！」

「うん、僕も本当に凄いと思う。こんな短時間で、よくここまで——」

へへっと笑い、油にまみれた手袋のまま、アルミがぼりぼり頬を書く。

「言ったら？ まあ、これだけがアタシの取り得なんだよ」

「御苦労さまアルミ」

とぐるさんが、ぼんつとアルミの頭をなでる。

ただひとことと、ただそれだけの小さな動きが、アルミの顔を、まったく力みの感じられない、とても自然な笑顔に変える。

「アルミ？ 念のためだけど、バッテリー」「つけねえ！ 新品と交換しねえと……！」
ゆるみきつてたアルミの顔が、とぐるさんの一言でキリリ引き締まる。

ってか、アルミもさすがなら、とぐるさんもさすがすぎるのしか言いようがない。

一山越えたこの状況で、良くもそこまで冷静に――

「よっしゃ！ 動力系もオールグリーン！」

「さて、と」

とぐるさんが眼鏡の位置をきっちり直す。

「これで、ようやく戦える」「っ！」

――その一言に、僕もホッと、し油断をしてしまったと気づかされる。

そうだ、戦いはこれからだ。まだ、始まってもしなかったんだ。

「ここから先は、タクト君、マーシャさん。あなたたちが主役よ」

「はいっ！」「マーシャも、えっと――がんばるねっ！」

とぐるさんは小さく笑い、開いた右手を、甲を上にして体の前にそっと出す。

すぐさまアルミが立ち上がり、その手の上に右手を重ねる。

おねえちゃんの小さな手がそこに重なり――僕も、自分の手を乗せる。

「練習通りにいきましょう。それから――ええと……アルミ、よろしく」

「ま、ピットクルーはとぐるさんとアタシだからよ。大船に乗った気持ちで、ガンガン攻めてきちゃってくれや。なんかあつたら、直してやるから」

頼もしい言葉にうなずきかえせば、アルミはスウッと息を吸いこむ。

「んじゃ、いっちゃカマしてやろうぜっ！ ファイトー……！」

「おーっ！」「了解」「わかったー」「頑張りましょう」

タイミングだけを重ね合い、みなが口々に答えれば、アルミはアララとズっこける。

「こういうときはよ、『オーっ！』でいいんだ。それで、呼吸を合わせるのっ！」

「あ、そういう決まりなんだ」「マーシャたち、そういうのはじめてだから」

「……私も、初めてだから。こういうの」

照れくさそうにとぐるさんがいい、もう一度手を差し伸べ直す。

「アルミ？ やりなおしを」

「んじゃ、いくぜっ！ 『可二高専Bチーム！ 絶対勝つぞっ！ ファイトーっ……！』」

「『お……』」

重なり合った手から声から、なにかが伝わるような気がして。

ああ、これが——呼吸が合うってことなんだろうか？

「一回戦、第二試合まもなく開始です。可二高専Bチームさん、準備願います」

「[[[[はっー]]]]」

係員さんの案内にも、ぴたりと合った答えが返る。

なんか、なんだか、すごくいい感じだ。 僕たち、多分——チームになってる。

「さて！ 次は一回戦第二試合です！」

……係員さんに従ってフィールドに入るやいなや、実況の声が僕らを迎える。

「赤フィールドには、武田信玄のDNAを色濃く受け告ぐ甲府の雄！ 甲斐高専Aチームが入場してきました。かたや白フィールドには、見た目は色もの、けれど実力は本格派！ 埼玉の人気者、可二高専Bチームの入場です」

「……僕たちって、埼玉の人気者だったの？」

「実況ってなそういうもんだ。こまかいトコは気にしねえで、ノリで聞き流しな」

「そうなんだ。わかった」

一人ごとのつもりだった呟きに、アルミが返事をしてくれて——インカムとヘッドセットをつけてたんだと思うだす。

「解説の西森先生。甲斐高専といえば、鹿児島・薩陣高専と並ぶ全国大会の常連校ですが」

「そうですね、今回も完成度の高そうな、バランスの良い機体です」

「赤のスタートラインには、白い機体、“走るデオニス”がスタートを静かに待っています。二足二手に頭部をもった身長八〇センチメートルほどの人型ロボットの頭上には、金に輝く堂々たる王冠！ あの王冠は、どんな役割を果たすのでしょうか！？」

赤フィールドの甲斐高専は、男子三人と顧問の先生一人のチームらしい。

ロボットは——どうだろう、一見すれば走行型だ。

全体のフォルムに無理が無く、下半身がしっかりしてる。転倒とかはまずないだろう。

「片や、可二高専。女性開発者コンビ、開閉器とぐる刃金有見が新メンバーとともに挑む機体は、“ジゲンMk.1”。こちらは、随分と大柄な機体。全高は——一二〇センチメートルを越えているのではないのでしょうか？ こちらは頭部を失くした思い切ったデザイン。円筒状のボディ部から突き出した肩と、金属レールの腕とが非常に特徴的です」

「センサー系をボディ上部前面にまとめているようですね。この構造だと首が振れない——つまり、ロボットが走行している状態では、進行方向のみのデータしか取れません」

「なるほど。となると、どのようなメリットとデメリットが想像できますか？」

「まず最大のデメリットは、いわゆる人型基本構造を外していますから、『定量的運動性制御』——いわゆる、“公式”の恩恵に、部分的にしかあずかれない、ということですよ」

「それは、極めて大きな不利ですね」

その声を聞き、ポーカーフェイスを装っていたとぐるさんの口元が少しだけ緩む。

自信が笑みにこぼれたような、頼もしいような頬笑みだ。

「特に、走行面、障害物踏破面ではデメリットが顕著に表れてくることが予想されます。一方、計算できるメリットは、安定性と精度です」

「と、おっしゃいますと？」

「首間接を持たない、振らないということは、ボディ全体でセンサー系を保持しているということになります。体ごと相手に向けることとはなってしまうますが、そうした場合の計測精度——というか構造全体が産んでしまい得る誤差の少なさは、頭部センサー形式より確実に抑えられます。ということは、この機体、可二高专Bチームのジゲンmk.1は、そこまでの精度を必要としている機体であるといえるでしょう」

「そこまでの精度を必要とする動作とは、つまり——」

「投擲です」

会場が、緊張をはらんだようなざわめきを起こす。

「どのタイミングでどう投擲をしかけてくるか。そこが勝負のわかれめになるでしょう」「とーてきって聞いただけで、会場、どよめいちゃったねー。タクトのデモンストレーション、すっごい効果だったんだねえ」

のんきな声に視線をあげれば、フィールド全体を見下ろせる、背の高い椅子付きの脚立の上に、大きな帽子とサングラスとで顔を隠したおねえちゃんがちょこんと座ってる。

「おねえちゃん。向こうのチーム、全国大会の常連だって」

「タクトだもん、きつと勝っちゃうよ？ そしたらみんな、もっと驚いちゃうのかな？」

くすくすと面白そうにおねえちゃんは笑い、それからふっと、真剣な目で僕を見下ろす。

「でも、スポーツだから。相手をやっつけるんじゃないか。タクトのベストを尽くそうね？」

「うん、大丈夫」

僕はチームの一人なんだったという感覚が、どんどん強くなってきている。

「一人じゃないから。おねえちゃんと、アルミととぐると、ミケと一緒に戦うんだから」「うん、そうだねっ！」

〈両チームの操縦者は、コントローラーを持って下さい〉

スピーカーから、アナウンスの声。

とたん、ざわめいていた会場は、水を打ったように静まり返る。

「さあ、甲斐高专の長谷川正也選手、可二高专の田中タクト選手、それぞれがコントローラーを手にします」

「まずは、ボールの取り込みです。何個を、どのようにして取りこむか、注目しましょう」

『両チーム、準備は良いですか？』

白シャツに黒いズボンのレフェリーがフィールド中央で僕らを見渡す。

審判の声もインカムを通じ、会場中に響き渡ってる。

セッティングを見てたどぐるさんが背筋を伸ばし、少し緊張した声で告げる。

「可二高専、準備良しです」「甲斐高専、整ってます」

『では、両チーム。アイディアマンシップにのっとり、正々堂々と競技してください』
レフェリーが手袋の手を、真直ぐ高く、高くに掲げる。

『カウントダウン、ファイブ・フォー』

「スリー・ツー」

会場中が、一緒にカウントダウンを始める。揺れる空気が、僕の集中を高めてくれる。

「ワン・ゼロっ！！」

ブザーが鳴る。その音を聞くと同時に指はコントローラーを操作している。

「さあ、両チーム、各スタート地点にすえつけてあるカゴにロボットを対峙させます。おつと！ 甲斐高専、走るディオニス！ 両手でボールを三個、まとめて抱えあげました！」

「甲斐高専は、なるほど。あの王冠に、上からボールを格納するわけですか——ああ、王冠内に三角形にボールをセットし、安定させるといふ目論見のようですね」

「王冠の位置を直すような指づかい——ボールはぴったり、お互いが押さえあうようにして収まりました！ これは、ちよつとやすつとの振動ではビクともしそうにありません」

「間違いいねえ、向こうはガチガチの走行型だ」

アルミの嬉しげな声が聞こえた気がして、けど、意味まではつかめない。

今はとにかく——ハンドとアームをミスなく操作することだけに集中するんだ。

「一方の可二高専は——おおっと、これは、さっそく変わった挙動をしています」

「ハンドでボールを持って——ボールを持ったまま、手首が裏向きに回転しましたね」

「そして、ボールごと手首が、肩の方向へとスライドします。これは……」

「ああ、おさまった。収まりました。肩に空洞が設けられ、そこがボールチャンバー、いわば弾倉になっているわけですね。いや面白い」

「しかし！ この構造はボールの取り込みに時間がかかってしまいそうです！ 2個目のボールを取りこむ隙に、甲斐高専、走るディオニスはすでに走行を開始しました！」

「走行速度、ありますね。さすがにバランスも実にいい」

「おっけータクト！ あと一個！ さすがにタクトは上手だねえ」

うっとりとなえしているような、おねえちゃんの声。

聞いているだけで嬉しくなって、無駄な力みが溶けてくよううで。

「おっと！ 可二高専、ジゲンMk1も走行を開始しました——右手を、真直ぐ高くに掲げ伸ばしたまま走っています。これはバランスが難しそう——ああ、やはり、一步一步を丁寧に、踏みしめるようにして進んでいきます」

「機体自体も相当ボトムヘビーに組んであるようですね。速度より安定性重視のようです」

「なるほど！ しかしこれでは、投擲距離にまで接近できないかもしれません！

甲斐高専・走るディオニスは順調に——今、最初の障害、ハシゴへと取りかかります」

「タクト、相手がハシゴに手をかけたよ！ ねらってこー！」

「了解、おねえちゃん」

もう向こうはハシゴなのか。速い。けど——なら、間違いなく走行型だ。

走行型を想定した模擬選ならば、何百度となく繰り返し返して。

「ええとね、頭になんか、王冠のつけてるから、的が縦に長くなってる。頭が狙いやすいと思う。手足を普通に、じゅんぐりハシゴを登ってるから、王冠から最初に見えてくるね」

「了解。練習どおりだね」

両足をとめ、左に九十度旋回させる。

右腕をゆっくり下ろし、角度を合わせる。この距離ならば、自由落下の一・二度分、高めに設定しなくちゃだ。

「あああつ！？ これは！ 可二高専ジゲンmk.1！ まさか、この距離からかっ！？」

「投擲体勢のようですね。高身長はこのためですか。いや——狙いは実に面白い」

「止めます！ 止まります！ 甲斐高専オペレーター、いったんディオニスをストップさせます。すでにディオニスは大きく先行していますから——ああ、いやっ！？」

「その通りです。投擲体勢のジゲンmk.1はすでにボールを一個手にしていますが、走るディオニスのボールは三個とも王冠に格納されたままです」

「両者がタッチダウンも、三発命中もとれないままに競技時間の五分を経過してしまったときは、勝利判定がくだされます。そのときに優先される勝利者は、『ボールを手に持った状態で、よりゴールの近くにいるロボット』。つまり、ジゲンmk.1だけがボールを持ったこの状態では、判定勝者はジゲンmk.1ということになります」

「しかも、ハシゴを掴んだままでは恐らく、王冠の中のボールを手に移すことはできないでしょう。ということは、走るディオニスの行動選択肢は二つです」

「と、おっしゃいますと？」

「ハシゴをそのまま登りきるか、ハシゴを下りてボールを手にするかです——つと！」

「強硬策！ 強硬策です！ さすがは全国常連甲斐高専！ 可二高専の挑戦を真正面から受けてたちますっ！」

「タクトっ！ 頭が出るよっ！」「見えた」

照準を調整し、機械的にスイッチする。

(ジュパッ！！)

「おっおっ……っ」

乾いた空気を引き裂くような音を響かせ、レールを滑り高速で投擲されたボールは高く、遠くへ白い弧を描く。

当たる！——反射的に湧き立とうとする心を抑えて、観測する。

調整をしたばかりの機体だ。精密な観測をしなきゃ、二発目、三発目にも——っ！？

「ヒット！　すごい！　ヒットしましたねえ」

「今——今のボール速度はすさまじかった！　審判の赤旗が三本！　命中です！！！」

『甲斐高専・走るディオニス。ペナルティストップ六十秒！　両チーム投擲禁止九十秒！』

「いや——これは——ものすごい精度ですよ」

「やったねタクト！　練習通りっ！　当てたら走ろうっ！」

「うん」

つていうかもう、走らせている。ペナルティストップで相手を止めてる六十秒にハシゴを登ることさえできれば、僕らの勝利は確定的だ。

(けど……)

今の弾道、練習よりも、わずかに右に逸れていた。

「タクト！　はしごだよ。気をつけてのぼろーね」「うんっ！」

いけない、今は走行に、障害踏破に集中しなきゃ！

「さあ、または右手を垂直に立て上げたまま、ジゲンmk1が……今はしごに取りつきました！　やはり、右手は上げたまま、ハシゴをこえるためにも使わないようですよ」

「あの速度と精度の投擲を支えるルールですからね。右腕に余計な負荷は一切かけたくないのでしょう」

「割り切っています！　ジゲンmk1、徹底的に投擲に全てをかけています。しかし、それだけに障害踏破は——ああ、やはり苦しんでいるように見えます！」

「左手とそれぞれの足の指でハシゴをホールドした上での二点保持・一点移動の繰り返しですね。これは力づくですね。時間もかかるし、相当に電力も喰いそうですよ」

障害物踏破は半自動。いったんハシゴに手をかけちゃえば、僕が操作で助けてあげられる部分はほとんどないから見守るだけになる。

……そうなってくると、今までは気にならなかった実況・解説が耳についてくる。

いや、大丈夫。気をちらすな。バッテリーはさつき新品に交換しただろ。

「タクト！　あと十秒で向こうのペナルティがあけるよ。シミュレーションままでいい？」

「了解。基本はシミュレーションままで。なにか、特別なことがあったらモニタして」

「わかった」

『甲斐高専、ペナルティストップ解除！　両チーム投擲禁止残り三十秒！』

「さあ！　ペナルティストップが解除されました。甲斐高専、走るディオニス！　猛然とまた駆けだした！　投擲禁止時間に出来るだけリードを広げる戦略のようですよ」

「ディオニスとしては、一刻も早く平均台・下り勾配を乗り越えて、低地に入りたいところでしょう。そうなれば、ジゲンmk1の高身長が仇になるかもしれません」

「それを目指しているのかどうか、ディオニス速い！ 今、スムーズに最初のカーブを抜け切ります！ 一方、ジゲンmk1は、ハシゴをまだ少し残しています」

『両チーム投擲禁止解除！』

「おねえちゃん、競技開始から今何秒？」

「え？ えとね——一三八、一三九、一四〇」「ありがとっ」

おかしい。練習だったら、一回の投擲を終わらせても、百三十秒までにはハシゴを登りきっていたのに——右手の指たちに加えた、たったあれだけの微調整が、他の部分にも何か影響しちゃってるんだろうか？

「タクトっ！？ 向こうがボールもったよっ！？」「えっ！？ うわっ！……！？」
いつの間にボールひとつをハンドに掴み、走るディオニスの体が——っ！？

「これは、ディオニス！ 首はそのまま胸の部分、上半身の一部だけが回転するっ！……！？」
「胴体を輪切りにして、胸・肩・腕のみの横回転ですね。なるほど、工夫した機構ですって！ つまりはそれって腕まわりだけのサイドスローだっ！……！？」

半自動で指示される動きのままに、ジゲンmk1はハシゴをまさに登り切る。

この瞬間を狙われる——走行型がこんな遠距離投擲するのは、全く想定していなかった。
「あたらねえよ！ ビビんなタクトっ！」「集中して！ タクトくん」「あわわわわっ！？」

ジゲンmk1の構造上、一度登ったハシゴを自力で下りることは不可能だ。なら、構わず走り始めるか、防御をするか、それともっ——！！！！！！！！

「投げたっ！ と、ジゲンmk1が静止っ！……！？ ——命中っ！……！！！！ いやっ！……！？」

『投擲無効！ 競技続行っ！……！』

「白旗です！ 白旗が三本！ ボールは有効に命中していません！ っと」

「左アームですね。塗料は、左アームに付着しています。アーム・ハンド・脚への命中は無効ですから、これは可二高専、田中タクト選手、ナイスジャッジです」

「なるほど！ 下手に歩けばアームが振れて、ボディ部がむき出しになっていたかもしれせん！ 逃げずにとどまり、田中選手、見事にジゲンmk1を守りぬきました！」

「あててきやがるとは、クソっ！ 甲斐高専の名はダテじゃねえか」

「タクト？ なんかチャンスっぽいかも！」「あ、ホントだ」

おねえちゃんの広い視界がとらえてくれる。

投擲を終えた走るディオニスは、なんだかギクシャクもたついている——回転を終えた胸周り部分がうまく元の位置に戻れてないみたいだ。

「狙う？」「もちろんっ」

ジゲンの右腕を水平に下げ、照準させれば自然と僕の呼吸も止まる。

甲斐高専、気づいたみたいで腕での防御を試みるけど——遅すぎる。

それに——頭がガラ空きだっ！

(ジユパッ!!)

「つと！ 間隙を突きジゲン m k・1 が再びの投擲っ——命中っ！……!!」

瞬間ほどけた集中にざわめき戻る音たちの中、アルミとどぐるさんとの声が聞こえる。

「よっしゃ！ うまいゼタクト！」「王手。このまま詰め切ってね、タクトくん」

『甲斐高専・走るディオニス。ペナルティストップ六十秒！ 両チーム投擲禁止九十秒！』

そうだ、これでもまだ勝利じゃない。

「さあ！ 投擲を終えたジゲンが走り始めます！ デイオニス、マシントラブルの隙をつかれたような形となりますが、これは名門・甲斐高専、どうしたというのでしょうか？」

「回転投擲は、見るからに負荷の高そうな機構です。恐らく、不具合を覚悟で最後の最後に決着をつけるための、切り札的なオプションだったと考えられます」

「その切り札をこの段階で早々に切ってきたのは何故でしょうか？」

「ジゲン m k・1 の恐るべき投擲能力を評価してのことでしょう。ここで挽回しなければ、当てられ負ける可能性が大と判断したのではないのでしょうかね」

「なるほど！ ということは、その切り札を見事に見切ったジゲンが現状有利ですね？」

「ディオニスとジゲンのスピード差がここまで極端でなければ、二発的中という時点で勝負は決していたと思います。が、ここまで足の違いがあると、ジゲンの勝利は三発目の中させなければ確定しないかもしれません。勝負はいまだ紙一重であるともいえますね」

さすが、解説の先生だ。まさしく、ご説ごもつとも。

「ここから先を詰め損なえば——今までの努力を全部、一気に無意味にしてしまう。」

「おねえちゃん、タイムはどうなる？」

「ええと……ペナルティストップがあけるのが二二〇秒。投擲禁止解除が二五〇秒つてことになるよ？ だから——」

「そこから残りは五〇秒。当てれば勝ちで、外せば負けだね」

シンプルでいい。

二発目も、弾道は一発目と同じ微細な右ズレ。なら、これを調整後の固有値とみよう。そうと決めれば、あとは迷わずっ！

「走る！ ひた走る！ ジゲン m k・1 は慎重な足取りで、しかしひたすらの走行を続けています！ 解説の西森先生。この狙いはどこにあるでしょう？」

「ジゲンの速度でタッチダウンゴールは無理です。ということは、勝つためには三発的中か判定勝ちしかありません。そうするために重要なのは、**優位なポジシヨンの確保**です」

「と、おっしゃいますと？」

「そこは駆け引きになります。相手がタッチダウンをあくまで狙ってくるなら、第一コーナーをまがり終えてすぐ。第二直線上で待ち伏せするのが最も効果的でしょう」

「なるほど、そこならゴールに向かってくるディオニスを迎え撃つ形になりますね」

「しかしディオニス側は、先行できているのなら、無理にゴールを目指す必要はない。

投擲禁止の安全時間に平均台を渡り切り、距離を保って防御を固める作戦もありえます」

「なるほど！ それを防ぐためには、ジゲンmk,1も出来るだけゴールに近づいておいた方が有利となるわけですね」

「そうです、さて、ジゲンの選択は——つと、第一コーナーをまがりきっても、まだ走行を続けていますね。平均台にも挑むようです」

「あつと、二度目のペナルティストップ中のディオニスを今——抜いた！ 今度はジゲンが先行しました。これは面白くなってきた！」

「ペナルティストップあけまで二〇、投擲禁止あけまで五〇だよ！」

「了解」

いい感じだ！ 次の投擲が可能になるまでには、この平均台をっ——

「さあ、いよいよジゲンmk,1は平均台に——つと、体をまた横向きにして——これは、カニ歩きでクリアを試みるようですよ！」

「なるほど、ハシゴを越えるために使った脚部の指でのホールド機構を、カニ歩きさせることにより、平均台でも活用させるわけですね。さすがは可二高専」

「これは——案外早い！ かなりスムーズに平均台を渡っているぞっ！」

『甲斐高専へナルティストップ解除！ 投擲禁止、残り二十秒！』

「甲斐高専長谷川選手、解除宣言と同時にコントローラーを掴み直します！」

「ペナルティストップの間に、チーム間でかなりの議論を交わしていたようですが、さて」

「つとお！ これは逆回転っ！ 投げたモーションの勢いそのまま！ 胴体上部、胸まわりが猛スピードの逆回転ですっ——！」

「本来の復帰機構をあきらめましたか。これはかなり機体に負担がかかりそうですが——」

「しかし！ 戻った！ 戻したっ！！ 甲斐高専走るディオニス、ズレていた胸を元のポジションに復帰させ——つと、走らない！ まだ走らずに王冠からボールを一個——二個——両ハンドにひとつづつ、手にもった状態にして——さあ！ 駆けだしたっ！！！」

「さっき一つ投擲したことにより、王冠内部での三点保持による安定が消えたこと、そして判定、あわよくば投擲も考えての行動でしょう」

「速い！ 速い速い！ デイオニス速いっ！ あつという間に平均台にたどりつき——」

「これは——」

「追いつかれるよ！ ってか、抜かれちゃうっ！！？」

「大丈夫。把握してる」

投擲禁止の解除まで残り十一。

平均台を抜けたところで足を止め、上げてた右腕を水平に戻す。

「ジゲン止まった！ 投擲姿勢だ！ デイオニス！ そのままコーナーへ向けて走る！」

失っています。このまま判定になってしまえば——」

〈ブーーーーー————〉

『試合終了！ 両者ともに確定勝利なし。判定っ』

ブザーが響き、審判の声が会場を震わせる。

『赤、甲斐高専Aチーム。走るディオニス、ハンドにボールを保持。白、可二高専Bチーム。ジゲンmk1、ハンドにボールの保持なし。よって、規定に従い、赤、甲斐高専Aチーム。走るディオニス』を勝者とみとめるっ！』

わああああああああああつと、歓声。

響く。僕の胸に、空っぽになってしまった頭に、うわんうわんとうなって響く。

ってか、僕——どうして——勝てた試合だったのにつ——

「タクト」「ー」

おねえちゃんの声。優しい声。

「タクト。勝負はついちゃったけど、試合はまだ終わってないよ？」

「え？」

意味が僕にはよくわからない。勝負がついて試合がまだって……

「握手。負けた方から求めにいくんだよ？ それが、スポーツの、当然のマナーなの」

「マナー、そうか、そうなんだ」

したくない、そんなこと。

負けを自分から認めるなんて、情けなくって、イヤで、辛くてっ。

「おっと！？ これは、可二高専、田中選手が甲斐高専の長谷川選手に歩み寄っていくぞ？」

けど、きつと。つらいからこそしなくちゃいけない。

おねえちゃんが教えてくれることなら、絶対、ちゃんと理由があるんだ。

「抗議、といった雰囲気でもないですね。甲斐高専もとまどった様子ですが」

ああ、そうだ。屈辱を舐め、敗北を認めることおこそ、僕の果たすべき責任なんだ。

これだけの機体を預かり、作戦どおりに試合を進め、けれど最後——注意してれば、きつと読み切れた相手の罠にむぎむぎハマった、間抜けな僕に唯一果たせる。

「ええと、あの？ 何か用、かな？」

いつの間に、相手操縦者が目の前にいる。

眼鏡をかけて、青白く、とても小柄でとても細身の少年だ。

こんなに華奢で——だけれど、彼は僕を負かした。

「タクト？」

ああ、そうだ。握手だ、僕は——勝者と握手をするため、きたんだ。

「負けました」

右手を差し出す。僕の効き腕を相手に預ける。無防備に。

内心、物凄い抵抗があるけれど――

「あ、ええと――ありがとう。ありがとう。いい勝負でした」
受け取る。僕の手を、がりがりにやせた力ない手が。

「あの、ホント、ボクラ、負けたと思って、もう、必死で、手のうち全部使っちゃって」
「えっ」

けど、暖かい。っていうか、熱い。

こんなにやせてる手なのに、弱い握力なのに――何かを強く、伝えてきてる。

「これボクラ、ホント二回戦ヤバイかもだけど、ここまで苦戦とか予想外だけど、でも」
笑う。相手の操縦者が。見下してでも、勝ち誇ってでもなく――楽しげに。

「楽しかった。最高の勝負だった。ほんと、ありがとう」

「いえ――ええと、こちらこそ」

僕も、笑う。笑ってる、笑えてる。負けたのに、負けちゃつのに、負け惜しみでも自嘲でもなく――おねえちゃんと話をしているときと同じに、心の底から笑みが出てくる。

ああ、うん、そうだ。僕も、なんだ。

「楽しかったです。負けたのに悔しいのに、でも、楽しかったです、本当に。だから、こちらこそありがとうございました」

頭が下がる。自然と、僕は一礼してる。

わあっ！ と、とたん、会場が大きくどよめく！

「これは！ すがすがしい！ なんとすがすがしい光景でしょうっ！」

「素晴らしい。まさにアイデアマンシップに溢れた行動ですね。この名勝負をしめくくるのにふさわしい堂々たる行動です」

「は、はは、なんだろね、盛り上がってるよ。すごいね、ボクラ、スターみたいだ」

「ですね」

ぎゅっと、握手に力がこめられて。そうして、甲斐高専の操縦者の手は僕から離れる。

「きっと、取れるよ、キミら、審査員推薦。そしたらさ、全国で、また戦おう」

「え？」

「そのときはさ、ボクラ。タッチダウンして、勝って見せるから」

「えと、そのっ」

『可二高専田中タクト選手！ チームに戻って！』

「え！？ あ、はいっ！」

審判の声にうながされ、気づく。

とぐるさんと、アルミと、おねえちゃんももう脚立をおりて、帽子とサングラスはまだそのままで整列してる。ミケはさすがに並んでないけど、僕も並ばなくっちゃだ。

「乙、タクト」「おつかれさま、タクト君」「かっこよかったよ！ タクト」

整列したまま、みんなの声はどこか嬉しげで、悔しげで。

『一回戦第二試合終了！ 勝者は甲斐高専Aチーム “走れディオニス”。両チーム、お疲れ様でした』

「「「「「ありがとうございます」」」」」

鳴り響く拍手、拍手、拍手、拍手！

「ナイスラン！ ナイスアイディア！ 甲斐高専っ！！」

「可二高専も良くやったぞー！ ウチならイチコロで負けてたぞっ！」

ああ、この拍手——負けた僕らにも向けてもらえてるんだ。

照れくさくって、でも嬉しくて。自然、もう一度深くお辞儀をしてて。

「さて、撤収ね。次の試合がすぐ始まるわ」

さばさばとしたとぐるさんの一声に、すぐさまアルミが動き始める。

「タクト、ジゲン回収すっから手伝って」

「あ、うん」

戦いを終えたジゲンmk.1は、右手を下げた投擲姿勢のまま静止している。

僕、最後のとき走行姿勢に戻すことさえ忘れてたんだ。

多分、十秒たらずとはいえ……よく、これでジゲン転ばずに走ってくれた。

「ジゲンもお疲れさま。ごめんね？ 勝たせてあげられなくて」

「ゼンコクデ カタセテクレリヤ カマワネエゼ」「……!?!?」

裏返ったようなへんな声！ ってか!?!?」

「ジゲン……きみ、喋れるの？」

「ンナワツキヤネエダロ。アタシだよ、アタシ」って、アルミなの？」

驚いて顔を見つめれば、アルミは無言でニヤリと笑い、口を閉じたまま——

「フクワジュツツテ エンカイゲイサ」

——さっきのジゲンと同じ声が、今度はアルミの膝から響く。

なるほど、出した声を、別の場所から響かせる——引っ掛ける技術なのか。

「すごいねそれ。フック話術って、魔法みたいだ」

「何してるの？ 早く片付けないと迷惑よ」

静かな声。けど、眼鏡の下の眼が怒ってる。

「いけねっ！ タクト」「うんっ！ セーのっ！」

急いで、けれども傷つけないよう注意しながらジゲンをフィールドから下ろす。

「ブースまで運ぶぜ。死んでも落とすなよ」

「アルミ、大丈夫？ 僕ひとりで持てるよ？」

「メカニクなめんなよ。任せきるのは競技の時だけだっって」

他の片づけは、おねえちゃんにとぐるさんがやってくれてる。

アルミとふたり、ゆっくりと呼吸をあわせ。「可二高専Bチーム」の場所まで戻ってくる。
「さあ、次なるは第一回戦第三試合！ 東京が誇る頭脳集団！ 曲面館高専Aチームの
“PASCAL”の登場です！」

「実に美しいアールを持った機体ですね。ハンドが非常に大きく設計されていますが、これにはどういった狙いがあるのでしょうか？ 楽しみです」

「かたや、神奈川は横浜から参戦は中華の伝統を豊かに受け継ぐ大陸派チーム！ 漢候碑高専の、“AQ”です！ 随分と長細くひらぺったい、低重心の機体ですね」

「ボディには最低容積規定がありますからね。低さを確保するために、このような、面の大きさを持つ設計としてきたのでしょうか？ 走行性能がどうなのか？ カーブをどうやってクリアするのか？ これもまた非常に興味深い」

……フィールド上には新しい機体たち。僕らの試合は、あつという間に過去になつてる。

「負け、たんだよね……一回戦負けだもんなあ」

ブースに腰を落ち着け一息ついてしまえば……その実感だけが湧きあがってくる。

いや、湧きあがるといっても、興奮してた部分が冷めて……その後に、ずっしり重く残ってしまったような感じだ。

「つてかさ、アルミ——ごめん。ジゲンを負けさせちゃて」

「あん？ 別にタクトはミスしてねーべ」

「というか、誰ひとりとしてミスはしてない。これは、そういう敗戦ね」

「うんうん。そうだよね、いい試合だった！」

いいタイミングで、おねえちゃんとかぐるさんとも戻ってきてくれた。

こういう話は、一気にすませちゃいたいし。

「そう言ってもらえるのは嬉しいけれど——デモンストレーションの件は、結果オーライだったって理解もしたけど。でも、最後の最後のアレは、僕のミスだから」

「最後のアレ？ デイオニスの首がカクンて折れた回避のことか？」

「そうそれ。あれは——あの王冠は、今考えればどう見ても畏だった。もし、僕がもう少し慎重だったら。ガードの隙からボディを狙っても勝てたのに」

「どう見ても、なら……それがわからなかったマーシヤ達も同じミスしちやつてない？」

「っ！……？」

きょとんと、おねえちゃんに切り返されて——絶句する。

「だぜ。どう見てもなんてこたなかったから、アタシたちみんなが、つてか、会場中がハメられたんだろ？」

「そうね。あの状況で一番当てやすい頭部を狙いにいかないとは、むしろチーム全体をリスクにさらす判断でつと私は思う」

「それになあ。そんなくらい無理やりな後悔だったらアタシにだって出来ちゃうぜ？」

へラっと笑って肩をすくめて——そして、アルミが口惜しそうに床を蹴る。

「やってくんだよ！ 奴らは！ 甲斐高専の電子工学部の連中はっ！ 去年もギミックしこんでやがったのに—— 知っててジゲンをムザムザ道化にさせちまった！」

「いや、それはっ——」

「な？ こんなは無意味なタラレバだっかわかったら？」

へラリと、もう一度浮かべた笑みは、けど、最初ほど上手じゃない。

消し去りきれない悔しさが、口の端にまだ残ってる。

「私たちは、最善と思われる準備をし、それぞれがそれぞれの務めを果たし、ミスなく、むしろ練習よりも良いパフォーマンスを示した上で、負けたのよ」

外したメガネを丁寧に拭き、とぐるさんは慣れた手つきでかけ直す。

「つまり、ただ単に完敗したの。一番、認めたくないことだけれど」

きっぱりと示してもらえた敗北に、ああ——そうなのかと、ようやく僕も理解する。

「認めたくないから……僕……理由を、それらしい言い訳を探しちゃったのかも」

「誰でもやるぜ？ アタシもやる、とぐるさんは、おおよそアタシの百倍はやる」

アルミの言葉に、コホン、と一つ咳払い。

赤面をしたとぐるさんは、反論しない——というか、出来ないようにしか見えない。

「けどさ？ それやってたら、進めねえのさ。『次は予知してボディを狙う』なんてなあ、解決策でもなんでもねえだろ？ タワゴトよ」

「だから、認めた上で考えなくては——いえ、一緒に、考えていって欲しいの。全国大会に向け、改善するべき点があるかを」「全国大会！？」

おねえちゃんとのユニゾンが、とぐるさんの言葉をさえぎってしまふ。

目と目を見合わせ——うん、とおねえちゃんが僕の疑問もたずねてくれる。

「全国大会って……だって、一回戦で負けちゃったでしょう？」

「あれ？ 説明してねえのとぐるさん」

肩をすくめての問いかけに、とぐるさんは照れくさそうにボソボソ答える

「だって……そんな説明……負けを前提にしてるみたいで」

「ああ！ なるほどね、違いねえや！」

カラリと笑い、んじやアタシがとぐるが話を引き継いで。

「高専ロボコンで全国大会に進出できるチームは、各地方大会ごとに、三〜四チームずつあるんだわ。関東甲信越だと四枠な。んで、まず一つが地方大会優勝チーム。これは絶対」

「うん。当然のことだよ」

「で、他の三枠は、審査員推薦ってことになる」「審査員推薦！？」

「ああ。準優勝のチームと、各部門賞……アイディア賞、技術賞、デザイン賞の受賞チームの中から選ばれるってのが、ほとんどだぜ」

「ずいぶん……審査員推薦の枠数がおおいんだね。準優勝とか、普通だったら全国大会に確定出場じゃないの？」

たずねれば、アルミは肩をすくめて笑う。

「まあな。準優勝チームが推薦されないことはほとんどないけど——ほら、そこそこは主権が主権だからよ。TV映えないチームは苦しいな」

「てれびっ！」

思い出したように、おねえちゃんが帽子を目深にかぶり直す。

「だ、大丈夫だったかな？ マーシャ、さっきの試合、目立っちゃわなかったかな？」

「ああ……おねえちゃんも、熱くなってたもんね」

「そ、そうかな？ マーシャ、声大きかった？」

「そこそこは向こうさん次第だかんなあ。まあ、二週間もすりゃ放送される。そんなとき見てみりゃわかるだろ」

簡単に言い、アルミはぼんっとおねえちゃんの帽子を叩く。

「つてかさ、気にしすぎんなよ。TV番組なんて山ほどあるんだ。借金とりがわざわざロボコンの、しかも地方予選とか……あんま見ないような気がするぜ？」

「うん……そう、かな。マーシャも、言われてみたらそう思うけど」

「けれど、そういう事情なら……全国大会のときには、マーシャさんをもう少し目立たないようする工夫が何か、必要になるかもしれないわね」

とぐるさんが漏らす呟きに、ホっとする。

とぐるさんなら、効果的でしかもヘンじゃない対策を、きつと考えてくれるはずだ。

「けど……推薦ってそれなら、三枠を四チームでわけあうんでしょ？」

安心したのか、まだ不安なのか——おねえちゃんは微妙な表情だ。

「それに、技術賞とかデザイン賞とか？ そういうのに、選ばれるとも限らないでしょ？」

「そうね、選ばれる確証はないわ」

とぐるさんの静かな声は、けれど自信に満ち満ちている。

「けれど、アルミが説明したように、この大会はあくまで“TV局主権”のものだから。番組を盛り上げる——つまり、観客へのインパクトのある機体が、例年選出されている」

ああ、と不意に思い出す。僕に勝った甲斐高専の……あのやせっぽっちの操縦者。

彼もなんか、そんなようなことを確かに言っていた。

「さっきの会場の反応を見る限り、私たちの受賞の可能性は少くないのではないかと思う。だから、取れると前提で準備をしたいの」

とぐるさんは一瞬言葉を止めて、じっと、おねえちゃんを、僕を見る。

「それに……例え推薦を取れないことになってしまっても。今回の反省点や改善点を全員で洗いだしていく作業はきつと——次につながると思うから」

「そっか！ うん、それはそーだね！ マーシャ、賛成っ！」
ようやく、おねえちゃんに笑顔が戻る。

「僕も賛成。練習時より少し右ズレしてるのが、安定してるのかどうか試験したいし」

「あ！ やっぱり！！？ 一発目、親指の挙動怪しかったろ」

「そうなの？ 僕はそこは気づかなかったけど、ボールは全部右ズレしてた」

「あー、ちょっと待って。アルミ」

自然発生しかけた反省会を堰き止めて。とぐるさんはとぐるさんらしく手順にこだわる。

「アルミも？ 基本方針に賛成とみなして構わないのかしら？」

問われたアルミも、実にアルミらしくニヤリと笑って肩をすくめる。

「とぐるさんの提案だぜ？ なら、そいつをカタチにするのがアタシの仕事だろ？」

※ ※ ※

「審査員推薦二チームめは、技術賞を獲得した可二高専Bチーム “ジゲンmk1”です。
おめでとう。全国大会でも頑張ってください」

「はい。あひがとうございます」

「あひやひやひやひや！ とぐるさん『あひがとう』って何——痛っ！？」

スペインと、小気味の良い音がする。スリッパでアルミの頭をはいたんだらう。

けど——今この部屋のとぐるさんも、TVの中のとぐるさんも、まるで何事もなかった
ような、シレっとすました顔をしている。

「まあ、例年通りの番組作りだったわね」

言って、とぐるさんがエンディングの流れ始めたTVを消す。

「ジゲン、格好良く撮ってもらえたのはよかったなにさ、あの、何？ ウルトラハイスピ
ードカメラっていうの？ あの映像、すげえ参考になるよ」

アルミは、デッキから録画ディスクを取り出している。

マジックで、『RUN&Throw 関東甲信越予選』。多分、何度も見返すのだろう。

「マーシャ、ほんとうつってなかった」

それはつまりは、借金取りに見つかってしまう可能性をさらに減らせたということだ。
嬉しいことのはずなのに、おねえちゃんは微妙にふくれている。

「それに、帽子とサングラス、ヘン！ 全然おしゃれでもかわいくもなかった！」

スマイレ色の眼が、ミケへと鋭く注がれる。

「んにゃあん」

その視線から逃れるように、本棚の上、ミケはゴロリと寝返りをして背を向ける。

……そうか、ミケ。かわいいって言っておねえちゃんにあの恰好をさせたのか。

っていうかミケひよつとして——おねえちゃんに、わざとヘンな格好をさせることで、TVカメラが写しづらいよう仕向けていたのかもしれない。

「どう？ 番組を見て新しく気づいた点はある？」

とぐるさんの言葉によって、みんなの視線が僕に集まる。

「いえ。もう反省会で出てる点の再確認しかできませんでした。その目的では、とてもよい資料になったと、僕も感じます」

「あんときや洗いに洗ったからな。まあ、タクトの眼でも新しいボロが出なかったんなら——今の方針で間違いねえだろ！」

「うんっ！」「そうね」

頷いて、さて、ととぐるさんが立ち上がる。

「明日は忙しくなりそうだから、そろそろ休ませてもらうわ。ふたりも、放課後はすぐに部室にきてもらえると嬉しいわ。そうしないと、多分、面倒が広がるし」

「めんどう？ って？」

おねえちゃんが傾げた小首に、とぐるさんは、ほんの少しの苦笑い。

「杞憂に終わればいいのだけれど。……いずれにしても、明日になればわかることよ」

「ふうん？ ええと、めんどうな日にならなかったら、どうするの？」

「もちろん普通に部活。一日も無駄には出来ないもの」

「わかった！ なら、授業終わったらタクトと一緒にすぐに部室に行くようにする。ね？」
うなづく。なんの異論があるはずもない。

アルミが大きくアクビして、よいしょと腰をもちあげる。

「んじゃ、あたしも部屋にもどって寝てくるわ。放課後すぐに部室も、りょーかい」

「ええ、そうしてちょうだい」

「ミケっ、おいで！」

おねえちゃんの声。ミケが飛んできて腕におさまる。

帰る先なら向かいの部屋で、それでも律義に、とぐるさんは廊下まで送ってくれる。

「それじゃあ、また明日。おやすみなさい」

「はい、おやすみなさい」

「おやすみとぐるちゃん、おやすみアルミちゃん。またあしたっ！」

—— 可和越第二高専・人型機械工作部・高専ロボコン関東甲信越大会にて見事技術賞を

受賞！ 全国大会出場、おめでとう！——

黒板の上に貼りだしてある布看板にも、さすがに最近では照れなくなった。

けど……昨夜のTVのせいなのか、今日はなんだか、また妙に注目されてる気がする。

「ねえねえタクト？ 今日、みんななんかヘンだよね？」

授業中なのにヒソヒソと、おねえちゃんが話しかけてきてくれる。

僕とおんなじ、一年生として編入してくれたおねえちゃんは、同じクラスで隣の席で。

授業中にも休み時間も、いつも一緒にいてくれる。

「だよね。予選の次の日と……なんか、感じが違うよね？」

おねえちゃんは、もちろんクラスでも人気者で。

技術賞を取り、全国大会出場を決めた次の日なんて、おめでとう・ありがとうのやりと

りだけで、一日つぶれたみたいなきな感じだったんだけど……今日のは、ずいぶん空気が違う。

「みんな話しかけてこないし——なんか、遠巻きな感じだよね、

「シニヤア」

窓枠にねそべっているミケもさりげなく同意する。

実際今も、みんなが僕らをチラチラ——ああほら、確かに見てる。

「なんでだろ？ なんか、気になっちゃうよね」

「だね。けどおねえちゃん、いまは授業中だから」

「あーうん。タクトはまじめだねえ」

だって、勉強は面白い。

製図台を実際自分が使ってみると、とぐるさんの製図の速さと美しさとがバケモノじみたレベルにあるって実感できる。

工場設備でたまたま3年の実習と一緒になったとき、アルミがメイド服じゃなく、木綿の地味な作業着を着ていたことにも驚いた。『本職顔負けの人がいる』って、その素晴らしい手際での溶接に同級生たちが騒がなければ、アルミだなんて気付けなかった。

それに、実習系だけじゃなく——同級生は、イマイチ気のりしないみたいなんだけれども——一般教養。いまみたいな、英語の授業とかも、とても興味深い。

同じ人間の言葉なのに、どうしてこうもたくさんの違いがあるんだろう？

ってか……僕は半分ロシア人のはずなのに、ロシア語、全部忘れちゃってるみたいだ。

そくだ、そのうち少しづつでもおねえちゃんに聞いて——

〈キーンコンカーンコン〉

「おや、もう時間ですか。それでは、今日の授業はここまで」

「きりーっ、れい」

ああしまった。最後の方、考え事して聞きそびれちゃった。

ええと、坂戸くんは……ああ、帰り支度だ。とても真面目な坂戸くんなら、一般教養も

ちやあんと授業を受けているから、彼のノートを見せて貰えば――

「タクトっ、部室行こっ？ 今日には面倒がどうのこうのって、とぐるちゃん言ってたし」

「あ、そっだよ。そっだった」

とぐるさんに念押されている以上、ささいな遅刻をするのも怖い。

坂戸くんには、明日ノートを見せて貰おう。

「早く早く！ ミケ、先にいっちゃったよ？」

窓枠からは、確かにミケの姿が消えてる。

おねえちゃんに手を引かれ、僕らも急いで部室へ向かう。

「うわっ！！？」

部室の前、廊下のとこに、なんだか人ばかりがしてる。

「とぐるちゃんが言ってた……めんどーなことって、これ？」

「かも――だけど……でもまあ、行かなきゃ遅刻しちゃうし」

「あ、おいっ！」「うんっ！」

廊下が集まった人たちの眼が、ざわめきとともに僕らへと向く。

おねえちゃんがちよつと不安げに、僕のシャツの裾をつかまえる。

「うわっ！？ まじちっちゃいな」「ウチの一年にこんな子いたんだ」

僕ら、ではなく、ほとんどがおねえちゃんを見てる感じだ。

なんとなく、庇うようにして――人ごみを抜け、部室に入って扉を閉じてっ！

「あー、なに今の！？ ヘンなの！ ちよつと怖かった！」

「ああ、やっと来た」「なつちやったわね。思ってたより妙な騒ぎに」

部室の中には、とぐるさんとアルミとの顔。

ミケも、恐らくは窓経由で、定位置の棚の上へとおさまっている。

「これ、やっぱり昨日のTVの影響ですか？」

「でしょうね。毎年、ロボコンの放送があったあとは、入部希望者が殺到するのよ」

うんざりしたようにとぐるさんが肩をすくめる。ケっと、アルミは吐き捨てる。

「下心たくさんの連中が、てんこ盛りでなー」

「した」ころ？」

「とぐるさんは美人だかな。ロボット作りよりロボコンよりも、とぐるさんと仲良くな

ってキヤッキヤウフとか、そんな目的の連中のこと」

「キヤッキヤウフ」

……意味はイマイチわからないけど、とぐるさんから一番遠い言葉を聞いた気がする。

「でも、女の子も何人かいたよね？ 廊下の人たちのなかに」

「ええ。アルミがいったような連中がほとんどだとは思っただけど、中には、そうじゃな

い――今回の番組をきっかけに、ロボット作りに、ロボコンに、真剣な興味を持ってくれ

た人も、いるかもしれない」

眼鏡のフチが、グイっと、力強く持ち上げられる。

「だから早く来てもらったの。新入部員をテストする方法を考えてもらいたいと思って」「テストって」「マーシャたちも考えるの？ その方法を？」「ええ、アルミ？」

「そんな難しく考えるこたねえや。最終的には、とぐるさんが面接をして決めるしな。から、今いるヤツらをザラと奮いにかける、その方法だけ考えてくれりゃあいい」

言って、アルミはホワイトボードに図を書き始める。

「まず、この新入部員候補の山を、自己申告させて四つに分ける。つまり、設計希望、メカニック希望、ドライバー希望、オペレーター希望の四種別にだ」

「ああ——そっか、それで僕らも」

「そのとおり。自分の担当分野に一番必要なことが何かを考えて、それを見いだすテスト方法を提案してほしいの。実施については、私とアルミとで行うわ」

「でもでも、マーシャのお仕事って、タクトに見えてないかもなとこを、タクトに教えてあげるだけだよ？」

「それを、一般論として考えましょう？ たとえば、タクトくんが怪我をして、代理のドライバーが入ってきたとき」

「え？ ええっと……タクトじゃない人なら……マーシャ、その人が何を見てるのかわからなくなっちゃうと思う」

「なら、大事なのは観察力と想像力か？ ドライバーの注意がどこにいつているのかを観察して、足りないところを想像して——ああ、コミュニケーション能力も重要か」

アルミの言葉に、とぐるさんがフっと、とても寂しい息を吐く。

「私は……全く適正がなかったのね。ドライバーがどこを見ているかなんて、一秒も気にしたことがなかったわ」

「だからさ、その適正を持つ奴を、どうやって見つければいいのかってのを考えようぜ？」「え？ うーんと……どんなのがあるかなあ」

アルミは大人だ。とぐるさんの自嘲を上手く流しつつ、おねえちゃんにテスト問題をうまいこと考えさせている。

「タクト君もよ？ 出来る限りは、今日、入部希望者に配置希望を提出させて、明日にはテストを実施したいの。全国大会まで、三日もロスはしたくないから」

「あ、わかりました。頑張つて考えます」
もう切り替えてるとぐるさんに促され、一生懸命考える。

……僕が、一番ほめてもらえてるのは“目”だから、やっぱり、目。距離感とかそういうのをパッと掴む能力が大事なんだろう。

それから、きつと冷静さ。おねえちゃんが、あれだけ熱くなるなって、勝ち負けにこだ

わりすぎるなって注意してくれなくちゃ——もっと早くに、僕はミスしちゃってたんじゃないかって正直思う。実際、最後の投擲の後、右腕を投擲体勢のまま走らせたことで、短時間とはいえ、機体をめっちゃ大きな危険にさらしちゃったし。

それから……指先の器用さとかは、アルミがコントローラーで調整してくれるし……他に重要な要素といえば……ああ、そうだ。違和感に瞬時に気付く能力——つまり、直観力、野生の勘、みたいな部分だ。僕にはそれは欠けてるみたいで。それが敗因に直結しちゃった気は、今でもやっぱり……どうしても拭いきれてない。

「とぐるさん、質問いいですか？」

「もちろんよ、何？」

「僕、ドライバーに大切なのは、距離を掴む能力、常に冷静でいる能力、そして、野生の勘的な直観力だと考えました」

「そう。タクト君がそういうなら、間違いないわ。その方向でテスト問題を考えてみて？」

「っていうか、思いついたんで試したくて。製図台、使わせてもらってもいいですか？」

「あら、楽しみね。もちろん、使って構わないわよ？」

「じゃ、お借りします」

引くのは基本、直線を何本かだけだけど、厳密な長さが必要だから、誤差が出ちゃうプリントよりも、製図台できっちりじゃなきゃ話にならない。

……慎重に、慎重に——精度限界までを突きつめ——うん、これなら問題ないだろう。

「出来たの？ 私で試してみる？」

「いいんですか？ じゃ、お願いします」

線の引かれた紙たちを順番に重ねあわせて——とぐるさんに座ってもらった正面に置く。

「これから、十枚の紙を見せます。全ての紙には、A、B、二本の線が引かれています」

言いながら、一枚めをあっけなく見せてしまう。

AとBとの長さの差は実に五センチ。誰が見たって、Aの方が長い。

「次の一枚以降。とぐるさんは、紙を見せられてから五秒以内に、A、B、どちらの方が長いかを口頭で答えてください。正解でも不正解でも、次の一枚に進みます」

「質問、いいかしら？」

とぐるさんが、どこか楽しみに挙手をする。

「どうぞ」「答えられないまま、五秒が経過してしまっただら？」

「そのときは、そこでテスト終了です。速度が最優先事項だと理解してください」

言って、自分でようやく気付く。ドライバーにとって何よりも大事なのももちろん、判断と決定の速さであるに決まってる。偶然だけこのテストは、それも判定してくれる。

「把握したわ。いつ、初めてくれても大丈夫」

「それじゃあ、スタートします」

とぐるさんの前に二枚目を「A」早い、けど、三センチ差あるから当然だ。

「次を」「A」「次を」「B」「次を」「B」「次を」「A」

早い、目と口とが直結してるみたいだ。

長さの差は三ミリ、七ミリ、一ミリ、二ミリとランダムに入れ替えつつ短くしてはいつてるんだけど、とぐるさんの眼は誤魔化されない。

「次を」「A」「次を」「………同じね」「次を」「A」

——九枚目までオールクリアー。長さの差はもう〇・二ミリ。普通のノギスの計測誤差の限界だ。八枚めに仕掛けた“同じ長さ”のトラップも難なくクリアーされてしまった。

「次」「っ！」

半瞬、とぐるさんが硬直する。

今まで見せてた、ただの直線二本ではなく、その両端に閉じたカッコと開いたカッコがくつついた——目の錯覚のテストに出てくる二本の線を並べてるから。

「同——いやっ Aが長いわ」「わかりました、終了です」

言って、無言で十枚目の線の横を指さす。

「あっ!?!」

とぐるさんが今度こそ絶句してしまう。

今まで九枚、全てA・Bの順だった、線の脇に振ってある文字を、十枚目だけはB・Aの順に入れ替えてある。

僕が甲斐高専のドライバーにしてやられたのと同じに二枚目の切り札を仕込んだのだ。

「………参ったわね。この最後のA・Bに気付かないと、不合格なわけね？」

「の、つもりです。最後の一枚。ろくろくに観察せずに“目の錯覚クイズ”だって早合点すれば、同じ長さって答えます。上の線の方が実は一センチ以上長いから、そこをきちんと見抜ければ、普通はAって答えるでしょう。その最後のトラップを回避して、もしも『B』って答えることができるなら——〇・二ミリ誤差とかをもしも観測しそこなつても、その人は、僕よりずっとロボコンのドライバー適正が高いと思います」

「最後の一点以外は、同意だわ」

とぐるさんは、小さく笑って僕を見る。

「こんな問題を一瞬で考えついちゃうんですもの。タクト君のドライバー適正は、多分、タクト君の自己評価よりずっと上だわ」

「そう………でしょうか」

「ええ、成長してるもの。地方予選のときより、ずうっと」

………とぐるさんに言ってもらえると、なんだか素直に信じてしまう。

そうか僕——あのときより、少しは成長できているんだ。

「このテストを採用させてもらおうわね。試験官も、もしよければやってみる?」

「え！？ いや、それはとぐるさんの方が向いていると思いますし」

「でしょうね？ 私もそう思う」

クスリと笑って、とぐるさんはすぐその笑みを消す。

「ああ、そう。念のためなんだけど。最後の、A、Bの部分を指さすのは、相手の反応を確認するため——よね？」

「ですね。Aって答えて、しかもとぐるさんみたいな反応があればひっかかってますし——見抜いていたなら、そういう反応をしてくれるだろうとも思いますし」

「把握したわ。問題なくやれると思う」

「うん！ これならよさそうだよねっ！？」

「ああ、イケてるよなっ！？ ってかさ、とぐるさんで試してみようぜ！？」

満面の笑みを浮かべて、おねえちゃんにとぐるさんと近づいてくる。

「あ？ タクトも問題考えたの？ おねえちゃん、解いてみてもいい？」

「もちろん。あとでアルミにも頼むよ」

「お！ ずいぶん自信ありげじゃねえか。ならよ、こっちのもチャレンジしてみ？」

「わかった。やってみる」

「っていうか……僕の考えたこの問題。」

もし、おねえちゃんも、アルミもクリアーできなかつたら……入部希望者、全滅させちゃうんじゃないだろうか？

「いたの？ アタシが考えたテストクリアーした奴っ」

「マーシヤのも？ むつかしいって思ったんだけど」

おねえちゃんたちが目を丸くしてる。

「っていうか、僕も驚きだ。」

僕が考えた問題が、おねえちゃんにとぐるさんとアルミを全滅させたのと同様。

アルミの問題もおねえちゃんの問題も、僕らを綺麗に全滅させたし——とぐるさんの出した問題にいたっては、僕レベルでは、理解することも出来なかったというのに……

「本当にいたんですか？ 合格者が」

「ええ、各分野に綺麗に一名ずつ。男子が二名、女子が二名」

「男子！？ 男もいれんのか！？」

「テストだけじゃなく、私の面接にも合格した人材よ？ ロボットを作りたい、動かしたいっていう、純粋な情熱を持っている子たちよ」

とぐるさんの静かな言葉に、アルミの不満顔が押し殺される。

「まあ……タクトだって男だしな。ヘンなヤツじゃなきゃ、いいさ」

ヘンなヤツという言葉に、急に胸がムカムカしだす。

あの日以来、おねえちゃんのまわりをうろちよろする学生が、ときどき目につくようになった。僕かミケかが常に一緒にいるからいいけど——なんか、どうにも気触りだ。

「実際に話してみればわかるわよ」

「どんなコたちかな？ 楽しみだね！ タクト」

おねえちゃんの声は嬉しげで、イヤな気分を払ってくれる。

そうだ、ヘンなヤツより、良い人の方がたくさんなんだ。

それに、とぐるさんが面接したなら、それほど安心なこともない。

「待たせてしまったわね。入って来て頂戴」

「はい、失礼します」「……」

とぐるさんの呼びかけに、とぐるさんそっくりな声が返事する。

ドアが開かれ——入ってきたのも、とぐるさんそっくりな——けど、すごく控えめな服装と髪型の女の子だ。

確か、これ……ああ、そうだ。三つ編みっていう髪型だ。

「設計志望。開閉器ちると、一年です。よろしくお願いいたします」

「なんだよ、ちるとか。ちるとなら目えつぶって逆立ちしても合格するわな」

「ペこり、頭を下げた三つ編みの子に、親しげにアルミが声をかける。

「でも、お前——ロボコン部入ったんじゃないやなかったっけ？」

「だって、あそこ。生ぬるい人ばかりなんですもの」

「そっか。やっぱな、そうなるよなあ。姉ちゃんの言ったとおりだったろ？」「っ！」

そのやりとりで、なんとはなしに理解する。ってか、開閉器っていう名字も同じだし。

ちるとちゃんって子は、とぐるさんの妹さんで。

姉であるとぐるさんと同じ部を避け、アドバイスを無視してまでもロボコン部へと入部して……以下略って流れてここに来たんだろう。

「二年、五頓鉄雄！ メカニック志望っす！」

いきなり、野太い声が自己紹介する。

ちるとちゃんに続いて入ってきたのは、背は低いけど、ものすごいがっしりとした体をした——筋肉質で固太りに見える、いがぐり頭の少年だ。

「自分はっ、先般のロボコンを見て」「見るならこっちだ、いいか？」

一瞬にして、アルミが工具ベルトを巻いている。

少年を手招きしたその足元には、見たことの無い、古そうなロボットが鎮座している。

「まばたきすんなよ？ わかんなくなるぜ？」

言って、アルミの手が踊る。一分、二分——ものの三分しないうち、確かにロボットだった機体は、ひと固まりの部品の山に変わってる。

「男は追試。十分で組めたら、まあ認めてやる」

「アルミ!? あなた、十分ってそれは」「いえ、やるっス」

少年——五頓くんは、学生かばんから工具を取り出し、ずつしりしやがむ。

「いつでも合図くださいっス」「んじゃ——始めな」

「やれやれ、アルミにも困ったものね?」

とぐるさんは肩をすくめて、ドアの向こう、困ったように表情を消す細身の少女に声をかける。

「ごめんね? 次はあなた」

「一年。弓部ひのき。ドライバー志望。反射神経。自信ある。」

かちやりと、踏み出す足は金属音。つてかこの子——

「見ての通り、左足は義足。けど、運動に。問題ない。」

ああ、僕らの反応を警戒してたんじゃないみたい。この子、単に表情が薄いんだ。

ぼさぼさとした前髪に隠れる瞳もどこか掴みどころなくぼやけて——なのに、生命力
つていうか、意思の強さみたいなの、すごく感じて。

「僕の考えたテスト。君がクリアしてくれたの?」

だから。表情を引き出したくて、問いかけている。

「匂ったから。八問目で」

八問目——全問中でただ一つ、“同じ長さ”の二本を引いた問題だ。

「匂った?」

「危ないって。それで、油断しなかった。だから。十問目。ひっかからなかった。」

「そっか——すごいんだね、君って」

「タクト先輩の方が、すごい。ロボコン。見てて。思った。」

口の端が、ほんのりほころぶ。これ、多分、頬笑みかけてくれているんだ。

「先輩じゃないよ、同級生。同じ一年でしょ?」

「でも。部活、ドライバー、先輩」

「そっか。君がいいなら、それでいいけど」

こつくりうなずき、僕に初めてできた後輩、弓部ひのきは僕の真横に並んでくる。

後輩って……おねえちゃんとは全然別の意味で、なんだかかわいいもの——っ!!!?

「あ、ごめんねタクト!? 痛かった?」

「いや、平気……おねえちゃんの足、軽いから」

「!!!? どーせおねーちゃんの足はちいちゃいですよー!」

な、なんだろう。おねえちゃん、急に僕の足をふんづけ、ぶうっと頬を膨らせちゃって。
助けをもとめてとぐるさんを見れば、とぐるさんはクスクス笑って——

「ああ、ラストね。お待たせ、入って? 自己紹介ね」

——コホン、咳払いをひとつして、ドアの向こう……うわ、背が高いな——顔だけ隠れ、

学生服だけのぞかせている少年を呼び寄せる。

「あー、ぼくは春原長閑です。長い閑って書いて、のどかと読みます。ええと、オペレーター志望です。シミュレーションゲームとか好きで、この前のロボコンを見て、作戦とか考えさせてもらえたら、すごい楽しそうだなって思っ、て、入部希望を出しました」

わかりやすい。言ってることも、行動も。

銀縁メガネでひよろ長い顔は、おねえちゃんとはもう物凄くちがつてるけど——なんとなく、空気っていうか雰囲気っていうか……人懐っこそうなどころだけが妙に似ている。

「それでぼく、ロボット自体もすごく好きなんです。だから他のことでも手伝えることがあつたら、なんでもやるから言っ、て下さい」

ひよろりと一礼。なんとなく、みんなから拍手が飛び出してくる。

「さて、これで一通りの自己紹介は終わったわね」

とぐるさんがちらりと目線を送る先では、五頓君の手の中で、綺麗にロボットが組み上がってる。アルミ、感心したみたいな顔してる。

「新入部員のみんなは、悪いけど今日はわたしたちの活動を見学してくれる？ 全国大会終了までは、基本、見て盗む方向で」

とぐるさんの声に全員がこくり、素直に頷く。僕たち、初期メンバーの三人も。

「けど部長。先輩四人がお揃いじゃないときもありますよね？ そういうときには」

「ああ、そうね」

問いかけたのはちるとちゃん。おねえちゃんじゃなく、部長って呼んでる。

「部室への出入りは自由にするから。もし、自分の先輩と一緒になつたとき、相手の邪魔にならないようなら、担当範囲を教わって？ そういう返事で、いいかしら？」

とぐるさんの返事に、ちるとちゃんはゆっくり考えてからうなずく。

この姉妹の間には、お互いを試しあうような緊張感がみなぎっている。

「それじゃ、部活を始めましょう」

※ ※ ※

「あ、タクト？」

「なに？ おねえちゃん」

いつもの放課後。いつもの窓際。オレンジ色に染まる教室。

いつもと同じに長い影は、けれどいつもと違った形。—— あ、窓枠にまだミケがいる。いつもだったら一足先に部室に直行してるのに、なんだかちよつと珍しい。

「ごめんね？ 今日、先には部室にいつててくれる？」

「え？」

言われて、ポカンとしてしまう。

「なんでそんな？ あ！ なんかミケと用事なの？ なら、僕終わるまで待つてるけど」

「ううん？ ええとねっ——そのっ」

ミケがシユタつと、おねえちゃんの肩に乗っかる。

ほっぺを舐める振りをして、ぼそりと囁く。

（“女の子の買い物”とでも言っとけニヤア）

「あ！ ああ、そうなの、女の子の買い物なのっ！ だから、タクトが一緒だと、ちよつとおねえちゃんこまっちゃうの」

「……………そうなんだ」

ミケのつぶやき——僕、地獄耳だから聞こえちゃってるのに。

ってか、でも……………ミケがこんな風に、しかも、他の生徒も残っているにもかかわらず、おねえちゃんにアドバイスするなんて、めったやたらにあることじゃない。

「わかった」

それだけ大事な——そうして、僕に隠さなきゃいけないことなら、うなずくしかない。とたん、おねえちゃんは明らかに、助かったって顔をして——心が少し、苦しくなつて。

「遅くなるかもしれないけど、部活にはちゃんと出るつてとぐるちゃんに言っておいて？」
言つて、おねえちゃんはくりりと僕に背を向ける。

歩きだしちゃう——急いでいるのかなんのか、僕の返事も聞かないままに。

「わかった。あの、他に何か伝えとくことはある？」

「ううん、無い」

振り向いて欲しくてかけた言葉への短い返事は肩越しで。

「そっか、じゃ、いつてらっしやい」

「うん、行ってきます。またあとで」

またあとでって、そんな一言にホっとする。

そのまま一度も振り向かず、おねえちゃんはミケと教室を出る。

ドアは閉じずに、けど、角を曲がれば見えなくなつて……………すぐに足音も消えてしまつて。つていうか、ああ——置いてけぼりにされるだなんて、僕、はじめての……………少なくとも、記憶を失くしちやうてからこつち、一度もなかった経験なんだ。

「……………おねえちゃんかミケ、いつつもそばに居てくれるから」

つぶやいて。けれども “だよ” も、“まあニヤ” も返つてこない。

唇が急に冷えた気がして、教室が空っぽになっちゃった気がして、心細くて。

「――部室行こうつと」

部室にいけば、みんなで騒げば、きっとこんな心細さは消えるから。

「あれ？ 今日弓部一人か」

言つて、そうかと思いだす。今日は水曜。とぐるさんは七時限めまである日だった。

「メカニックチーム。工場。なにか作る」

「あ、そうなんだ」

ぼつり、弓部が解説してくれる。アルミと五頓君とは、意気投合――つていうのとはちよつと違うな。――師匠と弟子、親方と見習いみたいな感じに最近どんどんなってる。

「なんだろ？ ジゲンを改良するのかな？」

「かもしれない。違うかもしれない」

「まあね。だよね」

……会話が、ぶつた切られてしまう。

ああ、誰か早く来てくれないかな。みんながいると気にならないけど……弓部と僕との組み合わせつて、話がうまくつながらないみたいだ。

けど、ちるとちゃんは、とぐるさんがいない部室にはほとんど来ないし……

「あ、春原は？」

そうだ、春原は確か、弓部と同じクラスのはずだ。

「春原。先生に呼ばれた。いつも、雑用手伝わされてる」

「ああ……そういう感じだよね、彼」

「わからない。わたし、頼んだことない。雑用」

「あー、そうなんだ」

……会話が、ぶつた切られてしまう。

これは結構、間がもたないかも。

おねえちゃんが居てくれさえすれば、もっと上手に話題をふってくれるから――弓部とだつて、楽しい時間をすごせるのに。つてか、せめてミケでもいてくれたなら、ブラシかだけでものんびりやつて、時間をなんとかやりすごせるのに。

「先輩こそ」「……？」

不意に、弓部がボソリと呟く。

「一人、初めて。マーシャさん。いない」

「あー……うん」

「タクト先輩？」

いけない。ちよつと今ぼく、相当ヘコンじゃつてた気がする。

弓部は怪訝そうな顔。先輩として、余計な不安をかけちゃいけない。

「おねえちゃんは、ちよつとが用事あるらしくって」「ケンカ?」「つ!!!!!!?」

弓部の勘っ!!!!!! この鋭さは——いや、待て、今のは別に鋭くないのか?

だって、僕とおねえちゃん、別にケンカしてるとかじゃないし……

ってか、いっそハッキリしたケンカなら、仲直りだってできそうなのに……

「聞く。私でよければ。何があったか」

「いや——別に、ケンカってわけじゃないし……」

「でも。二人だけだと、出来ることないし。部活」

「あー………だよね」

弓部も、同じことを感じてたと知り、なんとはなしにホっとする。

操作練習をしようにも、アルミも五頓くんもなくちゃ、ジゲンmk.1のセッティング
すらできないし。イメトレ的なシミュレーションをするにしても、とぐるさんかちるとち
ゃんが新しい仮想敵を設定してくれないと——もうさんざんやりつくしたことの繰り返し
にしかなくていけない。コミュニケーションを深めようにも、弓部は、基本無口だし、僕
も自分から話題を思いつけるタイプでもない。おねえちゃんがいるときみたいに、楽しく
会話ができるかどうか——もうまるつきり自信が無い。

ドライバー組ふたりだけだと、本当に、部活は少しも動かないんだ。

「……………」

けど、だ。かりにも僕は先輩なんだ。

「あー………本当に、なんか、タイミング悪いとかそういうだけの話だと思っただけだよ」

考え考え、言葉を選ぶ。後輩である弓部がせっかく作った糸口を、自分のモヤモヤで断
ち切るなんて——先輩のすることじゃない気がするから。

「おねえちゃん、今日、ミケと一緒に用事があるって言うんだ。それで、僕もついてい
うとしたら、断られちゃって」

「????」

ポカンと、弓部が口をあけてる。

まるつきり、理解不能とでもいいだけに——ってか!!!? 自分で言葉になおしてみれ
ば、あまりにも大したことじゃなく聞こえすぎ、だから慌てて言葉を継ぎ足す!

「いやさ、僕ほら、記憶喪失じゃない。で、おねえちゃんすっごく心配してくれて——い
つつも、僕と一緒に行動してくれてたんだ。だから………こういう風な、理由も言ってくれ
ないような別行動って、初めてで——それが、少し不安な気がして」

「心配。なくなってきた?。とか。先輩、治ってきて」

「治るって………記憶喪失のこと?」

思いもかけない一言に、そうなのかなあと考えてみる。

「いや——僕、昔のこと、今もやっぱり全然思い出せてないよ」
「治る。戻るとは、違う。かも」

いつもの口調で。なのに弓部は、少しだけ自信がなさそう。
けれど、気になる。治ると戻るのが違うっていう、その一言の続きが聞きたい。

「それって、どういうこと？ 記憶が戻らなくても、記憶喪失って治るの？」

「ん……。私、医者、違う。なんとなく、思っただけ」

「いや、それを聞かせてよ。弓部が、なんとなく思ったこと」
だって、弓部は理屈じゃなくて感覚だから。

弓部の感じるなんとなくには、大事な何かがまじってそう。

「記憶に……。穴。ぼっかり？ な、感じ？ 記憶喪失」

「うん。そんな感じ。思い出そうとすると、触れないみたいなどころがあるんだ。そこだけが、本当にぼっかり、なにもない空間になつてるような感じで」

「その、穴——元の記憶じゃなく。別のことで埋まる、のも。治る、な、気が、した」

「別のことで……。記憶の穴が埋められる——」

わかる——気がする。

「確かに……。記憶喪失になったばっかりのころって——ことあるごとに失くした記憶のことを気にしちゃってたけど——最近は、そういうの、ずいぶんへってきた感じだし——」

弓部のなんとなくが正しいのなら、それは——失くした記憶という巨大な隙間が少しずつ、記憶を失くしてから得た経験で、埋まり始めてきたって理屈になるんだろうか？

「けど——」

おねえちゃんに置いていかれた、たったそれだけの出来事が、こんなに僕を不安にするなら、やっぱり、その穴は少しも埋まってないような気がする。

「けど。何？」「えっ？」

弓部の問いに、自分が眩きをもらしてしまっていたのだと知る。

「けど。の後。先輩、辛そうな顔してた。から。」

「いや……。ちよっと、納得できた気も、わからないような気もしちゃってさ」

「納得した。のに、わからない？」

(ガラッ！)

「すみません。おくれてしまいました」

突然開かれたドアの向こうに、ひよる長い春原の体が見えている。

少しかがんでドアをくぐって、ひよる長い顔はあたりを見回す。

「あ——タクトさんと弓部さんだけ、ですか？ あのっ——マーシャさんは」

「えっ？」

困ったような表情が、僕の不安を膨らます。

「もしかして、部活きてないんですか？」

「うん。なんか、ミケと二人で出掛けるって。そんなこと、全然言っていなかったのに」

「えっ!? あ——ちょっと、まずいかもしれません」

「まずい——って。春原、何か知ってるの?」

聞けば、春原がますます困った顔をする。

「ええと……ですね」

視線は全く落ち着かず、僕と弓部を歩き来している。

「あ、私。外す?」「あ、ごめんなさい。少しだけお願いします」

何かを察したらしい弓部が部室を出て行く。

ドアが閉まるのを確かめて、春原が僕に近寄り、抑えた声で話し始める。

「あの、ぼくですね。昨日の帰り、妙な外国人に聞かれたんです」

「妙な外国人?」

「小柄で、スーツ姿で、金髪なんですけど髪の毛が随分薄くて……四十才くらいに見えました。なのに、すごくギラついた雰囲気——遠くからでも目立ってたんです」

不安がどんどん膨らんでいく。質問をしたいけれども、確かめたいけど、上手く言葉に整理できない。

「学校を出て坂を下った角のコンビニにあるじゃないですか。あそこで、きよろきよろ、何か探し物をしてるみたいで——通りがかりに目があっちゃったら、『可和越第二高専の学生さんだね?』って、流暢な日本語で話しかけられて。で、はいつて答えたら、この写真を見せられたんです」

春原が、カバンからタブレットPCを取り出す。

ネットにつないで——なんか、文字ばっかりのページに繋がたみたいだ。

「あ、ここです。高専ロボコンスレ」

【ロボコン】高専ロボコン専用スレッド371 【高専】の文字列がクリックされる。

またズラズラとたくさんさんの文字が表示されれば、春原はctrl+fで検索窓を開いて、“マーシャ”と入力して検索——つて!?!?

「えっ!? おねえちゃんが何——うわっ!? めちゃめちゃ沢山ひつかかってない!？」

「このストレッチし始めたの、僕も最近なんですけど。ログみてる感じだと、とぐる先輩、薩仁高専三年の島津鬼子さん、鉄艇高専二年の九鬼水姫さん、三人が、三大ロボコンアイドルって呼ばれてすごい人気だったみたいなんですよ」

……一つ一つの言葉はなんとなくわかるんだけど、全体として意味がわからない。

「——でもですね……その構図に最近変化が——あ、あった、この写真だ」

ttp/から始まる文字列がクリックされる。

“別のサイトにジャンプしようと——”のページがサクッとスキップされて——

「わ!? なにこれ、おねえちゃんの写真だっ!」

無邪気な笑顔をいっぱいにかべ、わたがしをパクついている。

これ……関東甲信越大会のときの——まだ、帽子とサングラスで変装をする前だ。

「なんで、こんなのが——」

「偵察用に、カメラもビデオもたくさん持ち込まれてますからね。その中の誰かが、マーシャ先輩のことを盗み撮りしたんでしょう」

「盗み撮りって——」

確かに、おねえちゃんはすごく可愛い。

写真を撮りたくなる気持ちもわからないはないけれど——でも、それをネットに掲示するとか——って!? もしかして、ここって!?

「このページって、そのっ——誰でも見れるの? 簡単に」

「もちろんですよ。ネット上で公開されてるものですからね」

繋がる——繋がってしまった気がする。悪い予感と、ヤな記憶とが。

「その外国人が——今表示されてるこの写真を、春原に見せた?」

「ええ。写真用紙にプリントアウトして、いかにも家族写真みたいな感じで——」

『すまない、この娘のことを知らないだろうか』って」

「それで——春原は、なんて?」

「いや……だって、いかにも怪しいでしょう。ネットから拾った写真で人探しって。

だから僕、適当にトボけといたんです。『直接の知りあいじゃないですけど、顔くらいはしってます』みたいな感じで。マーシャさん、すごく目立つから知らないっていうのも不自然かなって判断しまして」

「うん。そしたら!？」

『遺産相続の件で、この娘と話合わなければいけないんだ。誰か、取り次いでくれそうな人を知らんだろうか?』って、妙に具体的なこといつてきたんですよ。だから、『それは、学校の事務局で取り次いでもらうのが一番確実だと思います』ってぼく、答えました。

そしたらその男、『なるほど、ありがとう』って言って、逃げるように立ち去ったんです」

「その話、春原はおねえちゃんに?」

「はい、単純に変なヤツでも、本当に遺産相続だとしても、伝えた方がいいと思って」

「いつ伝えたの?」

「伝えたのは今日の昼休みです。1.Aまで話しに行こうと思ったら、ちょうどトイレからマーシャさんが出てきたところで。ちよっとタイミング悪いなあって思ったんですけど、

『春原くん、こんにちは』って挨拶してくれたから——その流れで、そのまま」

「そしたら、おねえちゃんはなんて」

「すごく厳しい顔をして、それから、取り繕うように笑ったんです。『ありがとう。みんな

なには内緒にしといてね?』って。ぼく……だから、誰にも話すつもりなかったんですけど——まさかタクトくんも聞いてないなんて思わなくて……」

「いや、ありがとう。話してくれて」

思い出す——TV中継があると知ったあのときに、あれほど慌てて顔を隠したおねえちゃんの動揺を。借金があるせいだって僕らに説明してくれた、あのいたたまれない表情を。(春原があつた外国人が、単純に変なヤツなら、まだマシだ。もし、借金を取り立てに来た人だったら……)

「!? た、タクトくん、どこへっ」

「もちろん、おねえちゃんを探しにだよ。とぐるさんたちには、遅くなるけど部活でるって伝えておいて——」

言ってる途中で、ふと気づく。これって、おねえちゃんと全く同じ台詞だ。

おねえちゃん、相手が誰だか心配で、だから必ず帰ってくるって……約束したんだ。

「だけど、どこへ行ったかわかるんですか? マーシャさんが」

「えっ!? それはっ、えとっ——」(ガラッ)「……!?」

開いた扉の向こうに、弓部。

「戻ってくる。マーシャ先輩」「えっ!?!」

慌てる、焦る! ってか、どうしたらいいんだろうっ!?

春原を見れば、ひよろ長い顔も慌ててる。ならっ、弓部は——

「話、終わった? なら、部活」「っ!」

——何一つ、いつもと変わらぬ弓部の言葉が教えてくれる。

そうだ、普段と同じ部活で……いつもどおりの雰囲気で、おねえちゃんを迎えてあげるのがきつと一番いいんだと。

「春原、部活だよ! 部活しよう」

「あ、ですね。なら、ええっと——」

春原がタブレットPCの画面を切り替える。

なにか——ああ、表計算ソフトで作ったグラフっぽい。

「あのですね、ドライバー組の二人の模擬戦結果に、最近明確な偏りが出始めたんです。

この表なんですけど……グラフ1がタクトさんがジゲンmk1、弓部さんはアルケル改を操縦しているとき。グラフ2が、その逆のケースですね」

「そんなデータ取ってたんだ」「当然じゃないですか」

頼りなく見えても春原も、とぐるさんの面接をクリアした部員なんだと思ひ知る。

「グラフ。見たい」

義足を鳴らして近づいて、弓部もひよこっつとPC画面をのぞきこんでくる。

「両ケースとも、ここ一週間ほどで急に偏りが出て来てるんですね。つまり——」

「勝率。あがってる。私」

弓部の声にわずかだけれど感情が覗く。その唇が、誇らしそうに微笑んでいる。

「確かに……特に、弓部がアルケルのときだよ。妙にかわされるっていうか——」

「狙いすぎ。タクト先輩は」

「狙いすぎ？」「そう」

弓部が、不意に右手を動かす。

「春原。今、私、指何本？」「え？ そんなの、急すぎて」

「先輩は？」「立ててた指なら、二本。人差し指と小指」

「正解。先輩は、すごく目がいい。耳も。観察力がものすごい」

弓部の言葉に、春原がうんうん頷いている。

「ってか——そうか、弓部が見ても、僕は観察力すごいんだ。」

「でも、だから。狙いすぎる。十割で撃とうとするし、避けようとする」

話が戻る。戻ってるけど——僕にはイマイチよくつかめない。

「それって、どういうこと？」

「相手の能的なら、十割、一番あたる。けど、生き物相手なら、狙いすぎ」

何故だか瞬間、窓へ視線を走らせて、弓部の言葉が、いつもよりさらにゆっくりになる。

「生き物相手。九割の方が、あたる。十割よりも」

「九割の方が……十割よりも？」

「そう。相手。生き物。だから」

「えっと……相手が生き物だから、十割よりも九割の方が、当たる」

繰り返せばこくり、弓部が浅くうなずく。

……困った。全く意味がわからない。

「…………あー、でもですね！ 結局のところ、先輩の方がまだまだ全然勝率いいんですし」

沈黙に耐えかねたのか、春原がフォローしてくれる。

弓部はまるで表情を変えず、ただ認める。

「そう。だから先輩、凄い。わたしより」

「んー」

ほめられたのか、アドバイスされたのか自慢されたのかわからない。

けど、まあ。おかげで一気に部活の空気になった気が

「んにゃあ」「っ！……？」

鳴き声、そしてカリカリ窓をひっかく爪の音。

不意を突かれて驚くけれど、いつもどおり、いつもどおりと意識しながら窓を開ける。

「おかえり、ミケ」

そうして、一心に耳をすませる。

おねえちゃんの足音——いや、だけじゃない。足音みつつに、会話も聞こえる。
ああ、アルミと五頓くんで行き合わせたんだ。

「ふうん、アルケルを改造したの？」

「ああ、ちるとが新しい回避法をおもいついたって言いだしてさ。で、とぐるさんが設計考えて——実際やれんじやねえかって話になって」

「へえええええ、面白そう！　どんな回避法なの？」

「つと、そりやナイショだ。ゆみべえ向きな交わり方って気がするからよ。タクトチームに情報流しちゃツマンネエだろ？」

「そうなの？　けど、残念！　タクトはきつと、当てちゃうよ？」

おねえちゃんの声。楽しげな声。——その声を聞いた瞬間に黒いモヤモヤは消えうせる。
おねえちゃん、僕を怒ったり嫌ったりじや、やっぱりないんだ。

その外国人が、借金とりかどうかを確認するために、僕に心配をかけないように——
僕を一人でおいてつたのは、ただそれだけの理由だったんだ。

「タクト先輩？　嬉しそう」

「え？　あ、そうかな」

鋭い、弓部は相変わらず。

つてか、だからこそ……きつと、あんな意味不明なことも言えちゃうんだろう。

「今日も、やるっぽいよ、模擬戦。とぐるさんも戻ってきたら、体育館だ」

「なら。勝つ。今日は」

「僕たちも、負けるつもりはないよ」

うん、そうだ。おねえちゃんさえいてくれるなら、どんなことにも負けはしない。

弓部にも、全国大会でも。

そして、もし、借金とりが押しかけてくるのだとしても。

※ ※ ※

何も話さず、何もたずねず。おねえちゃんのナビに従い弓部と戦い、二勝二敗ときれいに分けて部活を終えて。僕たちととぐるさんとアルミと揃って、九頭劬荘へと帰宅する。

今日はアルミの食事当番で、肉じゃがと旬のサンマとなめこのお味噌汁とをいただいて、部屋に戻って、おねえちゃんの次にお風呂に入って、まずはおねえちゃんのお布団を敷く。

と——おねえちゃんが真剣な顔で問いかけてくる。

「ねえ、タクト。今日、おねえちゃん一緒に寝ていい？」

「一緒にって？ いっつも一緒に寝てるじゃない」

「じゃなくて、ひとつのお布団で」

「あ、お布団も一緒ってことか」

そんなこと尋ねられたの初めてだ。

ほんのちよつとだけ驚いて、けれどもすぐに思い当たる。

……おねえちゃん、ひよつとしたなら不安なのかも。

(つていうか、だよね——どうしたって、不安に決まってる)

春原の言ってた外国人が本当に借金取りだったとしても、ただのへんなヤツだったとしても、探したあげくに見つけられなかったのだとしても。

「うん、一緒に寝よう。その方が僕も心強いし」

「ほんと？」

言うやいなやでおねえちゃんはお布団にもぐり、ぼんぼん、と自分の横を叩く。

ミケももう、本棚の上で丸くなって——電気を消して、僕も布団にもぐりこむ。

「えへへへ、こうして寝るのは久しぶりだねえ」

お布団の中は案外狭くて、おねえちゃんがびったりしてきて、あつたかくて——だけど、僕はほんの少しだけ寂しくなっちゃう。

「久しぶりなの？ 僕……思い出せないみたいで」

「あ、そっか。そうだったっけ」

記憶喪失のことを、まるで忘れてたみたいな口ぶり。

「ユジノサハリンスクではね？ 寒い夜は本当に寒くて、よく一緒に寝てたの。お布団じやなくて、ベッドだったけど。木の、大きな古いベッド」

「そうなんだ」

「マーシャ、あの頃はね？ 今よりずうっと怖がり。毎晩しくしく泣いてたの。そうしたら、いっつもタクトはね？」

動く、右手が勝手に——そうすることがごく当然であるように。

しずかに、しずかに、ぼん、ぼん、と。

おねえちゃんの柔らかな髪を、ただ繰り返し、そうつと撫ぜる。

「あ……」

嬉しそうな、心地よさそうなおねえちゃんの声。

「そう。いっつもこうしてくれたたんだよ？」

頭が忘れてしまった記憶を、体がちゃんと持っていてくれた。

——それがおねえちゃんを喜ばせたことが、ただ嬉しくて。

「タクトの手はおつきいね。おつきくつて、とってもやさしい。怖いのが消えてくみたい」
その一言に、ドキッとす。

そうと気づかれないように、なるたけゆっくり声を出す。

「おねえちゃんは……今も、怖いのか？」

「今は、タクトといるから平気。でもね、ひとりのときは……やっぱり、怖いよ」
夜の中、溶けてしまいそうな細い声。

「あのね？」

震え出す、声。髪をぼんぼん、変わらず撫ぜつづけてるのに。

怖い気持ちを少しでも消してあげたくて、それが無理ならわけてほしくて、頭をそらうと抱きよせる。

「なあに、おねえちゃん」

「あのね」

すうつと、おねえちゃんは息を吸う。

「おねえちゃんは、いつ死んじゃってもおかしくないの」

「っ！！！？」

「マトリョーシカつて、タクト——知ってる？」

固い声。震えてる声。なのに、とつても優しい声。

何か言わなくちゃいけない気がして、何一つ聞いちゃいけない気がして、ただ僕は——
問われたことに、答えてる。

「覚えている……それは、覚えているよ。入れ子人形のことだよね？」

「そう。女の子のお人形の中に、ひとまわり小さなお人形。その中に、もうひとまわり小さなお人形。いつつと、むつつと、お人形の中に、お人形」

一拍。永遠のような気がする沈黙。

「おねえちゃんは、ね？ マトリョーシカの中身なの。だから、マーシャ——マトリョーシカつていう名前なの」

わからない。言われてる言葉の意味が、わからない。

わからないのに、哀しくて——とても怖くて、どんどん不安になってくる。

「どういふことなの？ おねえちゃんがマトリョーシカの中身つて。いつ——」

言いかけて、言葉が喉に詰まってしまつて。

けど、聞き間違えであつて欲しくて、何かの誤解であつてほしくて、絞り出す。

「——いつ………死んじゃつてもおかしくない、つて」

「おねえちゃんなのに、マーシャ小さいでしょう？ それはね？ マーシャは大人にならないはずだからなの。そういう予定で、創られて産まれてきたからなの」

「創られて……つて」

聞きたくない。知りたくない。

知ってしまったば——おねえちゃんが遠くにいつちやうような気がして。

「あのね？ タクト。おねえちゃん……ちよつとだけ苦しいかも」「あっ!？」

抱きしめていた。思いつきりに、おねえちゃんの頭を僕の胸へと押しつけ。

「ごめつ」「ううん、もう平気だよ？ ありがとう」

手を緩めれば、おねえちゃんはなぜだか小さな笑みをこぼして、お礼まで言つて。

そしてスウつと、息が吸われる。

「マーシャ、調整クローンなの。臓器移植用の。ソーニャ——タクトとマーシャのママとね？ その旦那さんの間に産まれた女の子……ターニャ。タチャーナっていう子が、マーシャのオリジナルだったの」

おねえちゃんの声の震えは、もう止まっている。

「ターニャは心臓の病気だったの。だから、マーシャが創られたんだ」

「っ!」

透き通るほどに綺麗な声が、僕の心を貫き通す。

繋がる——意味が繋がってしまう。理解だなんて、したくないのに。

「マーシャは、ターニャに心臓をあげるために創られて、産まれて来たの。だけど、ターニャは移植手術に耐える体力がつかないままに死んじゃって……」

心配がする。本棚の上、ミケがわずかにみじろいだ。

ミケも、聞いている。聞いた上で、なお、黙ってる。

「マーシャね？ だからそのとき……役立たずになっちゃったんだ」

「そんなことっ」「お願い、聞いて？」

おねえちゃんの人差し指が、僕のくちびるにあてられる。

胸が裂けそうで苦しくて——それでも、おねえちゃんがそう望むから、言葉を止める。

「ターニャが死んじゃってすぐ、ソーニャの旦那さんは、ソーニャと別れて出ていっちゃったの。ソーニャは……それでも、マーシャのママになってくれたの。マーシャをちゃんと育ててくれて、マーシャを、タクトのおねえちゃんにしてくれたんだ」

淡々と、ただ事実だけをお姉ちゃんは言葉にしていく。

だから、嫌でもわかってしまう。

心臓が弱かったオリジナルのため——おねえちゃんは、心臓を強く“調整した”クローンとして、創られた。

何かを得れば、何かを失ってしまうとか、そんな簡単な話じゃないとは思うけど……その結果……いま実際に、おねえちゃんの成長は止まってしまつてる。

いや、けど——成長が止まっているなら、それなら、逆に！

「でもさ、だとしても、おねえちゃんが死んじゃうだなんてことないよ。成長しないなら、

その分きつと長生きなんだ。それで、僕とミケと一緒に、暮らしていけばいいんだよ」
「だからね？」

僕の言葉に答えずに——ふわり、おねえちゃんの声が笑う。

「生きてる間に、マーシャは居場所をつくってあげたかったんだ。マーシャが……おねえちゃんがいなくても、タクトが暮らしていける、居場所を」

「っ！！！」

「可二高専は、ヒトガタ部は……タクトの居場所になったよね？ おねえちゃんとミケがいなくても、タクトはもう一人でやっていけるよね？」

「そんなことっ！」

抱きしめる。思いつきりに、絶対話さないように。

「大丈夫だってば！ おねえちゃんは死んだりしないよ。僕が守ってあげるから！
つてかさ、不安ならお医者さんについてみようよ。それで、検査してもらおうよ」

「優しいね、タクトは」

おねえちゃんの手が、きゅうつと僕を抱きしめ返す。

とくん、とくんと、小さな鼓動が伝わってくる。

「だからね？ タクトの居場所。おねえちゃんが絶対、守ってあげる」

「えっ？」

「命令。離して。タクト」

「！！！！？」

指が、手が、腕が勝手に『離して』しまう。

抱きしめたいのに、絶対離れたくなんてないのに——おねえちゃんを、僕が守らなきゃダメだのにつ！！！！？

「おねえちゃんっ、何でっ」

「命令。動かないで。タクト」

立ち上がろうとした足が、半端な姿勢でとまってしまう。

動かない。動けない。必死で動こうとしてるのに、そうしたいって思ってるのに——頭と体が完全に分断されたみたいに、力がまるきり入ってくれない。

「命令………そのまま——夜明けまで、動かないでね」

言って、おねえちゃんが立ち上がる。

カーテンの隙間から差し込むわずかな光が、その表情を浮き上がらせる。

おねえちゃんは、涙をこらえて……震えてる。

パジャマを着替えるその指先も震えてて——なかなかボタンが止まらない。

白いシャツにグレーのカーディガン。デニムのズボン。

めったに見れないズボン姿が——おねえちゃんが行ってしまうと告げてるようで。

問いかけたいののに、追いかけたいののに——まるで体が、動いてくれない。

トットと、ミケが本棚から下りたつて、おねえちゃんの胸元に飛び、抱っこを強いる。

(話しちゃつて、良かったのニヤ?)

ミケの囁き。おねえちゃん力はなく、うなだれるようにひとつ頷く。

(……そうしないと、タクトずうつと探しちゃうもの。マーシャのことと、ミケのこと。もしも……帰ってこれなかったとき)

「!?!?!」

引き留めたいのに呼びかけたいののに——手も足も喉も応えてくれないっ!

(このミケ様に任せろニヤ。大丈夫、必ず戻ってこられるニヤ)

(うん、だよ。そのときは——タクトに病院につれてかれちゃうかな)

笑う。おねえちゃんが、ガラスのように。

とても固く、とても冷たく。とても——綺麗に。

(でも、ね。もし、ダメだったときのため)

ミケを抱いたまま、おねえちゃんが一步、二歩僕に近づいてくる。

腕さえ、手さえ、指でも動けば——おねえちゃんを捕まえられるのっ! そうして、

絶対離さないのっ!?!?!

「タクト。これが最後の命令。おねえちゃんたちが、夜明けまでももしも帰れなかったら——おねえちゃんたちを探したら、ダメ。おねえちゃんたちは病気の治療でロシアに帰って行つたつて。二度と会うことはできないけれど、そこで幸せにくらしているって、そういう風に思いなさい」

イヤなのに——僕の意識よりもっと深くが、その命令を刻んでる。

僕自身、僕が一番コアなところに、抗いようのないほど、強く。

「そうして、ね?」

背伸びして——コツンと、おでこがくっつけられる。

「絶対、幸せになつて」

触れているのに、あつたかいののに、けれども何も伝えられない。

いつそ泣きだしてしまいたいのに——涙の一つも零せない。

いかないで欲しい、せめてこのままいてほしい——

「じゃ、おねえちゃん出かけてくるね?」

——なのに、おねえちゃんのおでこは僕から静かに離れてしまう。

「心配するニヤ。ミケさまが何とかしてやるニヤ」

なにを、だろう。今も少しもわからないけど、もうミケにしか頼れない。

ミケ、おねえいと——それさえ言えず、目でおいかけることさえできず——ミケを抱いたまま、おねえちゃんがクルリ、僕に背中を向けてしまう。

振り返らずに、音を立てずに、おねえちゃんが——行ってしまふ、何も、できない。追いかけれない。おねえちゃんにそう、命じられてる。

……意思の全てを集中しきって命令しても、指一本、まぶた一つも動かせない。潰す覚悟で絞りだそうとしてみても、叫びどころか、溜息一つももらせない。視界はずっと、おねえちゃんが去って行ったドアをぼんやり見てる。

おねえちゃんのこととはちゃんと見えてた。けど、ドアからはピントが外れてる。……ああ、焦点距離さえ、今の僕にはあわせられないんだ。

聞こえてくるのは、秒針が刻む時の音だけ。

一秒ごとに、おねえちゃんは僕から遠ざかっている。

のに、どの一秒さえとどめられない。どの一秒さえ追いかけるために使えない。

ただ、時だけがどんどんと、過ぎ去り、過ぎ去り、過ぎ去っていく。

夜明けまでって、おねえちゃんはそう言った。

そのときまでに、もしおねえちゃんたちが帰らない——いや、帰れなければ、二度と会えなくなるって、わかる。

なのに、少しも抵抗できない。

おねえちゃんの命令は、僕の意思さえ上回り、僕の体を支配し——っ!!?!

(じゃない。じゃないぞ、僕。理解するんだ)

どのくらいの時間を無駄にしまったのか——それでも、ようやく僕は気づく。

(命令だ。命令なら、常に最新のものが最優先だ。常に上書きされるんだ。じゃなきゃ、

撤回が出来なくなるだろ?) そうだ、僕の理解は正しい、間違いない)

なら、抗うんじゃない、従えばいい。ただ、僕の深い部分を納得させればいいんだ。

(よし、じゃあ思い出そう。思い出して考えるんだ。おねえちゃんの最後の命令はなんだった? ロシアに治療で帰ったんだと思いきわこと。そうだ、それも正しい。けど、その続きがあっただろ? 『そして、ね?』って——それは命令のつづきのことばだ。接続されて、ひとつつながりで初めて全部のひとつの命令だ。だろ?)

そう、僕は命令されている。最後の、最新の命令を。だから、僕は——

(『幸せに』ならなきゃいけない。そうするために、そうなるためには絶対につ!)

「おねえちゃんっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

叫べたっ!!!!!!? ってっ!!!!!!? うわっ!!!!!!?

ガッ! ——ドドドドドドドッ!!!!!!!!!!

急に動いた体を制御しきれずに、立ち上がりかけた姿勢のまま本棚に倒れこんでしまつて。置かれてた本や物たちが、一気に崩れ落ちてくる。

「んだっ!!? おい、何の騒ぎだっ」

まだ起きてたのか、アルミが部屋に飛び込んでくる。

「タクト？ お、おいっ！？ お前、何泣いてんだよっ？」

言われて、気づく。けど、涙を吹いてる時間も惜しいっ！

「行かなくちゃっ！ 早くいかないよ、おねえちゃんミケがっ！」

「待ってっ！ おい、行くなってどこだよっ！？」「っ……っ！」

腕にしがみつくアルミを引きずり玄関を出て——けれども、そこで止まってしまふ。

右か、左か、まっすぐなのか——そんなことすらわからない。

「そうだよっ！？ ミケが何か手がかり残してくれたかもっ——」

街灯の下、必死で瞳を凝らす——けど、何一つさえ見つけられない。

「ああっ！ くそっ」「落ち着けてタクトっ！」「だって！ おねえちゃんがっ」

「落ち着かなければ、時間を無駄にするだけよ」「っ……っ！」

とぐるさんまでが起きだして——っか！ そうだ、とぐるさんならっ！

「とぐるさん、知りませんか！？ おねえちゃん、行きそうな場所とかっ」（パンっ）

乾いた音——っか——とぐるさんが僕を——ひっばりたい。

「同じことを言わせない。状況がわからなくては、私もアルミも力になれない。そして、状況を把握している人間は、タクトくんだけ」

「あ——」

そうだ。僕が説明しなきゃ——アルミもとぐるさんも、何が起きたかわからないんだ。

「叫び声と、なんかすげえ音がして、タクトが倒れてたんだ。一人だけで」

「一人だけ？」「おねえちゃんたち、出かけちゃったんですっ！ だからっ！」

「タクト、置いてけぼりにされたみたいなんだよ。倒れてる間に」

「そうです、僕を置いて、二人だけでっ」

「目的は何？ マーシャさんの」「目的っ——」

アルミが説明してくれて、とぐるさんが質問してくれて——少し、まわりが見えてくる。

「……おねえちゃん、多分、借金とりのところに行っただと思えます」

「借金とり？ 予選のときに怖がっていた？」

「はい。きのう春原が、おねえちゃんを探してる怪しい外国人に声かけられたって——」

……短いとぐるさんの質問たちが、僕の混乱を解体していく。

自分でさえも整理しきれなかった事実が、どんどん解きほぐされていくのがわかる。

「タクトくんは、どうして倒れていたの？」

……おねえちゃんが、いつ死んじゃってもおかしくないっていったことと。命令されて僕が動けなくなっちゃったことだけは、話しちゃいけないような気がして——

「それは……体が、急に重くなったっていうか——ええと、突然、眠くなっちゃって」

——その二つだけは誤魔化しながら、知ってることを僕は残さず伝えきる。

「——薬、かしらね。マーシャさんには、そこまでする必要があった」

重苦しそうにそう言って、じつと、とぐるさんが眼鏡越しに僕を見る。

「つまり——“借金取り”とマーシャさんがいつていた何者かと、タクトくんを絶対に合わせるわけにはいかなかった。それだけ強い事情か——あるいは、危険があるのよ」とぐるさんのおかげで完全に整理がついた。

やるべきことと、やっちゃいけないことが僕にも、見えてくる。

「それでも、タクト君は——」「行きます」

答えて、必死で頭を下げる。

「一人で行きます。でも、僕、おねえちゃんがどこにいるのかわからなくて、だからっ甘えであろうと迷惑だろうとすがるしかない。時間を少しでも手に入れるため。」

「お願いです！ とぐるさんの知恵を貸してくださいっ！ おねえちゃんがどこいるのか」

「そんなことなら簡単よ。アルミ？」

「えっ？」

「タクトくん、言ってたでしょう？」 『ミケと一緒に』

「あ！ あ、そっか！ こんなときのための首輪だっけか！」

「そうよ。“迷子よけのお守り”なんでしょ？」 「あっ！」

アルミが部屋に引き返し、スマートフォンを手にすごい勢いで戻ってくる。

「まってるよ、タクト、すぐだぜ」

「そうだ、そうだよ、そうだった！」

アルミがくれたミケの首輪には、迷子よけのお守りが——小型発信器が仕込んであるって、そういえばそんな話を聞いていたっ！

「おねえちゃん——そうだよ、ミケと一緒になんだからっ！」
「すごい。とぐるさんとアルミはすごい。」

真っ暗でねばくつ重たい霧を、ほんの一息で切り裂いてくれるっ！

「出たぜ、ここ——ん……っと、川島の外れの方か？」

「ああ……廃工場のあたりみたいね」

「くそ——発信機に近づくかねえと精度がでねえか」

範囲を絞りこめないらしく、アルミがいまいますしそんな声を出す。
とぐるさんの表情さえもが、その傍らで凍りついている。

「廃工場以外なら土手と雑木林——どうあれ、事態は深刻みたいね」

「廃工場って、どこですかっ！？」 僕「走っていくの？」 一時間かかるわ」
「言って、とぐるさんは自分のスマートフォンを取り出し、電話をかける。」

「じれったいけど、焦るけど——とぐるさんの方が僕よりずっと冷静だとはわかってる。」

「九図励荘の、はい、そうです。——ええ、大至急で」

ただそれだけで電話を切れれば、すぐとぐるさんは部屋へと向けて引き返す。

「って、え？」「支度がいるわ。アルミも動きやすく目立たない格好に。工具も必要最小限に。いったん可二高専によってジゲンを連れていきましょう」

「なら実習服だな。一分で着替えるぜ」

「あのっ！？ ジゲンって！！？」「タクシーがすぐここに来る。話はその中で」

「けどあの、危ないかもだしっ！ 僕ひとりです」「バカかおめえは！」

どなり声。アルミの部屋から、ドア越しに。

「危ねえんなら、なおさら一人じゃいかせねえんだよ！ 仲間だろ、アタシらはっ」

「あ——」

溢れてくる。心強さが、感謝が、喜びが、もうぐちゃぐちゃに膨れ上がって！

「——うんっ、ありがとうっ！」

けど、だからこそ今はそれだけしか口にしない。

二人の準備の邪魔になったら、おねえちゃんもそれだけ危険になる。

（そうだ。感謝もなにも、全部おわってから伝えればいい。なら、今は——）

何をすれば、と考えたなら、とぐるさんの手配の意味も見えてくる。

タクシーの中でなら、近づきながら、受信の精度をあげて範囲をしばらくみながら、おねえちゃんに近づく——あるいは救出するための作戦を、タイムロスなく立てられる。

（ああ、そうか——いつもと同じだ——僕らは、チームで動いてるんだ）

なら。本番が始まるその時までには、二人を信じて任せることが——いや！

できることはある。ほんの小さなことだって、きつと一秒を稼ぎ出せる。

だから門を出、道に立つ。

——タクシーが迷わず僕らを見つけてくれるよう、目印になっておくために。

※ ※ ※

「こんなところでいいんですか？」「ええ」

タクシーのドアが開いた瞬間、とぐるさんの返事も待たず外に出ている。

わずかばかりの街灯の明かりが、少し離れたところに照らす、大きな建物たちの影。

あれが、とぐるさんの言った工場群なんだろう。

「ここで二時間、待っていてください。ライトとエンジンは切って。戻らなければ、警察に電話をお願いします」

「ええっ!？」「頼みます」

真剣な声に振り向けば、とぐるさんが運転手さんに何か……多分、一万円札を渡してる。運転手さんは怯えたように頷いて——けれどもすぐにライトを消してエンジンを切る。

「わかりました。お得意様の頼みですしね——二時間です」

「ええ。お願いします。行きましよう、アルミ、タクトくん」

歩き始める。先頭を行くとぐるさんは、アルミのスマートフォンも見えない。

タクシーの中で見た地図が、もう完全に頭の中に入ってるみたいだ。

「どう？ アルミ」

「ここまで近づきや誤差もねえだろ——とぐるさんの読みどおり。C.3つて建て物の中」

「どの道からも直接は見えない、他の建物に守られた場所、ね」

ためいきのような一言に、僕の心も覚悟を深める。

タクシーの中で説明されていたとおり……おねえちゃんは、なにか犯罪に巻き込まれてしまっている可能性が高いのだろう、と。

「重くねえか、タクト」「全然。それより——もう少し近づいたら」

「ああ、わかってる。アタシらは止まって、黙る」「うん」

その危険が無視できないからこそ、僕らはわざわざ可二高専に立ち寄った。タクシーの中移動しながら、アルミはジゲンを組んでくれた。

相手が暴力に出てきたときに、あるいは相手の注意を逸らす必要があるときに、僕たちが一番上手に使える武器は——ジゲン m.k.1 に他ならないから。

その練習を僕たちは、ずっと重ねてきているのだから。

(けど……)

組んだ状態のジゲンを、こんな長い距離運ぶだなんて、初めてだ。

「心配ねえぜ。ジゲンのルールも改良してる。見た目ほどにはヤワじゃねえから」

「うん」

わきおこりかけた余計な不安を、アルミがすぐさま消してくれる。

だから落とさないようにだけ注意して——ボロボロになった門を抜け、廃工場の敷地内へと、足音を殺し侵入していく。

何年前のものなのか、薄く地面を覆ってる枯葉かゴミかがカサカサ気触りな音を立てる。

遠い街灯のわずかな灯りを、サーチライトのようだと感じる。

建物近くは、瓦礫が落ちて近づく辛い。崩してもしたら、警報を鳴らすのも同然だ。

だからじわじわ、通路の跡を進むしかない。遮蔽が取れず——一步一步が恐ろしい。

「……見えたわ。あれがC.3」 聞こえるか聞こえないかの、とぐるさんの囁き。足が止める。

僕だけ、数歩を先へ踏み出す。

「日本で銃を所持しているなら、相手は何らかの暴力のプロです。そうであっても、通報を受けた警察が最初から大規模出動をかけることはないでしょう。パトカー一台に警官二人——悪くすれば自転車かバイクの警官一人が、まずは様子を見にくるだけです」

「それは……相手の警戒を強めるだけに終わってしまう、と？」

「プロであるなら、警察とぶつかるような愚は犯しません。いくつも準備をしている筈です。おねえちゃんから秘密を引き出すことが目的ならば、おねえちゃんを誘拐して逃げる可能性が高くなります。そのための手段も経路も、すでに整っているはずですよ」

「なら——」

眼鏡のフチが、震える指に持ち上げられる。

「逆に、誘導できないかしら。逃走経路を予測して、そこで待ち伏せる」「っっ！！」「瞬間、喉に言葉が詰まる。すごい、この人——どれだけ柔軟な頭なんだ。」

とぐるさんの提案は、僕の思考をフル回転させ、最善策だと確信させ——いや。

「アルミ——ミケは、無事なんだよね？」

「え？ ああ、ああ。信号の発信元は——動いてるぜ、狭い範囲でだけど」

「なら、ダメです。素晴らしい作戦だけどそうしちゃったら、ミケが——」「あっ」その呟きが、続く絶句が——とぐるさんたちも解ってくれたと伝わってくる。

おねえちゃんは無事。“借金とり”が秘密を聞きだせず、ミケが今も動いている。

なら、ミケがおねえちゃんを何らかの形で守ってくれてるか——あるいは、ミケを殺すと脅しをかけることにより、“借金取り”が秘密を得ようとしているのか、その両方かだ。

そこにもし警察が来て、“借金取り”がお姉ちゃんを連れて逃走に入ると決めたなら——そのときは、ミケは恐らく……殺される。

そんなリスクは犯せない。

だから、自然と口になっている。

「任せてください。ここから先は、一人やれます」

「一人でって！？」「その方が、危険を減らせるから」

頭の中から、甘えも不安も消えている。

残っているのは、おねえちゃんだけ。

おねえちゃんを助けるための最善だけが、くつきり浮かび上がってる。

「ジゲンもセッティングしてもらってる。ここから先、作戦会議をしている余裕も多分ない。出たとこ勝負でぶつかるのなら——僕ひとりだけの方がいい」「っっ！」

相手は銃だ。どんな些細なミスでさえ、犯した時点で僕は負ける。

「ふたりには、ここに来るまでに助けてもらってる。ここから先は——僕の仕事だ」

「けどよっっ！」「わきまえなさい、アルミ」

短く。とぐるさんが何か言いかけたアルミを黙らせる。

「私たちが同行しても、メリットよりもリスクの方が大きくなる。足手まといなのよ」
言い切つて。眼鏡の下のとぐるさんの眼は、もうすでに“次”を見つめてる。

「タクトくんの携帯も、マナーモードになつてゐるわよね？」

「はい、タクシーで指示されましたし」

念のため、確認しなおす。つてか——

「むしろ電源、切つておいた方が」

「いいえ、連絡手段は絶対にいる。何か、必要があつたらすぐかけて。相談でも、して欲しいことでも、なんでも。出来る、出来ないはこちらで判断するから」

「わかりました——ありがとうございます」

「時間はかけられるだけかけていい。けれど万一、失敗したら叫びなさい。叫びを聞いたら、私たちはタクシーのところまで退避して警察を呼ぶ。そのときは、タクトくん。私たちのことは一切気にせず、その状況での最善を尽くしなさい」

「はい」

この人は正真正銘のリーダーなんだと、僕の全てが理解する。

「了解です。部長」

領けば、アルミは僕に、ボールの入れた袋を手渡してくれる。

「カラビナでベルトループに下げられる。一応、三つ入つてるけど」

「それなら荷物にもならないし、念のため三つ全部を持ってくよ」

「そっか。それと——こいつはオマケ」

工具——コンビネーションレンチだ。

「ショートの14・17だ。胸ポケットにいれとけ。イザつてときの弾よけにな」

「ありがと」

気休めだけれど嬉しくて。胸ポケットにしまつてボタンをきっちり閉じて。

「五階の左手、手前から四番目の部屋が向かい合わせの窓になるわ。慎重にね」

「ありがとうございます。それじゃ、また」

言つて、二人に背中を向ける。

ここから先は、振り返らない。

おねえちゃんを助けて——全てはその後でいい。

「……………」

C.2の中は、外から見たよりひどい状態だ。

いたずらで侵入されて荒らされたのか、自然に崩れたのかわからないけど、天井からも壁からも、たくさんコンクリがはがれてる。

廊下の奥のドアはことごとく開けられていて、空の金属ラックが部屋から廊下に倒れ出ている。室内も——廊下以上に荒れてるんだらう。

(ジゲンのために、水平な足場を取れるかどうか——いや、先のことを考えすぎだ)
そもそも、ジゲンを使うかどうかは今わからない。

(予断を持つな。目の前のひとつひとつに対応すればそれでいい。“僕”なら、それで絶対間に合う)

不思議な自信が、心の奥底、深いところからにじみ出てくる。

自信というか、それは確信——冷めきっている興奮だ。

(そのために——僕はいるんだから)

余分な全てが、僕の頭から抜けて行く。

失くしてしまったはずの記憶が体を、動かしている。

瓦礫の重なる階段も、足音も立てず登っていける。

一階——二階——そして三階。

隣のビルで、男が激しく怒鳴ってる。

「いいかげんに吐けっ！ P R O T O : ϕをどこに隠したっ！」

プロト・フィタ——聞いた瞬間、ひどく懐かしい気持ちが無意にこみあげる。

なんだ、これ——いや、落ち着け。今は、階段を上り切るんだ。

四階——五階。

「頑張るな。まだだんまりか？ だが、いつまでもそんな手が通じると——っ！」

軽い音、男の声に警戒が走る。

「動くなよ。お前から先に始末をしてもいいんだぜ？」

「撃てるもんなら撃ってみろニヤ」

ああ、ミケだ。ミケが男を——“借金取り”を威嚇してくれてるんだ！

「旧ソのネコに、噛み切られてもいいならニヤ」

(だよ、そうだよな。“ミケ”なんでももの)

威嚇であつてもなんであつても、引き金を引く一瞬を、ミケが見逃す筈がない。

ミケを殺そうと銃を撃つなら——それはイチかバチか、命をかけた駆け引きになる。

(つて、え？ なんて——こんなこと、僕は——)

わからない。この確信が、失くした記憶の一部なのか。それとも、僕の願望なのか。

(けど——かまわない。わからなくても、勝てばいい)

五階の廊下を、急いで、けれども焦らず進む。

一階よりも、散らかりようも破損度合いも増している。

それでも、物音ひとつ立たない。

僕の体は、僕の足は——ごく当然に、そうなるようにと歩いている。

ひとつ、ふたつ、みっつ——四つ目のドアも開いている。

「オレの忍耐力にも限度つてもんがある」

この男がミケを撃たないのは——撃てないのは、戦闘を恐れてなんかじゃない。
(おねえちゃん……こいつに怪我させられたんだ)

情報を引き出せるよう、しゃべれる程度の——けど、放っておいたら、死んじやいかねない大けがを。

(ミケは、こいつの保険なんだ。おねえちゃんに万一のことがあったとき——情報をミケから引き出すための)

時間だ。時間を無駄に出来ない。

さっきまで感じてた余裕の全てが焦りに変わる。

「持たなきや、そんなときがお前の終わりニヤ」

「どうかな？ そのときが楽しみだ」

けど、だからこそ観察する。

僕の取り得は“目と耳”だって、みんなが教えてくれたから。

「ニヤら」「必死だな、バケネコ。小娘の限界が近そうか？」

(——いや——必死なのはミケだけじゃない)

ミケに注意の全部がいつて、“借金とり”は、他へ意識が向いてない。
今なら、やれる。

ジゲンを抱えて位置をずらして、ボールをレールにセットして。

あとは撃つだけ——なのに、撃てない。

確信できない、だから、撃てない。

万が一にも外してしまえば、おねえちゃんが死んでしまう。

そんなギャンブルは仕掛けられない。

『狙いすぎ。タクト先輩は』

弓部の言葉が思い出される。確かに、弓部のいったとおりだ。

人間の次の動きを絶対になんて読み切れない。

ましてや、ヤツの手はミケを追いかけ動き回ってる。予測さえもがつけられない。

(弓部なら——それでも九割で撃って当てるんだろうけど——)

けれどもここに弓部はいない。

僕には弓部の真似はできない。

僕の手で救わなきや、誰もおねえちゃんを助けられない。

(僕に出来るやりかた——僕の長所は——)

考えるまでもない。“目と耳”だ。けど、それで本当に足りるのか？

『だから先輩、凄い。わたしより』

弓部がそれを認めてくれた。いや、弓部だけじゃなく、とぐるさんさえ——っ！！！

(そうだよ、とぐるさんだ。とぐるさん、答えを示してくれてたじゃないかっ！)

『逆に、誘導できないかしら』

そうだ、とぐるさんの言葉は正しい。

外部条件を整えることで人の行動は誘導できる。

確率を——十割にまで持ち込めるっ！

(出来る、僕なら。僕とジゲン——お前とならば)

自分の指を動かすように、ジゲンを操り照準をつける。

窓は割れてる。こちらも向こうも。

間に流れる風も無い。

なら——

「警察だ！そこを動かくなっ！」

ただ一言で、誘導できる。

ヤツは振り向く。振り向かないではいられない。

訓練されきった動き、プロの動き——予測通りの動きをとって。

(十割だ)

確信とともにスイッチ。

(ジュバツ!!!!!!)

聞きなれた音を立てボールがレールを滑って、そして。

(バシ!!!!!!)「うおっ!?!」「シキヤア!!!!!!」

その名を呼ぶより一瞬早く、灰色の疾風が男を襲う。

走りだす——跳べると、知ってる。たったの十メートルくらい。

「よくもおねえちゃんをつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

跳ぶ。窓枠を思いきり蹴りつけて、足から——向こうの窓へまでっ！

「ミケっ! 避けてっ!」

両目を抑え、男は大きくのけぞっている。

見えてない、回避行動をとる余裕も無い——ならっ！

(ドカアアアアアアっ!)「ぐおぶっ!っ」

直撃する! 僕の足裏がヤツを捉えるっ!!

「タクトっ!?!」

おねえちゃんの声、よかった! 生きてるっ!!!!!!

(てかっ!)

ヤツの体重が見た目以上に重くって、強い反動にハジかれる。

落ちっ——

「このおっ!!!!!!」

——ぎりぎりのとこで引っ掛ける。

「……うん」

見てたんだ。目をそらさずに、閉じずに見ててくれたんだ。

「あ——」

自分で、驚きの声が出る。

全力で振り下ろされた自分の右手を受け止めるため、潰れてしまった左手からは——黒い血——いや、オイルがボタボタ流れ出してる。

無数の金属部品と配線。ショートした電流が、パチリ、一瞬の放電を見せる。

「僕——ロボットだったんだ」

「ロボットじゃないよっ！ タクトは、人間。わたしと同じ、創られた人間だけど、でも、ちゃんとした人間なんだよ！」

「マーシャ、しゃべるニヤッ！ お前、自白剤打たれてるのをっ」「いいの、ミケ」

静かに。とても静かに、おねえちゃんは笑う。

「隠したくないの。タクトに、もうこれ以上」

自白剤。

ミケの言葉で、全てがつながる。

だから、おねえちゃんは一言たりともしゃべらなかつた。

秘密を——僕を、守るため——息さえ殺し、ひたすら耐えに耐えていた。

「おねえちゃん、怪我は？」

右手一本動けば十分。聞きながら、おねえちゃんを縛るロープの結び目を引きちぎる。

「大丈夫。縛られてたところが痛いだけ」

「こいつのせいだっ！」「タクトっ！？」

沸き起こりかけた衝動を、無理やり潰して押し隠す。

「わかってる。縛るだけ」

殺すなど、おねえちゃんが僕に望んでる。

けど、おねえちゃんが苦しんだ分——思いきりキツく“借金取り”を縛り上げる。

「これで良し。おねえちゃん、立てる？」

「うん、平気」「あっ……？」

おねえちゃんはふらっと体を起こしかけ、僕の体にそのまま倒れこんでくる。

いや、違う。抱きしめられてる。

ぽんぽんと、お姉ちゃんの手が僕の背中を叩いてる。

泣いてるこどもをあやすみたいに、優しくやさしく、くりかえし。

「タクトは、平気？」

「あ——」

零れ出る。混乱しててわからないけど——多分、一番聞きたいことが。

「僕は——」

確信、してる。でも、尋ねずにはいられない。

「僕が“創られた”目的は——人を殺すため、だったの？」

「そう。最初はその目的で創られたって、ソーニヤいった。けどね、タクトはまだ誰ひとり殺して無いよ。未完成ってことになってるから」

「未完成ってこと？」

「プロト・アー、最初の試作機が創られたのは、米・ロ冷戦の最盛期。このミケ様さえまだ創られてないことだったそうニヤ」

おねえちゃんの言葉をもう止めようとはせず、ミケが解説を重ねてくれる。

「開発目的は、ニヤい部潜入と破壊工作。完全に人間と見分けがつかない、けれど人間を圧倒するヒューマンフォーム・ロボットを敵組織内にまぎれこませて、ニヤかからじわじわ、疑心暗鬼を呼び起こしながら壊してくのニヤ。ま、ミケと似たり寄ったりの仕事ニヤ」

「ミケも——僕と同じ？ 機械じかけなの？」

「違うニヤ。ミケはキマイラにや。開発技術がもう失われたのは、同じニヤけど」

「キマイラ——合成生物？」

「だけど、そういう全部は計画倒れに終わっちゃったんだって」

おねえちゃんの呟きに、ミケは小さく尻尾をゆらす。

「旧ソ連が崩壊して、冷戦が表向きには解消されて、関連予算は大きく削られちゃったらしいのニヤ。けど、多分担当者のポストを温存し、給料をもらいつづけるために“工作室”

は細々と維持され続け、ミケも無駄飯を食い続け——そこに、大天才が登場したニヤ」

「マーマには創ることができたの。汗もかき、呼吸も乱れ、脈も体温もすっかり備えて。

それでいて人間と変わらない体重と外見と、人間を圧倒する能力を持つ——新しい命を「理解、する。潰れた機械の左手が全てを明かしてくれている。」

「それが……僕。——プロト・ファイタ」

「マーマはタクトを守ったんだよ？ 完成を隠して、家族のひとり。マーシヤの弟にしてくれたの。マーシヤ、とっても嬉しくて、一緒に楽しくらしてたんだよ？ けど——」

話しづらそうな沈黙を、ミケがスイッと引き取りつなげる。

「アイツ——ソーニヤの別れた旦那がタクトの情報を売ったのニヤ。徴発されたタクトは、戦闘プログラムを実装されて、けど、ものすごくそれに抵抗したのニヤ」

「嫌がったの、苦しんだの、怖がったの、タクト。自分が換えられてしまうことを」

「……………ああ、それで——」

思いだす。あるとき、ラブホテルの警官の言葉を。

僕が苦しむ——おねえちゃんに首筋を差し出して——そして——

「だから、一緒に逃げることにしたの」

きゅっと、僕を抱くおねえちゃんの手がこもる。

「ソーニヤも、そう言い遺してくれてた。実際、ソーニヤが死んじゃった後、もうロシアには私たちを守ってくれるものも、私たちが守らなきゃいけないものもなくなってた」

「ロシアから逃げ出すまでは、追手を撒くため、どうしてもタクトの力が必要だったニヤ」

「日本に入って、当座の隠れ場所を見つけて——そこで、タクトに限界が来たの」

「だから……おねえちゃんは僕の記憶を、消してくれた」

「うん」

おねえちゃんが、くっついてた体を少しだけ話す。

真正面から、鼻と鼻とがくつつく距離から、スマレ色の眼が僕を見る。

「ママから手順は教わっていた。タクトが、それを望んでいたの」

「そうだったんだ……………」

つながる、全てが。頭は全部を理解している。

けど——心——もしも僕に、ちゃんと心があるのなら……それはもう、ぐっちゃぐっちゃに混乱している。

「……………ねえ、タクト？」

「なあに？ おねえちゃん」

どのくらいかの沈黙を、おねえちゃんの囁き声が掻き消して。

「どうやって、タクトはここに来てくれたの？ おねえちゃん、動かないでって」

「そのあと、命令してくれたでしょ？ 『幸せになって』って」

「うん」「だからだよ」

混乱してても、この気持ちだけは変わらない。

「僕が幸せになるためには、絶対におねえちゃんが必要だから」「っ！」

スマレ色の眼が、みるみる潤む。

「そっか。えへっ、そうなんだ」

ギユウっ！ と、強く僕を抱きしめ、そして、おねえちゃんはまた少し離れる。

「ねえ……………タクト？」

「なあに、おねえちゃん」

「おねえちゃん、タクトにキスしたい」「っ！」

乾く。乾くはずなんてない喉が。

心臓がもしもあつたら、爆発をして死にそうなほど、体を何かがかけめぐる。

「ダメ？ かな」「ダメじゃない！ ダメなわけないよ、けどっ！」

自分からだってキスしたい。だって、僕はおねえちゃんのことを大好きで、けどっ

「でも……………だけど、僕は機械でしょ？ おねえちゃん、人間なのに」

「言ったでしょ？ 機械じゃなくて、タクトは人間」

「だって、僕、体が機械で——」「じゃあ、ひのきちちゃんは？ あの子の足も機械だよ？」
思わぬ角度の反論に、瞬間、思考が止められる。

「体の何パーセントまでが機械だったら人間だとか、そんな線引きできないでしょう？
体が全部機械でも、タクトは人間だったこと、マーシヤはちゃんとしてるよ？ 逆に、
体が全部人間だって、人間の心を失くしちゃったら、その人はもう人間じゃない」

止まった思考を、おねえちゃんの言葉が優しく満たしてくれる。

「体じゃなくて、心なの。人間であるかどうかを、決めるのわ」

理解する。理解できる。納得したいと、ものすごく強く願ってる。

「だけど、それでも——僕は自分を、信じきれない。」

「その“心”も——だって、プログラムされているんじゃない」

「プログラムなら、ただ命令に従うだけでしょ？ タクトは、その先を考えてくれた」

ちゅっと。ご褒美みたいにおねえちゃんの唇が僕のほっぺを濡らしてくれる。

「タクトは、自分が何をしたいのか考えた。幸せになる方法を考えて、それで、おねえち
ゃんと一緒にいたいって、自分の願いを見つけてくれた」

スマイレ色の眼が、ふわりと、笑う。

「それは、プログラムなんかじゃない——タクト自身の、心だよ」

「おねえちゃんっ！」「っ！」

キスをしている、僕の方から。僕の心の望むまま。

うるんだ瞳がゆっくり、うっとり閉じられる。

そうして、初めて僕は知る。

心は——こんなに甘いんだって。

※ ※ ※

駅まで、歩く。

みんなそろって、僕らを見送ってくれるため。

「残念。いきなり、退学なんて」

弓部の唇が下がってる。

珍しく、はっきりとした表情を出し、僕らのことを惜しんでくれる。

「仕方ないわ。マーシヤさんの治療のためなんですもの」

とぐるさんが、弓部の肩にそっと手を置く。

「ご病気が治ったら——いつでも会えるわ」
それが嘘だと、とぐるさんは知っている。

あの晩、あの後——何一つさえ聞かないで、僕の右手を解析し、左手の凶面を引いてくれたのは、ほかならぬとぐるさんだったから。

「だぜ！ きつとまた、すぐに会えるさ」

そして、壊れた左手をほぼ元とおりに作ってくれたアルミも笑顔で、嘘に乗る。

みんな、優しい。優しいからこそ、一刻も早く去らなきゃいけない。

僕らがここに居続けてしまうのならば、みんなを危険にさらし続けることになるから。

（殺さない以上……僕らには、あれで精一杯の対応だった——）

あの後、ミケの提案に従って、コンビニでお酒をたくさん買い込み、気絶している男に吞ませ。落ちていた銃を拾って、ヤツに握らせ、全弾を壁に打ち込んでから縄をほどいて。

「銃を持った男が廃ビルに立てこもってる」ととぐるさんに通報してもらい。

隠れ見えていた僕らの前で、駆け付けた——やっぱり警官二人だけだったパトカーが——
気絶したままの男を“保護”していった。

（結局、“借金とり”の正体は不明だったし……）

ミケが抜け目なく男の所持品を漁ってたのだけど——さすがに、身柄を特定できるようなものは、何一つ持っていないなくて。

……ヤツの組織が大きなものであるのなら、身柄はすぐに、解放されるかもしれない。

「そのっ……あ——いえ、寂しく、なります」

春原が、どこか歯切れの悪い声をだす。

っていうか、そうか——春原からしてみたら、『自分が教えた外国人の情報』と、『この退学』とが、直結してそうに思えちゃうんだ。

それは、ある意味正解だけど——あの情報で、僕らは滅茶苦茶助かったんだし……

「病氣、治療方法があるってわかったの、春原君のおかげだそうよ？」

「え？」

「遺産相続っていうお話。病院の情報も、そのときに伺えたんですって」

「あ、ああ。そうだったんですか！」

ぶんぶん、僕は全力で頷く。

春原の顔がみるみる緩む。

「なら、よかった、本当によかったです。どうか、お大事に。早く良くなってくださいね！」
っていうか、こっちこそ本当によかった、ホっとした。

春原が納得してくれて。

とぐるさんが、“春原の立場になって”考えて——春原を、僕らを助ける綺麗な嘘を、重ねてくれて。

「荷物、駅まで自分が持つツス」「わたくしも。ご迷惑にならないければですが」

五頓君が僕の、ちるとちゃんがおねえちゃんのバックに手を伸ばす。

おねえちゃんは柔らかくうなずき、ちるとちゃんの手にはバックを預ける。

僕も、同じに。けど、ミケが眠ってるバスケットだけは、変わらずこの手で運んでく。

「五頓君とは、あんまり話せなかったよね」

「自分は、メカ屋スから」

ぼりつと、五頓君がいがり頭を一つ搔く。

「練習試合で。そっちチームの挙動から。すげえたくさん、勝手に声を聞いてたツスよ」

「あ——」

お世辞でもなんでもないと、伝わってくる。

つてか、僕も勝手に、すごく沢山——声を聞いてた、支えられてた。

あの土壇場で、一瞬たりともジゲンの挙動を心配せずにいられたのは——ジゲンがそれに、忠実に答えてくれたのは——とぐるさんの、アルミの、ちるとちゃんの、五頓くんの、春原の、弓部の——そうして、おねえちゃんと僕とミケとの——部活の、みんなの力のおかげだったんだ。

四人だけじゃなく、新入部員を含めてみんな——僕ら、チームになっていたんだ。

「だね。うん、本当にそうだ」

満ち足りた気分で歩く。なんとなく、みんな何にも言わないままに。

………。駅。もつと遠くになればよかったのに。

「アルミ先輩。借りたい、ニッパ」

「ニッパ？　なんでそんなもの」

足が止まった瞬間に、小走りで弓部が近づいてくる。

「タクト先輩。第二ボタン、欲しい」

「へ？」

「ダメ？」

ボタンって、なんでそんなもの欲しいんだろう。

意味がわからず見回せば、みんななんでかニヤニヤしてる。

「えっと……」

「おねえちゃんは教えてあげない。自分で決めなさい？」

おねえちゃんは、ちよつとふくれたような顔。けど、瞳が優しく微笑んでいる。

まあ、いいか。弓部には世話になったし、ボタンくらいは付け直せばすむ。

「いいよ。好きなだけ持って行って」(パチン！)

言った瞬間、弓部がボタンを切り取っている。言葉の通り、上から二番目のヤツだけを。

「ありがとう。お守りに、する」

「あ！ お守りって言えば」

思いだす。アルミに僕、アレ借りっぱなしだ！

胸ポケットなんか全然使わないから完全にウツカリしてた。

「アルミ、これ——一回、洗濯して干しちゃったけど」

14.17のショートのコンビネーションレンチ。よかった、傷とかは増えてないっぽい。

「いいよ。やる。胸ポケットに戻しとけ。イザってときの弾よけにな」

「——うんっ！」

少し本気の混じった口調に、心の底からうなずいている。

いいものもらった。これ、僕たちのおまもりにしよう。

ってか！ そういえば、

「あの、おねえちゃん。あのときのタクシー代！」

「ああっ！？ そうだよね、とぐるちゃんに立てかえてもらっちゃってるんだよね？」

「貸しておくわ」

お財布を出しかけたおねえちゃんの手を、とぐるさんが優しく止める。

「治療なら、当座はお金が必要だろうし。元気になったら、返しに来て？」

「けど」

「部長の指示に従えないとでも？」

強権的に言い捨てられて、おねえちゃんが笑う。嬉しい顔で、困ったように。

「わかりました、部長。借りとくね？」

「ええ。無利子でいいから」

「ああ、そらいいな。お前らも五円ずつ貸してやれば？」

アルミの声に、みんながそれぞれ駆け寄ってくる。

弓部と五頓君が僕。ちるとちゃんと春原がおねえちゃんに、それぞれ五円を貸し付けてくれる。

「困っちゃったね？ タクト。借金だらけになっちゃった」

おねえちゃん、もう泣き笑いだ。

「そうだね、おねえちゃん」

答える僕も、なんか鼻声になってる気がする。カッコワルイ。

「ああ、タクト。さっきのレンチもやっぱ貸し。いらなくなったら返しに来い」

「わかった。それじゃ、借りとく」

頷いてるけど、これもやっぱり、嘘になる。

接点を全部消すために、携帯も何も解約をした。

奨学金も、現金書留で返済できると確認してる。

ミケに書類を偽造してもらって……きつと、名字さえ別のに換えると思う。

危険に巻き込まないために――

田中マーシャと田中タクトは、これきりみんなと、二度と会わないと決めている。

「ごめん。タクトくん、マーシャさん、少しだけいい？」

とぐるさんの不意の手招き。

時刻表のとき、なんだろう――電車のことかな？

「十年、待って」

おねえちゃんと二人近づけばその瞬間に、耳元に口が寄せられる。

「十年、ですか？」「待って、なにを？」

「私とアルミで作って見せるから。完全に人と見分けのつかない、ヒューマンフォーム・

ロボットを」

「ロー」

「公開されて陳腐化された技術なら――秘密の価値はなくなるでしょう？」

「あつ――」

視線を向ければ、アルミもニヤつき、手を振っている。

ふたり……そんなことを考えてくれてたんだ。

「ありがとう……とぐるちゃん」

泣きだしちゃったおねえちゃんを、とぐるさんの手が優しく撫ぜる。

「会いたい！ マーシャもとぐるちゃんたちにまた会いたいよ」

「会うのよ。必ず。場所は……そうね、可二高専の正門前で」

「わかりました。十年したら、またそのときに、絶対に」

踏切が鳴る。電車――いつまでも伸ばしてたって仕方ない。

「おねえちゃん、これに」

「うん、そうだね。――乗らなくちゃ」

「そう。じゃ、しばらくはお別れね」

「あのっ」

言っても、仕方ないことだけど……でも、言わずにはいられない。

「ロボコン――最後まで参加できずにごめんなさい。全国大会どうか、頑張って」

「いわれるまでもねえや！ なあ！」

アルミの声に、みんな――笑顔で頷いてくれる。

「こつちのことは任せとけよ。お互い、元気でがんばろうぜ？」

「うんっ」

握手する。アルミと、とぐるさんと、ちるとちゃんと、五頓君と、春原と、弓部と。

ホームにまでの見送りは断って、自動改札でみんなと別れる。

「じゃあ、また」

「またね！ みんな」

口々に、別れではなくいつかの再開を約束しあう。

十年後——みんなは何になってるんだろう。

僕たちは、どこにいて、どんな暮らしをしてるんだろう。

「……………おねえちゃん、僕たち、これからどこへ行くの？」

「決めて？ タクトが。おねえちゃん、どこにだっついていって行くから」

「そっか」

東上線は、池袋まで僕らを運ぶ。

その先は——ああ、どこだっつかまわない。

北であろうと南であろうと、おねえちゃんと、ミケと一緒になら。

「にやうん」

寝ていたミケが、バスケットの中、気持ち良さそうに体を伸ばす。

カリカリと、その後ろ足は首元を——

「あ」

そうだ、すっかり忘れてた。

「おねえちゃん、ミケの首輪。迷子よけのお守り」

「あ……………そうだね、これもだね」

残念だけど——これがアルミを危険にさらしちゃうかもしれないから。

「ミケ、ちよつとごめんね」

ミケも、全部をわかつてる。

大人しく、僕に首筋を差し出し出してくる。

「十年したら、また新しいの作ってもらおうな」

「んにゃん」

首輪をはずして、窓を開ける。

「おねえちゃん、一緒に」

「うん」

いちにのさんで指を離せば、首輪は風に流されて、あつという間に見えなくなる。

「……………行っちゃったね」

おねえちゃんの声は少しだけ寂しげで。

だから空っぽになった手で、おねえちゃんの手を包みこむ。